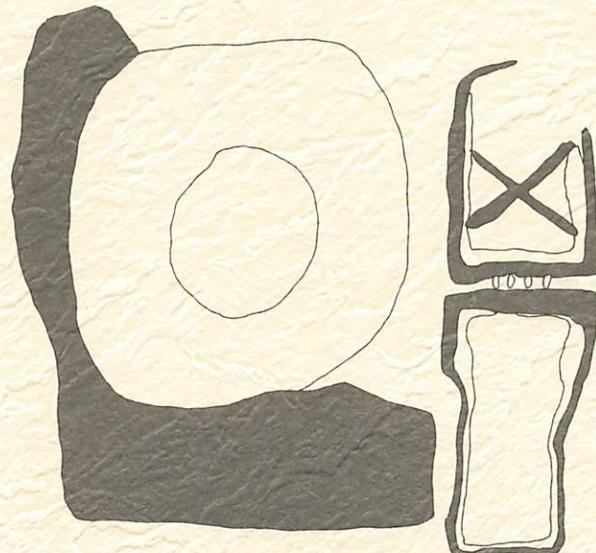


県史跡 御靈塚古墳

— 平成12年度 国庫補助事業 —



2000

熊本県鹿本町教育委員会

県史跡 御靈塚古墳

— 平成12年度 国庫補助事業 —

2000

熊本県鹿本町教育委員会



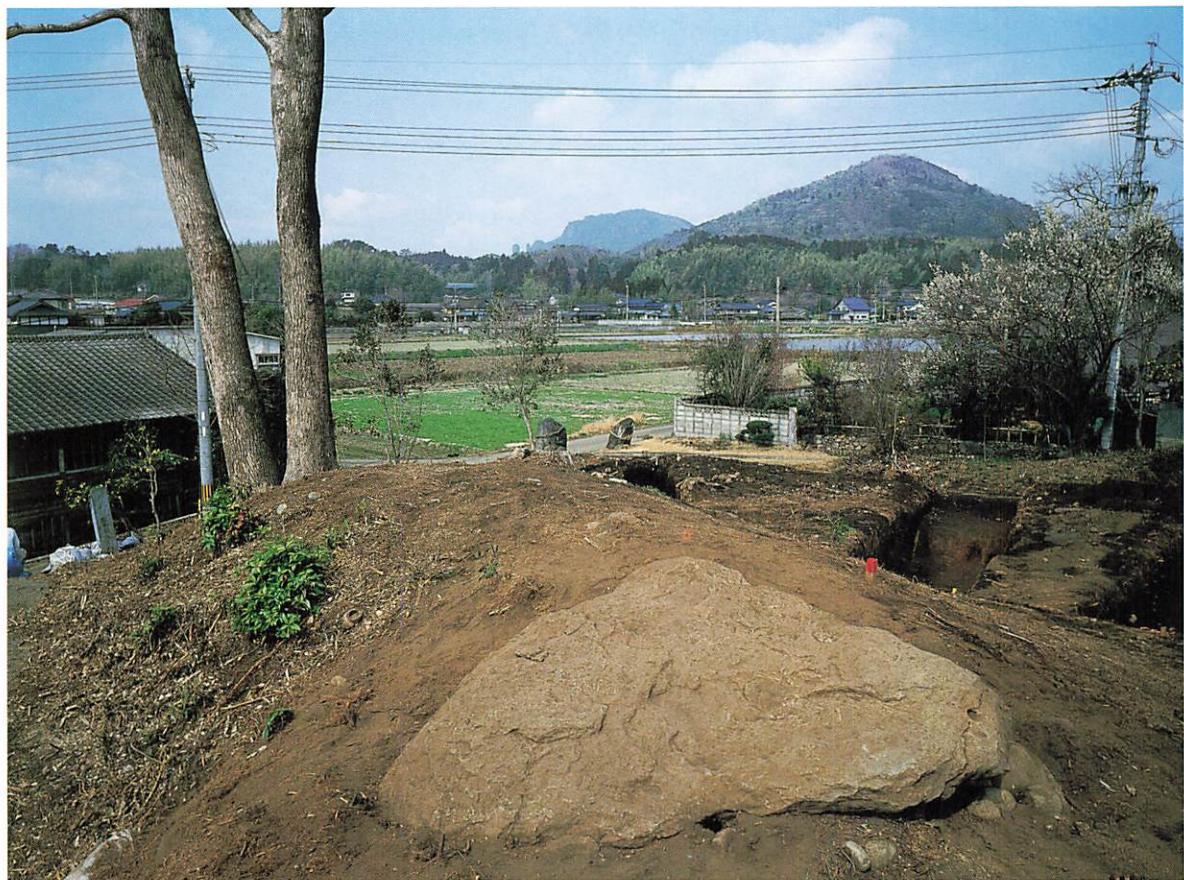
PL. 1 御靈塚古墳空撮（背後は日岡山）南東より



PL. 2 御靈塚古墳空撮（横を通る道路は県道鹿本・松尾線）



PL. 3 №8 トレンチ (南東より)



PL. 4 御靈塚古墳天井石露出状況 (背後は日岡山)



PL. 5 義道より玄門・玄室



PL. 6 玄室 右袖石裝飾狀況（連續三角文）



PL. 7 玄門より玄室奥壁（奥壁腰石右下に「靉」・「鞆」が描かれる）



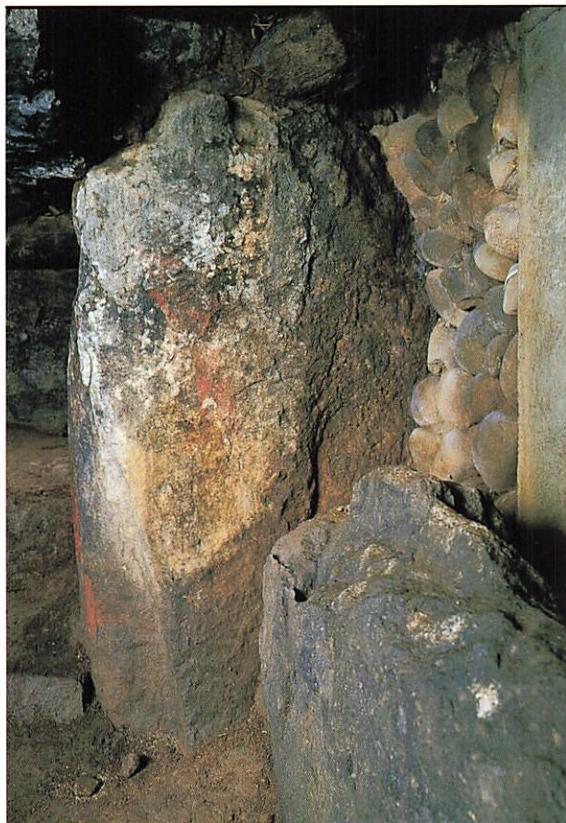
PL. 8 玄室左側壁裝飾（並列する同心円文）



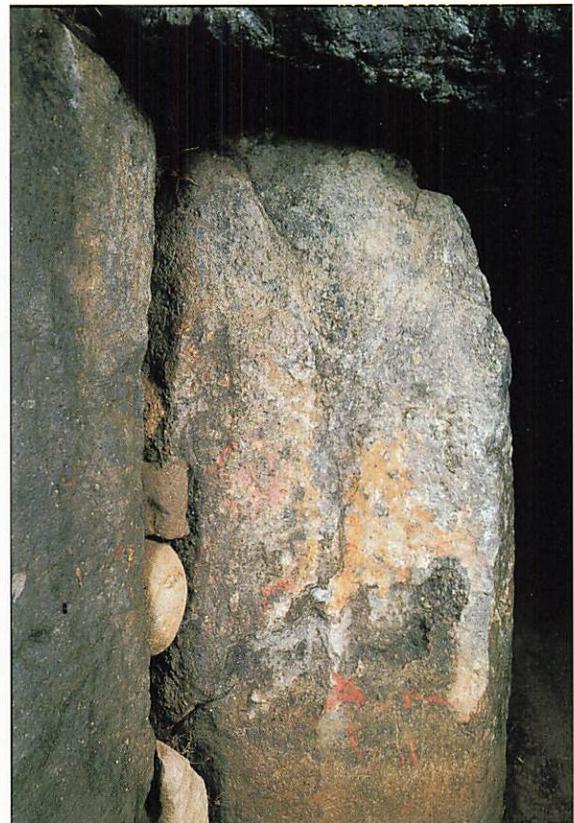
PL. 9 玄室内左袖石裝飾（同心円文）

PL.10 玄室右侧壁装饰 (右上, 盾, 右下, 鞍、左, 圆心凹文)





PL.11 玄門右袖石裝飾



PL.12 玄門左袖石裝飾



PL.13 玄室右側壁裝飾

－序 章－

御靈塚古墳は、県指定史跡「津袋古墳群」の南東部に位置し、菊池川流域の最上部に位置する装飾古墳であります。

もともと鹿本町は、大小五つの河川に育まれた地域であり、これらの流れとともに発展してきた町ですが、それぞれの流域にはそれぞれの歴史があり、多くの文化財や伝統文化が残されております。

その中でも御靈塚古墳は、町北部丘陵の南端にあり、流域に広がる広大な水田地帯を見渡せる所にあるため、古代縄文時代から生活の営みが行なわれてきたと推定される場所にあります。

これまで、昭和33年の山鹿高校考古学部 原口長之氏の調査で、石室奥壁の一部に装飾文様が確認され、同51年には熊本市立熊本博物館の富田紘一氏が、右側壁にも装飾文様が施されていることも確認されております。

昭和52年、熊本県の史跡に指定されていますが、幾度に亘る風水害により墳丘上の盛土が流出するとともに、玄室天井部に穴開きが見られ、石室の装飾壁画が損なわれる恐れが出てきたため、今回の「保存整備のための緊急調査」となったものです。

調査には、熊本県文化課並びに県立装飾古墳館の関係者の皆様に多大なご支援を戴き、さらには熊本大学及び九州大学・福岡大学の専門的なご指導を得まして、石室内の新たな装飾壁画や隣接する二つの墳丘の関係についても解明されるなど、多くの成果とともに整備のための貴重な資料となるべき調査結果をまとめることができました。

改めまして、この調査ご協力戴きました皆様方と関係機関に対しまして、心からお礼申し上げます。

平成12年3月31日

鹿本町教育委員会 教育長
中川徳男

◆例言

- 1 本書は熊本県鹿本郡鹿本町大字津袋字広江307に所在する熊本県指定史跡「御靈塚古墳」の史跡整備に伴う確認調査の報告書である。
- 2 調査は鹿本町教育委員会が平成11年度国庫補助事業として実施した。現地調査及び整理報告は鹿本町より依頼を受けた、熊本県立装飾古墳館・熊本県教育委員会が実施しとりまとめた。
- 3 発掘調査は、2000年（平成12年）1月11日から3月31日まで、整理作業は2000年（平成12年）2月1日から3月31日まで実施した。
- 4 本文は調査担当者が、章ごとに分担して執筆した。分担者名は文末に明記している。
- 5 本書に掲載している写真は、西大寺フォト 杉本和樹氏（奈良国立文化財研究所所属）による撮影である。
- 6 今回の確認調査で出土した遺物及び記録類は、熊本県教育庁文化課で保管している。整理終了後はすべて鹿本町教育委員会へ移管する予定である。
- 7 石室内での左右の名称は、羨道部より玄室に向かって右側を右側壁、左側を左側壁として報告する。
- 8 本調査に先立って1999年（平成11年）12月21日に九州大学大学院地球資源システム工学（物理探査学）牛島恵輔教授、同大学工学部 水永秀樹助教授により周濠部の範囲確認調査を電気探査により実施して頂いた。図8章において、牛島恵輔教授より結果を取りまとめた玉稿を頂いた。
- 9 本書の編集は岡本真也・緒方智子の協力を得て、長谷部が行なった。

◆県指定史跡 御靈塚古墳名称について

現在、「県指定史跡 御靈塚古墳」（昭和52年指定）として知られている当古墳は、地元では「御靈隠穴古墳」とされ、本来の「御靈塚古墳」は東隣に接している墳丘のことを指している。現在でも東側の古墳を「御靈さん」と呼び保護されている。よって、歴史的にもそれぞれの名称は東側の古墳が「御靈塚古墳」、西側の古墳が「御靈隠穴古墳」とするのが妥当であろう。

しかし、「県指定史跡 御靈塚古墳」として広く知られている現在、現段階での名称変更等は混乱を招くことが予想されるので、現在の指定名称を踏襲し西側の古墳を御靈塚古墳（1号墳）、東側の古墳を御靈塚2号墳として取り扱うのが妥当と思われる。よって、今回の調査に当たっては西側の古墳を御靈塚古墳、東側の古墳を御靈塚2号墳の名称を用い報告する。

（長谷部善一）

本文目次

I 調査経過

- i - 1 調査に至る経緯
- i - 2 調査組織
- i - 3 発掘調査の経過
- i - 4 整理・報告書の作成

II 遺跡の立地と周辺の遺跡

- ii - 1 立地と環境
- ii - 2 周辺の遺跡

III 墳丘の調査

- iii - 1 トレンチの設定
- iii - 2 トレンチの解説
- iii - 3 小結

IV 横穴式石室の調査

- iv - 1 調査の方法
- iv - 2 玄室・羨道、古墳周辺の石材の調査
- iv - 3 小結

－石室築造工程について－

V 装飾壁画の調査

- v - 1 調査の方法
- v - 2 装飾文様の調査
- v - 3 小結

VI 出土遺物

- vi - 1 古墳築造以前の遺物
- vi - 2 古墳時代の遺物
- vi - 3 近代の遺物
- vi - 4 小結

VII 結語

附論

VIII 御靈塚古墳レーダー探査

九州大学大学院地球資源システム工学専攻

(物理探査学) 牛島恵輔 教授

IX 『鹿本町史』鹿本町編纂室－1976－

富田紘一「御靈隠穴古墳」－抜粋－



卷頭図版目次（カラー図版）

- PL. 1 御靈塚古墳空撮
- PL. 2 御靈塚古墳空撮
- PL. 3 № 8 トレンチ
- PL. 4 御靈塚古墳天井石露出状況
- PL. 5 羨道より玄門・玄室
- PL. 6 玄室 右袖石装飾状況
- PL. 7 玄門より玄室奥壁
- PL. 8 玄室左側壁装飾
- PL. 9 玄室内左袖石装飾
- PL.10 玄室右側壁装飾
- PL.11 玄門右袖石装飾
- PL.12 玄門左袖石装飾
- PL.13 玄室右側壁装飾

挿図目次

- Fig. 1 御靈塚古墳群 周辺遺跡分布図（1/25,000）
- Fig. 2 御靈塚古墳群 墳丘現状実測図（1/385）
- Fig. 3 御靈塚古墳群 墳丘断面ポイント配置図（1/385）
- Fig. 4 墳丘断面図（1/150）
- Fig. 5 トレンチ設定図（1/200）
- Fig. 6 № 1 トレンチ平面及び断面実測図（1/60）
- Fig. 7 № 2 トレンチ平面及び断面実測図（1/60）
- Fig. 8 № 3 トレンチ平面及び断面実測図（1/60）
- Fig. 9 № 4・5 トレンチ平面及び断面実測図（1/90）
- Fig.10 № 6 トレンチ平面及び断面実測図（1/60）
- Fig.11 № 7 トレンチ平面及び断面実測図（1/60）
- Fig.12 № 8 トレンチ断面実測図（1/70）
- Fig.13 横穴式石室実測図（1/40）
- Fig.14 横穴式石室露出天井石実測図（1/20）
- Fig.15 石室石材実測図（1/30）

（上段：神社参道入口左立石
中段：神社参道入口右立石
下段：富田昭一氏宅庭石）

- Fig.16 石室築造工程模式図（1/50）
- Fig.17 羨道部左側壁装飾実測図（1/15）
- Fig.18 玄門部装飾実測図（1/15）
- Fig.19 玄室右側壁装飾実測図（1/15）
- Fig.20 玄室左側壁装飾実測図（1/15）
- Fig.21 玄室奥壁装飾実測図（1/15）
- Fig.22 玄門部、玄室面装飾実測図（1/15）
- Fig.23 出土石器実測図（1/2）
- Fig.24 出土土器実測図（1/2）
- Fig.25 出土土器実測図（1/3）
- Fig.26 № 4・5 トレンチ出土土器実測図（1/3）
- Fig.27 出土須恵器実測図（1/3）
- Fig.28 御靈塚 2 号墳露出石材実測図（1/40）
- Fig.29 御靈塚古墳群測線設定図（1/385）
- Fig.30 地中レーダー探査のレイアウト
- Fig.31 御靈塚古墳GPR調査（測線 1）
- Fig.32 御靈塚古墳GPR調査（測線 2）
- Fig.33 御靈隠穴古墳「鹿本町史」より

図版目次（モノクロ図版）

- PL. 1 御靈塚古墳石室天井石露出状況
- PL. 2 № 1 トレンチ（御靈塚古墳墳丘方向）
- PL. 3 № 1 トレンチ墳丘削り出し検出状況
- PL. 4 № 2（手前）№ 4・5 トレンチ（奥）（北より）
- PL. 5 № 3 トレンチ
- PL. 6 № 3 トレンチ北側土層断面確認状況
- PL. 7 № 4・5 トレンチ
(御靈塚 2号墳周溝検出状況)
- PL. 8 № 8 トレンチ（御靈塚古墳、御靈塚 2号墳
丘間トレンチ土層断面）
- PL. 9 御靈塚 2号墳（南より）
- PL. 10 御靈塚 2号墳（横穴式石室露出状況）
- PL. 11 御靈塚古墳（羨道より玄門部）
- PL. 12 御靈塚古墳（玄室より玄門部）
- PL. 13 玄室奥壁左隅（北西部隅）
- PL. 14 玄室奥壁右隅（北東部隅）
- PL. 15 玄室右玄門隅（南東部隅）
- PL. 16 玄室左玄門隅（南西部隅）
- PL. 17 玄門より玄室奥壁
- PL. 18 玄室奥壁から天井部
- PL. 19 御靈塚古墳出土石器（縄文）
- PL. 20 御靈塚古墳出土土器（縄文早期、晚期）
- PL. 21 御靈塚古墳出土土器（弥生後期）
- PL. 22 御靈塚古墳出土土器（弥生後期）
- PL. 23 № 4・5 トレンチ出土土器（土師器・高杯、須恵器・提瓶）
- PL. 24 № 8 トレンチ擾乱内出土石板（右側木枠付は、山下義満氏所蔵）

表目次

- Tab. 1 御靈塚古墳周辺遺跡地名表
- Tab. 2 御靈塚古墳装飾文様計測値

I 調査経過

i-1 調査に至る経緯

(1) 古墳の名称について

本論に入る前に、まず本書で「御靈塚古墳」の名称を使用するに至った経緯について、整理しておかなくてはならない。

調査前の現地には、2基の小円墳が東西に隣接して並び、ほぼ全体が竹や雑木で覆われていた。コンクリート造りの保護施設が設けられた西側の古墳には「御靈塚古墳」の説明板が設置され、傍らの凝灰岩製の石製標柱には「古墳 御靈隱穴」と刻まれていた。また東側の古墳墳長部分にも、同型式の石製標柱が建てられていて、「古墳 御靈塚」と刻まれていた。

二つの標柱には、設置者や年代が記されていないが、鹿本町文化財保護委員長の牛島賢一氏によると、同町元文化財保護委員長の東義正氏の話として、大正時代に旧稻田村高橋の緒方清氏(後に県議会議員)が中心となって、茶臼古墳や津袋大塚古墳など村内の主要な史跡等を顕彰するために設置した¹⁾ものとの事であった。

これらの名称については、大正12年発行の『鹿本郡誌』によると、「御靈隱穴」として「稻田村大字津袋字広にあり、俗に御靈と称する一小部落の竹林中にあり円形にして丘状をなす、東西六間南北五間石柳あり南に面す。」と記され、「御靈塚」の名は登場していない。同誌の記述のとおり、大正期の標柱が当時の実態を示していたのであれば、西側の古墳を「御靈隱穴」、東側の古墳を「御靈塚」と呼んでいたことになる。

このことを重視した富田紘一氏(熊本市立熊本博物館、現熊本市文化課長)は『鹿本町史』原始古代編において、「一中略一両古墳を区別する上で、古墳に付けられた標柱名によった。」²⁾と断った上で、西側を「御靈隱穴古墳」、東側を「御靈塚古墳」として記述されている。

一方、昭和31年10月、同古墳の最初の考古学的調査を行った熊本県立山鹿高等学校の原口長之氏は同年12月発行の鹿本町公民館報『かもと～第14号～』誌上において、「鹿本町の古代文化－御靈塚古墳を中

心として－」と題して調査の概要を報告されている。³⁾

調査者はこの大正期に建てられた二つの標柱を実見していた筈であるから、「御靈隱穴古墳」ではなく、あえて「御靈塚古墳」と呼んだのであろうか。恐らくは『肥後國誌』の「御靈塚」に関する記述によるところが大きいのではないかと推察する。同書によれば「御靈塚」は菊池氏一族の敗走に係る伝承の中に登場するが、特に玄室の天井石に見られる深い窓について、塚の内部に逃げ込んだ武将によって「胄ニテ突穿チタル跡ト云」としている点など、伝承の舞台が西側の古墳すなわち「御靈塚」であることを重要視した結果ではないかと思われる。原口長之氏による「御靈塚古墳」との名称は、昭和51年発行の『熊本県の装飾古墳白書』、昭和52年の県指定史跡として指定を経て、昭和58年刊行の『熊本県装飾古墳総合調査報告書』に引き継がれ、その後多くの出版物では「御靈塚古墳」として紹介されることになる。

こうして、古墳名称については、いまだに決着がつかぬまま「県指定史跡 御靈塚古墳」と全国的に紹介される一方で、地元では「御靈隱穴古墳」と呼ばれてきたのである。仮に西側の古墳を、従来どおり「御靈塚古墳」として踏襲した場合、「御靈隱穴古墳」の所在と東側の古墳との関係については、どうなるのであろうか。

東側の古墳の現状は、径8m、高さ約1.5mの墳丘があり石室の一部と見られる石列が認められ、恐らく横穴式石室の天井部が崩壊し土砂に埋もれた状態ではないかと考えられる。しかし、これ以上詳細を知ることはできない。大正期には標柱が建てられているので、塚=古墳としての認識があったことは確かであるが、その認識がどこまで詳細なものであったかは定かではない。西側の古墳のように石室が開口し、人の出入が可能な状態であれば、「隠穴」との名称で呼ばれたことも自然な事ではなかったかと思われる。『肥後國誌』に記載された当時から、現在の姿とほぼ同様の姿であったならば、決して「隠穴」の名称で呼ばれることはなかったはずである。

以上のことを整理すれば『肥後國誌』の記述を根拠として西側の古墳を「御靈塚」とする説と、大正期に建てられたという標柱及び『鹿本郡誌』の記述

を重視して、西側の古墳を「御靈隠穴」、東側の古墳を「御靈塚」とする説があり、特に論争もないまま、今日に至った感が強い。いずれの立場にたった場合にも、簡単には問題解決とはならない。

少なくとも、西側の古墳に限って「御靈塚」あるいは、「御靈隠穴」と二通りの呼び名があったことは、『肥後國誌』や『鹿本郡史』の記述の通りであり、伝承の舞台とはなったのは常に西側の古墳であったことを考えれば、西側の古墳についてのみ、「御靈塚」あるいは「御靈隠穴」と二通りの呼び方が会ったと考えるほうが、ごく自然な成り行きであったようにも思われるのである。一つの古墳に纏わる伝承が幾世代も伝えられるうちに、二つの古墳を誕生させ、大正期には標柱設置という事態に至ったのではないかと思われる。

(2)発掘調査に至るまで

御靈塚古墳は、昭和52年6月20日付けで、県の文化財（県指定史跡）に指定され、その直後に行われた史跡整備の中で、石室入口部に保護施設が設けられた。鉄製の扉は通常施錠されているが、見学の希望があれば、町教育委員会の承諾を得て、入室できるシステムが採られてきた。現在、主要な装飾古墳で見られるように、室内の温湿度を機械的に管理する類のものではなく、石室内部への自由な出入を制限して壁面の装飾を保護することを、第一義的に考えたものであった。この施設は、昭和53年秋に着工し、翌年2月に完成している。現地に設置されている説明板はこの時、町教育委員会により建てられたものである。

御靈塚古墳に異常が出始めた時期についての記録はないが、町の文化財保護委員長の牛島賢一氏によると平成8年1月頃から、古墳見学のため石室内部に入った地元の人から、石室天井部の隙間から陽の光が差し込んでいるとの報告を受けた事を記憶しているので、少なくとも平成8年以前の台風等で墳丘上に林立していた雑木や竹が倒壊し、露出した天井石と周囲の石材との隙間から、雨水が浸入し始めたものと考えられる。これ以降、牛島委員長や同保護委員の宮崎勇氏は、御靈塚古墳の早急な保存措置を精力的に各方面に働きかけてこられたのである。

一方、こうした動きとは別に、県文化財パトロール員で、鹿本郡北部地区（山鹿市・鹿北町・鹿本町・菊鹿町）担当の前田軍治氏（現山鹿市文化財管理センター）も、平成9年及び平成10年の文化財巡視点検調査で、古墳に異常が見られる事を報告し、早急に保存対策を講じるように訴えられている。

こうした一連の動きを受けた熊本県文化課は、平成10年10月15日、同課の松本健郎課長補佐（現熊本県立熊本聲学校教頭）が現地を調査し、古墳の破損箇所に防水シートで覆うなどの応急措置を施した後、町教育委員会に立ち寄り、御靈塚古墳の保存問題について協議されている。

同年10月15日は、偶然にも装飾古墳館が平成9年度から調査研究事業の一環として実施してきた「県内装飾古墳調査」に伴い、御靈塚古墳石室内部の写真撮影日に当たっており、撮影班は前述の松本氏と現地で出会い、同古墳の保存状態が差し迫った事態に直面していることを知ることになったのである。

その後、古墳の保存対策を巡って、県文化課と町教育委員会との間で協議が重ねられたが、最終的には、町教育委員会が平成11年度の国庫補助事業（重要遺跡確認調査）として、発掘調査を実施して、保存方法の検討に入ることで決着したのである。

翌平成11年2月下旬、松本氏が当館を訪れ、町当局に専門職員がおらず、県文化課においても多くの発掘調査を抱えて、市町村に調査員を派遣する余裕がないことなどを理由に、改めて装飾古墳館に対して、調査協力の要請があった。しかしながら、人手不足は本館においても同様であり、専門調査員を如何に確保するかと言う問題は、これ以降しばらくの間、暗礁に乗り上げた状態が続くことになる。

その後も、県文化課と装飾古墳館、装飾古墳館と鹿本町教育委員会との間で断続的に協議を重ねられたが、最終的には平成11年12月6日に行われた県文化課と装飾古墳館との会議において、県文化課の主導のもと両組織からそれぞれ調査員を派遣して調査を遂行することで決着し、翌年1月11日に鍵入れ式を行い、発掘調査を開始したのである。

（野田拓治）

i-2 調査組織

調査は、鹿本町教育委員会の依頼を受けて、熊本県立装飾古墳館、熊本県教育委員会が実施した。

一調査主体一

鹿本町教育委員会（調査事務局）

中川徳男（教育長）・芹川孝弘（社会教育課長）

荒兼啓二（社会教育係長）・原口雄二（学校教育課
主事兼公民館主事）

鹿本町文化財保護委員

牛島賢一（委員長）・後藤戊雄・福島秀一・大墨通
夫・宮崎 勇・横田 繁・西村亮一

専門調査員

甲元眞之（熊本大学文学部教授）

小田富士雄（福岡大学人文学部教授）

杉井 健（熊本大学文学部助教授）

墳丘レーダー探査

牛島恵輔（九州大学大学院地球資源システム
工学専攻 物理学探査学教授）

水永秀樹（九州大学工学部助教授）

調査協力

熊本県立装飾古墳館

熊本県教育委員会

調査担当

長谷部善一（熊本県立装飾古墳館 主任学芸員）

岡本真也（熊本県教育庁文化課 文化財保護主事）

藤木 聰（熊本大学大学院生）

調査参加者

富田一征・古澤 勝・富田里美・工藤久実（以上現
地作業員）・林田登之・北原美和子（以上県立装飾古
墳館）・新里亮人・村上浩明・富永明子・緒方智子・
山口大介・竹中克繁・木村龍生（以上熊本大学生）

調査指導

武末純一（福岡大学人文学部教授）、松本健郎（熊
本県立熊本聲学校教頭）、高木恭二（宇土市教育委員会）、
野田拓治（熊本県立装飾古墳館）、中原幹彦（植木町
教育委員会）、隈 昭志・中村幸史郎（山鹿市立博物
館）、青木勝士（熊本県球磨地域振興局）、島津義昭・
川上康治・高木正文・西住欣一郎・古森政次・園村
辰美・古城史雄・村崎孝宏・山下義満・三木ますみ・
亀田 学・帆足俊文・池田朋生・矢野裕介・中村幸

弘・古閑敬士（以上熊本県教育委員会）、鞠智城調査
事務所、牛嶋 茂（奈良国立文化財研究所）

来訪者

広瀬和雄（奈良女子大学教授）、大久保徹也（徳島文
理大学文学部文化財学科専任講師）、吉田和彦（別府
大学博物館学芸員）、野田恒親・宮崎敬士・安達武
敏・福田信子（以上熊本県教育委員会）、山口健剛
(山鹿市教育委員会)、益永浩二(菊水町教育委員会)、
高見 淳（七城町教育委員会）、阿南 亨（菊池市教育
委員会）、竹田宏司（熊本市教育委員会）、今田治
代（竜北町教育委員会）、山田元樹・坂井義哉・西山
由美子（以上大牟田市教育委員会）、大塚恵治（八女
市教育委員会）、永見秀徳・小林勇作・上村英士・柴
田 剛（以上筑後市教育委員会）、猿渡真弓（高田町
教育委員会）、洲崎明子・田中 藍（以上別府大学
生）

i-3 発掘調査の経過

1月11～14日 現地打ち合わせ。杭打ち。

17日 調査開始。天井石平板実測。

No 1 トレンチ掘り下げ。

18～19日 No 1 トレンチ掘り下げ。石室内清掃。
新たな装飾壁画確認。

20日 No 1 トレンチ周溝確認。石室割り付
け。No 3 トレンチ杭打ち。

21日 石室実測開始（羨道と玄室の左側壁）。
No 1. 2. 3 トレンチ表土剥ぎ。

24～25日 No 1・2 トレンチ掘り下げ。羨道の
左右側壁、玄室の右左側壁の実測開
始。

26～28日 No 2 トレンチ周溝確認。羨道⇒玄室
断面見通し図、羨道、玄室の右側壁
見通し図実測。

31日 No 1 トレンチ墳端部確認。玄室⇒羨
道見通し図完了。玄室左側壁実測。

2月1～2日 No 4・5 トレンチ表土剥ぎ。掘り下
げ。玄室の奥壁・前壁・天井部見通
し図作成。

3日 整理作業開始（土器の水洗）。羨道の
平面図。

4日 №4・5トレンチ周溝確認 稲田小学校3年生20名、校長、教諭1名、計22名見学。熊本大学 杉井 健助教授による調査指導。

7日 №8トレンチ、断面清掃開始。

8日 石室実測終了。装飾実測準備。

9~11日 №4トレンチ、延長掘り下げ。

14日 装飾文様実測開始。遺物注記開始。写真撮影（各トレンチ、周溝、土層断面）。

15日 №5トレンチ周溝完掘。玄室の右左側壁装飾壁画実測。

16~17日 №4・5トレンチ内、周溝調査。

18日 御靈塚古墳周溝完掘。玄室の奥壁、右側壁、羨道の左右袖石の装飾壁画実測。

21日 №3トレンチ周溝確認。熊大 杉井助教授調査指導。

22~23日 №3トレンチ掘り下げ。神社入口立石精査。

24~25日 №6・7トレンチ表土剥ぎ、掘り下げ。装飾文様実測終了。熊大甲元教授調査指導。

28日 №3トレンチ平面、断面実測。

29日 №2トレンチ調査。神社入口立石実測開始。

[3月]

1日 №4・5トレンチ須恵器実測。

2日 平板測量（各トレンチ・周溝）。

3日 写真撮影準備、清掃（各トレンチ、石室内外）。

4日 熊大杉井助教授調査指導。熊本古墳研究会調査指導。

6~7日 写真撮影（奈良国立文化財研究所 杉本和樹氏）。

8日 福岡大学小田富士雄教授による調査指導。

9日 熊本大学甲元眞之教授の調査指導。

10日 セスナ機による写真撮影の実施。

13~14日 №1・4・5・7トレンチ平面断面の実測。

15日 マスコミへの記者発表。稲田小学校4年生19名、教諭1名 計20名見学。№1・4・5・6トレンチ平面・断面実測。調査道具の整理。

16日 №1・3・4・5・6・7トレンチ平面断面の実測。整理作業終了。

17日 現場説明会準備。№1・3・4・5トレンチ平面断面実測。

18日 現地説明会第1日目。57名見学。

19日 現地説明会第2日目。104名見学。2日間の見学者の合計171名。

21日 №2・4・5・8トレンチ平面断面実測。№8トレンチ土層断面土。

22日 №3・4・5・7トレンチ平面断面実測。№2トレンチ土囊による埋め戻し作業。

23日 調査機材搬出。

24~26日 №3トレンチ断面実測。実測補足。

27日 遺跡内清掃整備。（作業最終日）

28日 調査事務所清掃。

29~30日 №6トレンチ断面の実測。

31日 重機による各トレンチの埋め戻し作業（不足分は山砂で補う）。

(岡本真也)

i-4 整理・報告書の作成

調査が続いている平成12年2月1日から3月31日まで報告書作成のための整理作業を行なった。作業は、鹿本町教育委員会横の建物を借上げ行なった。整理作業は調査担当者が調査と並行して行い、整理補助員として藤本智子、甲斐千裕（以上熊本県立鹿本高等学校生）、下東嘉也（別府大学大学院生）・米村 大・宮崎 拓（以上別府大学生）に協力頂いた。また、本書の図版・製図作業は主に緒方智子が担当した。

(長谷部)

¹⁾「鹿本郡市」鹿本郡役所 大正12年3月

²⁾富田紘一「通史－原始古代－」『鹿本町史』鹿本町役場 昭和51年11月

³⁾原口長之「鹿本町の古代文化 - 御靈塚古墳を中心に - 」『広報かもと』第14号 鹿本町公民館 昭和31年12月

II 遺跡の立地と周辺の遺跡

ii-1 立地と環境

御靈塚古墳は、熊本県北部を西流する菊池川の中流域の右岸、鹿本郡鹿本町大字津袋字広江307番地に所在する。菊池川中流域に広がる東西13km・南北6kmほどの氾濫原（通称菊鹿盆地）のほぼ中央北辺に位置する。

菊池川は、阿蘇外輪山を源流にして西流し、上流の菊池渓谷を経て、中流域で北から内田川・迫間川、南から合志川が合流し、菊池市・七城町・鹿本町・山鹿市にまたがる菊鹿盆地を形成する。この菊鹿盆地を囲む周縁部の丘陵には、菊池川中流域の著名な前方後円墳や装飾古墳・装飾横穴墓群が立地している。菊池川は、その後丘陵の間をぬって蛇行したのち下流域に玉名平野を形成し、有明海に注ぐ。玉名平野にも装飾を有する古墳・横穴墓が集中している。

御靈塚古墳から約200m東側には菊池川の支流内田川が南流し、約5km下流で菊池川に合流する。内田川は熊本・大分県境の菊鹿町八方ヶ岳山中を水源として、川沿いに狭い平地を形成しながらほぼ北から南へ流れ、鹿本町に入るあたりで両岸の平地を大きく広げて菊鹿盆地に至る。御靈塚古墳は、内田川がちょうど菊鹿盆地に流れ出る地点の右岸の、低平な丘陵先端部に立地し、古墳の墳頂からは菊鹿盆地の中央部を眺望することができる。

御靈塚古墳の立地する一帯は、山鹿市・菊鹿町境の日岡山（標高312m）の南麓に広がる低い丘陵地で、東方の内田川に向かってなだらかに落ち込んでいく地形となっている。この丘陵の最高所は標高109m、御靈塚古墳付近は55mである。丘陵の最高所一帯には、御靈塚古墳に先行して5世紀に築造が始まる津袋古墳群が、丘陵の北側崖面には湯の口横穴墓群が立地する。津袋古墳群が立地する丘陵はさらに西方へのびており、その丘陵南縁には鹿本町の御宇田遺跡が立地する。御靈塚古墳の東方、内田川をはさんだ対岸は鞠智城跡が立地する菊鹿町の米原台地で、台地の西側丘陵には円文の線刻装飾を有する竜口横穴墓群が開口する。米原台地の南方には七城町の台台地が東西に長く広がり、台地の西崖面には瀬戸戸口横穴墓群が、台地の南西端には台城跡が立地する。

御靈塚古墳の石室は古くから開口していたようで、近世に編まれた『肥後國誌』（1772年成立）山鹿郡中村手永津袋村の条にその記述が見える。⁽¹⁾ また、1897（明治20）年には、御靈塚古墳の墳丘南半分を削平して津袋尋常小学校が設置され、1909（明治42）年まで存続している。

ii-2 周辺の遺跡 (Fig. 1)

菊池川流域の主要な古墳は、おもに菊鹿盆地周縁部の丘陵に立地する。まず、盆地の北西部、山鹿市日輪寺山の山頂に4世紀末頃の竜王山古墳（円墳、竪穴式石室）が出現する。5世紀中頃には、竜王山古墳東南の丘陵頂部に、石障系の竪穴系横穴式石室を持つ錢亀塚古墳（前方後円墳）が築かれる。ややおくれて菊池川右岸の川沿いの亀塚古墳・中村双子塚古墳（ともに前方後円墳）が続き、6世紀前半のチブサン古墳によって横穴式石室における彩色装飾が開始する。

菊鹿盆地の西部では、5世紀前半頃、菊池川左岸の台地上にこの地域最大の前方後円墳である岩原双子塚古墳（全長107m、3段築成、葺石・埴輪）が築かれる。その後、盆地の西南部の植木町高隈古墳（前方後円墳）や、巨大な舟形石棺を主体部とする合志川左岸の慈恩寺経塚古墳（円墳、2段築成、葺石）に続いて、装飾を有する石川山4号墳（円墳）・横山古墳（前方後円墳）が出現する。

菊鹿盆地東南部における前方後円墳は、これらにおくれて6世紀中頃、合志川左岸に武装石人を伴なう木柑子フタツカ古墳や蛇塚古墳が當まれる。

菊池川中流域には、チブサン古墳に始まる6世紀代の装飾古墳が連綿と築かれ、装飾古墳文化の全盛期を迎える。チブサン古墳周辺では、その後、臼塚古墳→馬塚古墳→オブサン古墳→弁慶ヶ穴古墳の順に装飾古墳が築かれる。装飾文様は、チブサンに見られるX字文・菱形文から、臼塚・馬塚・オブサンに施された連続三角文、そして弁慶ヶ穴では円文・三角文に舟・馬・鳥などが加わる。装飾部位は、初めは石屋形内面のみにとどまるが、次第に玄室・前室へも施されるようになる。また、チブサン古墳と臼塚古墳には墳丘に石人が樹立されていたことが知

られている。なお、チブサン古墳のほかは現状ではすべて円墳であるが、弁慶ヶ穴古墳については前方後円墳とする見解もある。

このほか、チブサン古墳などが集中する山鹿地域からは離れて、菊池川上流域に袈裟尾高塚古墳（円墳）、そして菊鹿盆地中央北辺に御靈塚古墳が点在する。袈裟尾高塚古墳は菊池川流域最上流の装飾古墳で、線刻と彩色による連続三角文・韌の文様が認められる。

装飾を有する横穴墓については、菊鹿盆地西部の菊池川右岸に付城・鍋田横穴墓群、左岸に・長岩・桜ノ上横穴墓群、御靈塚古墳東方の丘陵に竜口横穴墓群があり、装飾部位や文様などの様相は、装飾横穴式石室の変遷とほぼ軌を一にして展開するようである。

(林田登之)

註(1) 「御靈塚 林間ニ一石窟アリ御靈塚ト云口狭
クシテ奥ハ九尺四方大石ヲ疊テ築キ上ノ大石ニ
胄ノ鉢ノ形ニ穿チタル穴アリ土俗傳ヘテ昔菊池
家合戦ニ敗北シテ此窟ニ逃入リシ時着タル胄ニ
テ突穿チタル跡ト云其口狭キ故家臣等這テ入給
ヘト云シヨリ俗間這入給ヘト云コト起レリト云
不堪一笑此塚穴ノ所以不分明」

松本寿三郎編『肥後國誌 上巻』青潮社 1972
「津袋村」 P 531～P 532より抜粋

参考文献

熊本県教育委員会『熊本県装飾古墳総合調査報告書』
熊本県文化財調査報告第68集 1984

鹿本町教育委員会『頂塚古墳発掘調査報告書』鹿本
町文化財調査研究報告第1集 1986

大塚初重ほか編『日本古墳大辞典』東京堂出版 1989

石野博信ほか編『古墳時代の研究10 地域の古墳 I
西日本』雄山閣 1990

熊本県教育委員会『灰塚古墳』熊本県文化財調査報
告第114集 1991

近藤義郎編『前方後円墳集成 九州編』山川出版社
1992

『熊本県遺跡地図』熊本県教育委員会 1994

熊本県教育委員会『蒲生・上の原遺跡』熊本県文化
財調査報告第158集 1996

『菊鹿町史 資料編』菊鹿町史編集委員会 1996
高木正文「肥後における装飾古墳の展開」（『国立歴
史民俗博物館研究報告第80集 装飾古墳の諸問題』
国立歴史民俗博物館 1999）



Fig. 1 御靈塚古墳群 周辺遺跡分布図 (1/25,000)
この地図は、建設省国土地理院長の承認を得て、同院発行の「2万5千分の1地形図」を複製したものである。(承認番号 平127復、第196号)

Tab. 1 御靈塚古墳周辺遺跡地名表

No.	遺跡名	遺跡名	種別
46	市目	包蔵地	古墳
47	中横穴墓群	包蔵地	古墳
48	浦下原	包蔵地	古墳
49	口横穴墓群	包蔵地	古墳
50	志々島大塚横穴墓群	古墳	古墳
51	木下古墳	古墳	古墳
52	馬見塚古墳群	古墳	古墳
53	馬見塚辻古墳	古墳	古墳
54	馬見塚辻古墳	古墳	古墳
55	乳田塚	古墳	古墳
56	名塚古墳群	古墳	古墳
57	梅下原	包蔵地	古墳
58	白石	包蔵地	古墳
59	余方	包蔵地	古墳
60	四道田横穴墓群	古墳	古墳
61	日の岡	包蔵地	古墳
62	長谷古墳群	古墳	古墳
63	急傍古墳	古墳	古墳
64	山の井古墳	古墳	古墳
65	野野原の釜古墳	古墳	古墳
66	隣の内古墳	古墳	古墳
67	尾辻古墳	古墳	古墳
68	今山箱式石棺	埋葬	古墳
69	口横穴墓群	古墳	古墳
70	灰塚古墳	古墳	古墳
71	鐵塚古墳群1~3号	古墳	古墳
72	土手塚古墳	古墳	古墳
73	篠山古墳	古墳	古墳
74	熊塚古墳	古墳	古墳
75	大塚古墳	古墳	古墳
76	熊崎横穴墓群	古墳	古墳
77	立山古墳	古墳	古墳
78	上永野	包蔵地	古墳
79	合冢古墳	古墳	古墳
80	道口横穴墓群	古墳	古墳
81	腰塚古墳	古墳	古墳
82	朱塚古墳	古墳	古墳
83	頭合古墳	古墳	古墳
84	道口古墳群	古墳	古墳
85	腰塚古墳	古墳	古墳
86	鬼怒の籠古墳	古墳	古墳
87	スノボ横穴墓群	古墳	古墳
88	鎌松古墳参考地	古墳	古墳
89	鞋智賀	古墳	古墳
90	木下塚古墳	古墳	古墳

No	遺跡地図	遺路名	種別
1	383 021	御靈塚古墳	古墳
2	208 033	竜王山古墳	古墳
3	✓ 036	京原古墳	古墳
4	✓ 037	鬼天神古墳	古墳
5	✓ 038	馬緊古墳	古墳
6	✓ 039	馬原古墳	古墳
7	✓ 042	城越穴群	古墳
8	✓ 043	河原塚古墳	古墳
9	✓ 044	姫塚古墳	古墳
10	✓ 046	西福寺古墳	古墳
11	✓ 047	オブツアン古墳	古墳
12	✓ 048	オブツサン古墳	古墳
13	✓ 050	ヒヤムツノ塚古墳	古墳
14	✓ 051	乳母塚古墳	古墳
15	✓ 052	御靈塚古墳	古墳
16	✓ 053	倉塚古墳	古墳
17	✓ 054	弁ヶ谷古墳	古墳
18	✓ 067	西福寺古墳群	古墳
19	✓ 069	銭色塚古墳	古墳
20	✓ 070	御靈塚古墳群	古墳
21	✓ 071	名冢古墳群御界	古墳
22	✓ 072	名冢古墳群第2号墳	古墳
23	✓ 073	名冢古墳群第3号墳	寺社
24	✓ 074	名冢古墳群第4号墳	寺社
25	✓ 075	名冢古墳群御界	寺社
26	✓ 076	名冢古墳群第6号墳	寺社
27	✓ 078	松の本	包藏地
28	✓ 095	原山	包藏地
29	✓ 104	金屋塚	包藏地
30	✓ 105	白冢古墳	古墳
31	✓ 106	白冢西古墳	古墳
32	✓ 107	金星塚古墳	古墳
33	✓ 108	鍋田塚穴群	古墳
34	✓ 109	鍋東古墳	古墳
35	✓ 116	宮脇古墳	古墳
36	✓ 119	中尾山古墳群	埋葬
37	✓ 121	花塚	包藏地
38	✓ 122	桜町(東原)	包藏地
39	✓ 123	大宮神社	包藏地
40	✓ 127	中村双子塚古墳	古墳
41	✓ 128	白石・古ノノ上	包藏地
42	✓ 132	八の峠塚穴群	古墳
43	✓ 133	八の峠古墳	古墳
44	✓ 137	馬原塚古墳群	古墳
45	✓ 138	馬原塚古墳群5号墳	古墳

(ゴシック文字は装飾または石人を伴う古墳)

No.	遺跡地図	遺跡名	遺跡地図	遺跡名
136	208	馬見塚古墳群1号墳	181	210 043 木舟子船形石棺
137	~	馬見塚古墳群2号墳	182	045 西迫川横穴墓群
138	~	馬見塚古墳群3号墳	183	~ 049 丸山古墳
139	~	長岩横穴墓群	184	~ 050 木舟子船形石棺
140	~	161 岩原横穴墓群	185	~ 051 神楽山古墳
141	~	168 保方舟箱式石棺	186	~ 055 城山古墳(参考地)
142	~	169 神社墓古墳	187	~ 063 神木古墳
143	~	172 馬見塚	188	~ 067 鳥切横穴墓群
144	~	175 古城古墳	189	~ 075 深川
145	~	177 保田古墳	190	~ 077 深川古墳
146	~	179 保田東原	191	~ 078 赤星
147	~	180 岩山古墳	192	~ 079 赤星ヤンボシ塚古墳
148	~	181 象塚古墳	193	~ 081 天城社古墳
149	~	182 清水山古墳	194	~ 083 菊の跡
150	~	183 一本杉石棺	195	~ 087 菊の池
151	~	184 日置石棺	196	~ 092 赤星福土・水溜
152	385	002 山上古墳群	197	~ 107 築地百穴
153	~	003 宮上古墳群	198	~ 119 亘横穴墓
154	~	009 南平横穴墓群	199	~ 121 マニノ横穴墓
155	~	010 大坂古墳	200	~ 122 紹見後田横穴墓群
156	~	012 八久保古墳	201	~ 146 山田横穴墓群
157	~	015 桑の木横穴墓群	202	~ 147 横口
158	~	023 慈恩寺塚古墳	203	~ 148 大井横合横穴墓群
159	~	025 米家古墳	204	~ 149 大井施篠穴墓群
160	~	169 加村古墳	205	~ 154 木舟子高塚古墳
161	401	028 年賀塚古墳	206	~ 382 119 辰塚
162	~	035 朝比古塚群	207	~ 401 002 台古墳
163	~	036 町知石棺墓	208	~ 003 包藏地
164	383	044 丸山	209	~ 004 清町口横穴墓群
165	~	045 白塚石人	210	~ 009 水穴
166	~	048 茶臼塚古墳	211	~ 010 山崎古墳
167	~	049 平町	212	~ 013 ヒヅュウ谷横穴墓群
168	~	055 双子塚古墳	213	~ 015 十連寺古墳
169	~	060 鹿本農業高校	214	~ 016 鮫石古墳
170	~	066 前田	215	~ 017 西ノ平
171	~	067 板石町	216	~ 018 木舟原古墳
172	~	070 竜神工	217	~ 019 関田
173	~	071 姫塚	218	~ 034 蛇塚古墳
174	210	036 西寺辻	219	~ 043 岩船チヨウ塚古墳
175	~	037 女塚	220	~ 044 岩船横穴墓群
176	~	038 水町	221	~ 046 魚尾横穴墓
177	~	039 木舟子横穴墓群	222	~ 047 鶴也古墳
178	~	木舟子フタツカ古墳	223	~ 050 ハヤマ塚古墳
179	~	041 大塚	224	~ 051 泌川
180	~	042 大塚古墳	225	~ 062 原郡古墳

熊本県遺跡地図 熊本県教育委員会1998をもとに作成

御靈塚古墳基本土層

〈基本土層〉

I層 暗褐色土（主に竹の根）

II層 黒褐色土層（搅乱土）[Hue 7.5YR 2/2]
小さい樹根が多く、カカフカしている。2
～3cmの小石も所々に含む。縄文時代早期
～近代までの遺物を含む層。

III層 黒色土層 [Vaiue N 1.5/]
主に弥生時代後期の土器を含む遺物包含層。
粒子が細やかで、部分的に固くしまる所と
柔らかい所がある。0.5～1cm程度の小石
を含む。

IV層 黒褐色土層 [Hue 7.5YR 3/2]
粒子が細かくややしまるが、ややもろい。
小さな火山ガラスを多く含み、所々に褐色
のブロックが見られる。アカホヤ火山灰の
可能性もある。III層やV層と比較すると色
調が明るい。

IV'層 黒褐色土層 [Hue 7.5YR 3/1]
弥生時代後期と考えられる遺構内の埋土。
3～5cmの小石、2～5mmの褐色粒、3～
5mmのカーボン粒、10mm前後の焼土粒を含
む。全体的に柔らかいが、部分的に固い所
もある。所々に遺物を含む。

V層 黒褐色土層 [Hue 7.5YR 2/2]
粒子が細かくややしまるが、つぶすともろ
い。IV層より固くしまり、IV層やIV'層と比
較すると色調が暗い。

VI層 黒褐色土層 [Hue 7.5YR 3/2]
V層とVI層の漸位層と考えられる。粒子が
細やかでややしまるが、つぶすともろい。
所々に1～2mmのカーボン粒を含む。色調
はVI層より少し明るい。

VII-a層 明褐色土 [Hue 7.5YR 5/6]
地山層。柔らかくカカフカしている所が多
い。無遺物層。

VII-b層 褐色粘質土層 [Hue 10YR 4/6]
地山層。固くしまる。無遺物層。

VII-c層 褐色土 [Hue 10YR 4/6]
1～20cm程度の礫を含む層で柔らかい所

が多い。無遺物層。

IV層 砂礫層。大小の砂や礫を含む層。無遺物層。

◆III層以下は、プライマリーな自然堆積層。

◆周溝内は主に3層に分かれるが、詳細は別記。

III 墳丘の調査

III-1 トレンチの設定

1) 目的

トレンチは以下の目的で設定した。

- ・御靈塚古墳と2号墳の周囲に周溝が存在するか否かを確認するため。
- ・周溝が存在する場合、それらが2つの墳丘をどのように囲むのかを確認するため。
- ・石室や墳丘の築造にかかる版築、盛り土及び整地面を確認するため。

2) 調査手順

周溝が存在するか否かを確認するために3つのトレンチ（1トレンチ～3トレンチ）を設定した。まず、御靈塚古墳の奥壁の平面での中心点P点と2号墳の主体部奥壁と推定される奥壁の中心点Q点を設定した。1トレンチは、P点を基準として直線PQから北方向に直交する線を基準線とした。2トレンチは、Q点からPQ線上の1m手前の点をR点とし、R点を基準に直線PQから北方向に伸ばした垂線を基準線とした。2トレンチはその一部が民有地及び神社の土地であるため特別に許可を得て発掘を行った。3トレンチは、P点から北西側に伸ばした線を基準線とした。

次に3つのいずれのトレンチからも周溝と考えられる掘り込みが確認され、前方後円墳の可能性があるので、墳丘が近接する部分に4トレンチと5トレンチを設定した。当初は2つの別々の長方形のトレンチだったが、接合する周溝の様子がよくわからなかったので、2つのトレンチを結合し拡張した。

また、2つの墳丘の間を周溝が巡るか否かを見極めるためと版築や盛り土の残存状況を確認するためには2つの墳丘間にある断面を垂直にカットして8トレンチ（断面トレンチ）とした。基準線は断面にあわせて任意とした。この断面の側には明治時代に尋常小学校が建っていたため、校舎建築の際に墳丘の一部がカットされ、断面が形成されたものと考えられる。

6本のトレンチで2つの古墳の周溝が確認され、2号墳が造られた後に御靈塚古墳が継ぎ足された形で造築されたことが判明した。しかし、継ぎ足され

た御靈塚古墳の周溝がどのように巡るか不明であつたため、6トレンチをP点を基準として北西方向に設置した。更に石室の主軸方向の断面図を作成する必要と1トレンチと4・5トレンチの周溝のつながりを確認するために石室の中心線上に7トレンチを設置した。

III-2 各トレンチの解説

第1トレンチ（距離はP点からの水平距離である）

P点を基準にして、北方向に距離6mから16.3mに設置（長さ10.3m）。幅は2.0m。深さは、地表面から測定すると墳丘外側の約0.5mから周溝内の最深部の約170cmを測る。

まず、I層の樹根とII層の搅乱土を除去し、周溝の確認をめざして掘り下げを進めた。

遺物は、I～III層と周溝埋土内より弥生時代後期の土器片を中心にコンテナ1箱半出土した。

1) 御靈塚古墳の墳丘側

墳丘側は、土層堆積状況や周溝の掘り込み面などが確認できるように幅約1mで地山のⅥ～c層まで掘り下げ、残りの1mはⅣ層上面まで掘り下げた。Ⅲ層以下は自然堆積層であり、それより上層では搅乱が激しく盛土と考えられる層は確認できなかった。また、地表から幅90cm深さ110cmの方形の掘り込みが確認された。

Ⅲ層の黒色土からは多量の弥生時代後期の土器片が出土した。主に弥生時代の遺物を主体とした遺物包含層と考えられる。その他にも縄文早期の押型文土器片、塞ノ神系土器片が出土した。古代の須恵器片や黒色土器片は混入遺物と考えられる。

2) 御靈塚古墳の周溝

2m幅で、周溝のラインに沿って掘り進めた。

周溝の幅は、搅乱で削平されているため正確にわからないが、周溝の内側のラインや断面から直角に測った距離で算出すると430cm、深さは、最深部で125cmを測る。周溝の断面はやや不整形な逆台形型をしている。また、周溝の削り出しが表土の現地表から150cm程下で確認された。

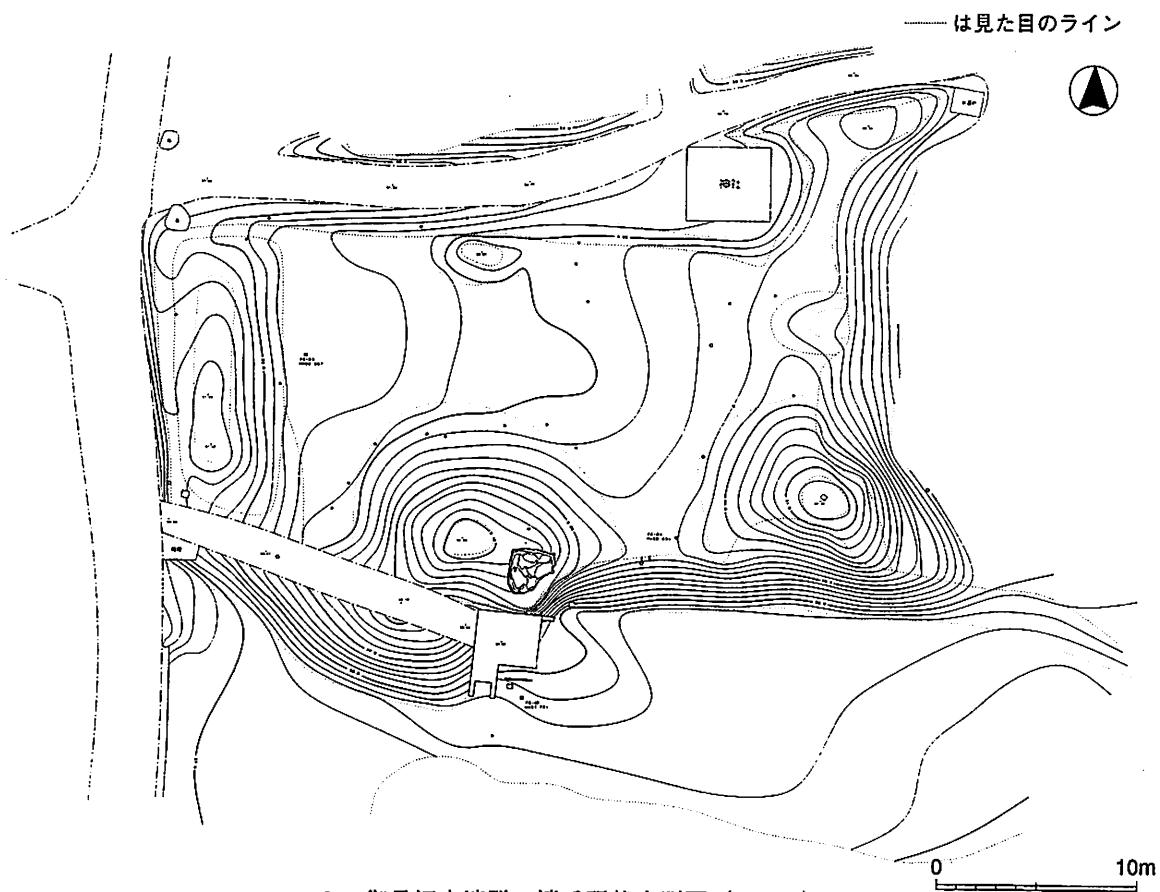


Fig. 2 御靈塚古墳群 墳丘現状実測図 (1/385)
(左:御靈塚古墳, 右:御靈塚2号墳)

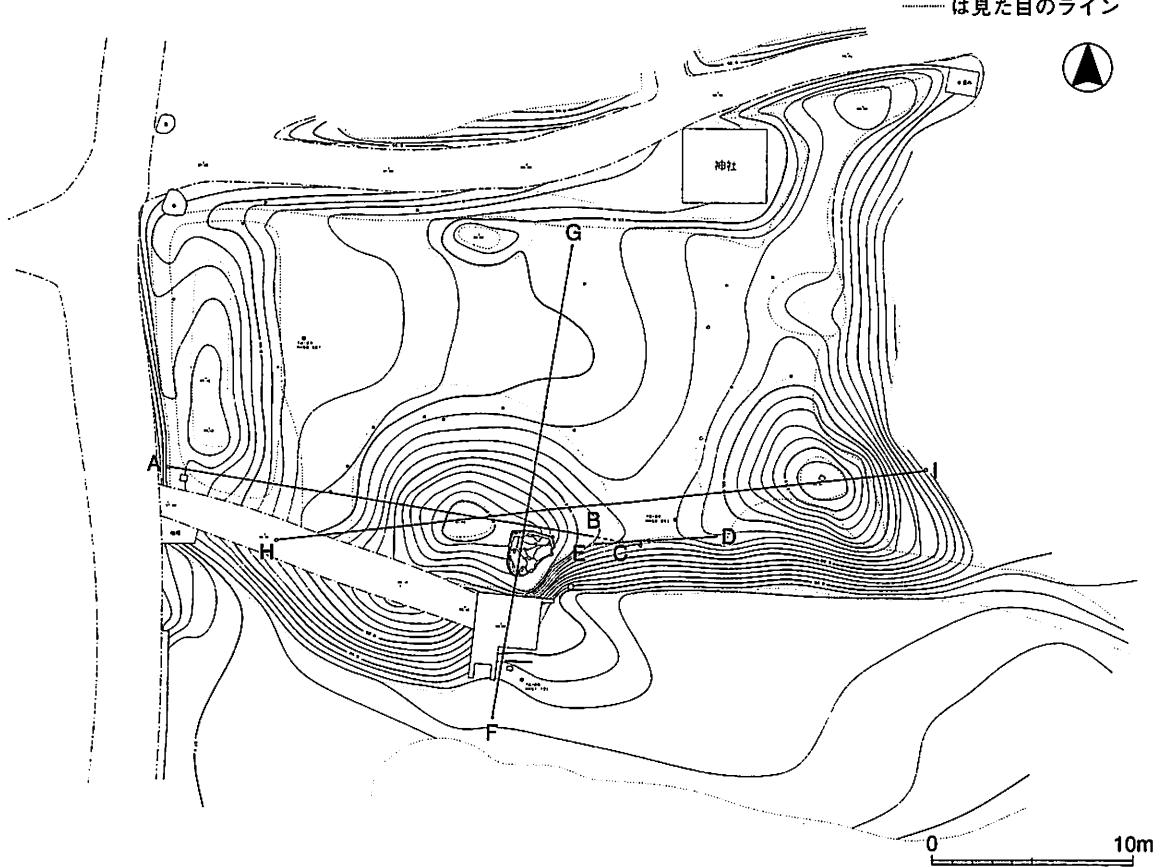


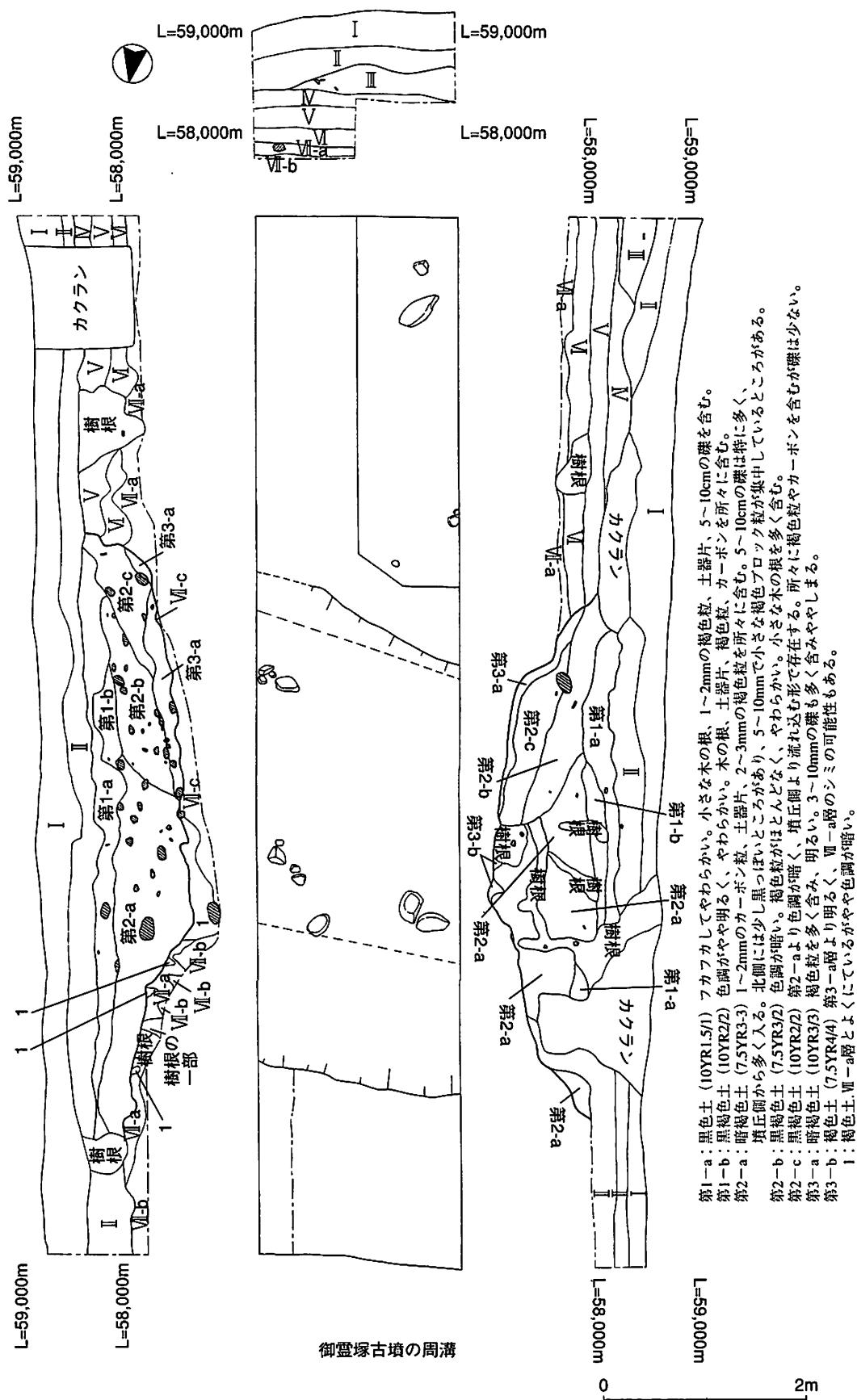
Fig. 3 御靈塚古墳群 墳丘断面ポイント配置図 (1/385)
(左:御靈塚古墳, 右:御靈塚2号墳)



Fig. 4 墳丘断面図 (1/150)



Fig. 5 トレンチ設定図 (1/200)



周溝部は大まかに3層に分層でき、その中で更に第1層が2層（第1—a、第1—b）に、第2層が3層（第2—a、第2—b、第2—c）に、第3層が2層（第3—a、第3—b）に細分される。第1層は周溝の最上部に堆積している柔らかい黒色土～黒褐色土で、主に弥生時代後期の土器片を含む。色調及び含まれるカーボン粒や褐色粒の相違により更に2層に細分した。第2層は周溝内埋土の大部分を占める黒褐色土～暗褐色土で約10cm前後的小礫を多く含む。ややしまっており、主に弥生時代後期の土器片を含む。色調の相違により更に3層に細分され、墳丘側から流れ込んだ形跡が伺える。第3層は周溝に最初に堆積した墳丘側からの三角堆積を呈しており、暗褐色土～褐色土で3～10cmの小礫を多く含みややしまる。弥生時代後期の土器片を含む。色調の相違により更に2層に細分した。

3) 御靈塚古墳の周溝外側

地表より50～80cmほど掘り下げたところでⅦ—a、b層が確認されたが、西側は搅乱が広がり、明確な周溝の肩は確認できなかった。

第2トレンチ（距離はR点からの水平距離）

トレンチの規模は、長さ5.1m×幅2.0mである。距離は5mから10.1mである。深さは地表面から82～162cmである。

遺物は、I～Ⅲ層と周溝内埋土より弥生時代後期の土器片を中心にコンテナ半箱出土している。

1) 2号墳の墳丘側

約60cm掘り下げたところでⅢ層に達し、多量の弥生時代後期の土器片が出土した。その中にはほぼ完形の器台が3基含まれており、下層のⅣ'層からも多量の弥生時代後期の土器片が出土した。Ⅳ'層は第1トレンチと第8断面トレンチより東側に広がっており、弥生時代の何らかの遺構内の埋土だと考えられる。ここではⅣ'層の下層より掘り込まれた土坑が確認された。この中から数点の弥生時代後期の土器片が出土した。全体的な掘り下げはⅣ'層上面まで行つたが、さらに下層を確認するため50cm幅で地表から約160cm深堀りを行つた。その結果、Ⅲ層の上層（8の層）に盛土の可能性がある非常に固くしまる褐色

土層が確認された。

2) 2号墳の周溝

掘り下げは、地表より約80cmのところで周溝のラインが明確に確認された時点で止めた。周溝はトレンチの北側に南西から北西方向に部分的に確認された。しかし、全容がわからない状態だったので、トレンチの拡張を検討したが、町有地より外れるために断念した。周溝の第1層が断面で約50cm確認でき、弥生時代後期の土器片が出土している。

第3トレンチ（距離はP点からの水平距離）

P点を基準にして、北北西に距離9.1mから19.9mに設置。長さ10.8m×幅1.9～2.4m。深さは地表面から測定して周溝外側の35cmから墳丘側の173cmまでを測る。このトレンチ周辺は大きな搅乱を受けて、約1.5mほどの段ができるおり、掘削の深さに差異が生じている。

遺物は、I、II層、周溝内埋土より縄文早期の土器片、弥生時代後期の土器片がコンテナ半箱出土している。

1) 御靈塚古墳の墳丘側

幅約1mの深堀りした断面で確認したところ、IV層以下は自然堆積層であり、その上層で盛り土の可能性がある層は4の層のみであった。また、墳丘側の断面に落ち込みが確認されたが、自然の落ち込みであった。

2) 御靈塚古墳の周溝

周溝内は、土層堆積状況や周溝の掘り込み面などが確認できるように幅約1mで地山のⅦ—c層まで掘り下げ、残りの約1mは周溝のラインに合わせて掘り下げた。

搅乱が入っているので、正確にはわからないが、周溝の幅は約3.2m、深さは最深部で125cmを測る。

周溝部の土層は大まかに3層に分層でき、更に第1'層が2層（第1'—a、第1'—b）、第3'層が3層（第3'—a、第3'—b、第3'—c）に細分される。

しかし、周溝の埋土の状況が第1トレンチとはやや様相が異なっているので、ここでは'をつけて表示する。第1'層は、粒子が細かく、やわらかい黒色

土である。所々に幅10~15cm長さ50~60cmで帶状に褐色や暗褐色のブロックを含み、下部はややしまる。このしまりの違いで更に2層に分層した。弥生時代後期の土器片が含まれる。

第2'層は1~5cmの褐色のブロックを多く含む暗褐色土である。10~20cm大の丸みを帯びた礫も所々に含まれており、周溝内第1層との間に色調の違いにより明確なラインが確認される。礫とともに埋められたと考えられる。しかし、北東側の断面には褐色のブロック土は確認できない。

第3'層は10~50cm大の丸みを帯びた礫を多く含む黒色土である。これらの礫は何らかの原因で周溝内に投げ込まれた可能性が高い。また、固くしまる所とやわらかい所があり、硬化したブロックの有無

や色調の相違で更に3層に分層した。

北東側のトレンチ断面では墳丘側から埋まつていった三角堆積の状況が見てとれるが、途中に倒木と考えられるいくつかの搅乱が入っており、削り出しが確認できなかった。しかし、南西側の断面では整形された墳丘の削り出しが確認できた。

3) 御靈塚古墳の周溝外側

大きな搅乱で削平されているため、周溝の肩は確認できなかった。おそらく旧地形は、自然堆積層に沿って西側にややなだらかに傾斜していたと考えられる。

第4・5トレンチ

当初4トレンチと5トレンチとの間に水道管が

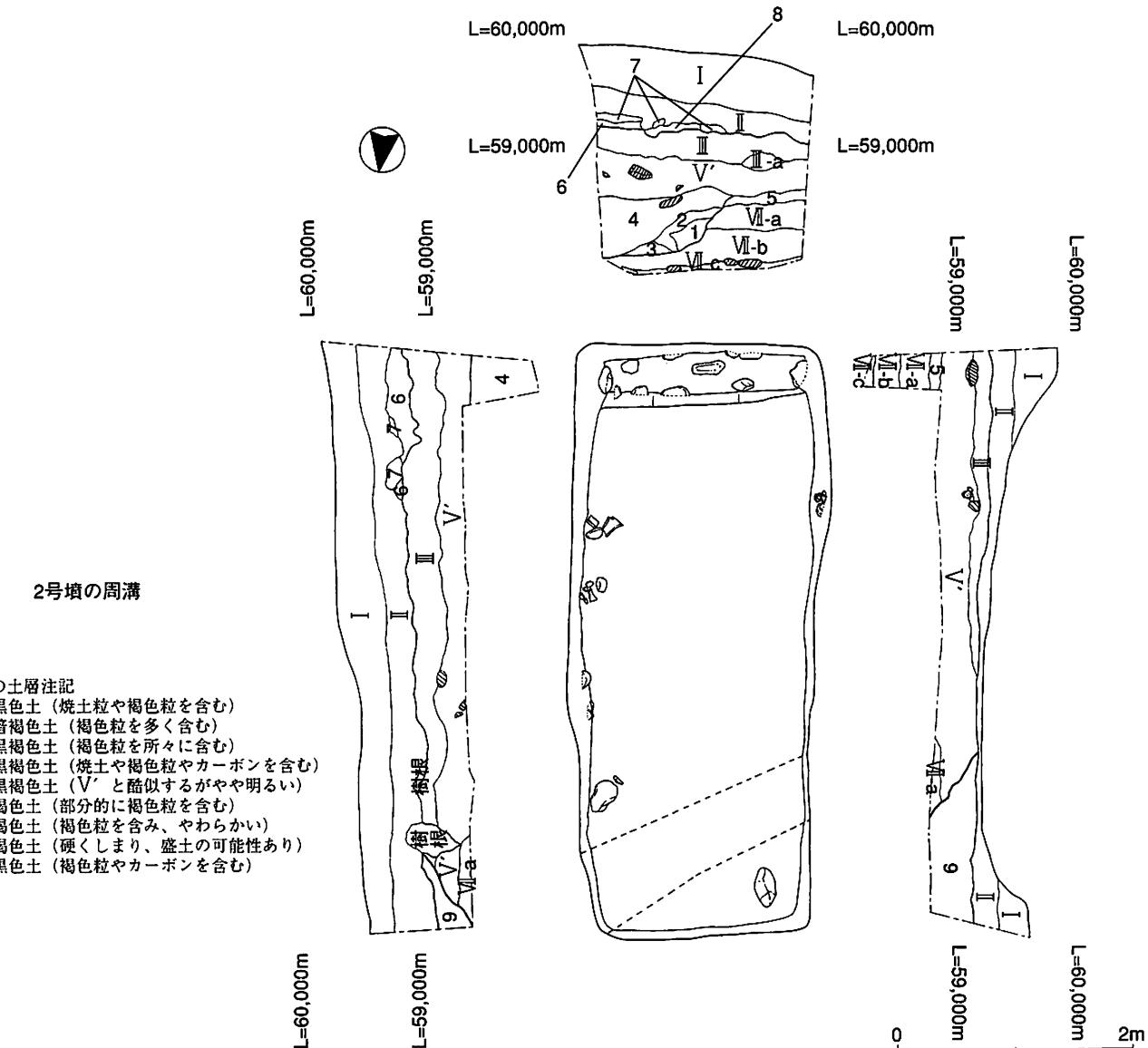


Fig. 7 №2 トレンチ平面及び断面実測図 (1/60)

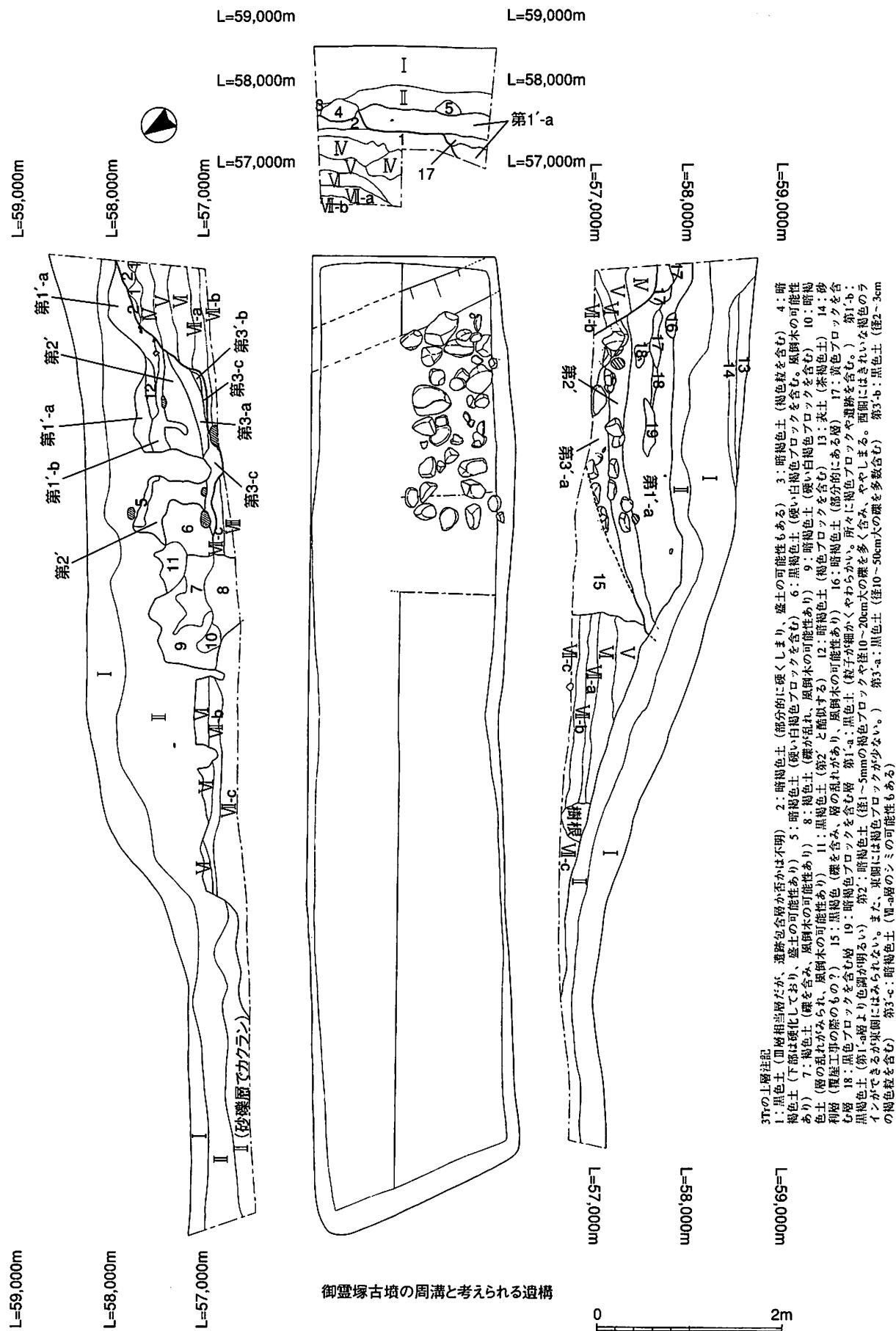


Fig. 8 №3 トレンチ平面及び断面実測図 (1/60)

通っていたので、水道管を境に東側を4トレンチ、西側を5トレンチとして周溝上面の確認を目指して掘り下げを行った。しかし、周溝の接合状態がよくわからなかつたので、水道管の下も掘り下げて2つのトレンチをつなげてみた。

トレンチの大きさは最終的には連続した任意の点Sを基準としたやや不整形な長方形状の形態になった。縦が約5.5m~8.1m、横が約6.2mで深さは地表面より約90cmから周溝の最深部で150cmである。トレンチ内は、旧地形の高低差があり、2つの周溝のラインが不明確だったのでVII-bの下部まで掘り下げて周溝の確認を行った。

出土遺物は、I、II層、周溝内埋土より弥生時代後期の土器片を中心に縄文早期、晚期の土器片、石鏃、古代の土師器片がコンテナ2箱分出土している。

1) 御靈塚古墳の墳丘側

周溝のラインが不明確だったので、最終的にはVII-b層まで掘り下げた。西側のトレンチ断面や他のトレンチ断面からもわかる様に基本的にはV層以下の自然堆積層と攪乱が残っており、整地面や盛り土は確認できなかつた。一部、自然堆積層か攪乱なのかよくわからない部分もある。

2) 御靈塚古墳の周溝

c-c'点での断面図から周溝の幅は約4mを越え、深さは約30cm以上（西側の断面で確認する限り約80cm）ある。但し、幅は底面に近いためか一定ではない。

周溝部分の土層は、1トレンチと同様、大まかに3層に分層できる。更に、第2層は2層（第2-a、第2-c）に細分される。土層の注記は1トレンチとほぼ同様である。

遺物いづれの層からも弥生時代後期の土器片が出土している。

3) 2号墳の墳丘側

東側と南側の断面、2号墳側の平面に2トレンチから8トレンチにかけて広がる遺構の埋土IV'層が観察される。この層には弥生時代後期の土器片が含まれており、2トレンチの遺構と同様弥生時代の遺構内埋土と考えられる。東側の断面を観察するとプラン的には住居跡の可能性が高いが硬化面や柱穴な

どは確認できないが、何らかの遺構である可能性が高い。

整地面や盛土は確認できなかつたが、自然堆積層及び弥生時代の遺構や包含層の上に2号墳が造られていることが判明した。

4) 2号墳の周溝

周溝の規模はD-E点、F-G点での断面図と4・5トレンチの平面図で観察すると幅が約200~300cm、深さが約80~100cmである。a-a'点、b-b'点での掘り下げた確認面での規模は、幅約170~230cmで深さが35~50cm程であった。また、E-F点での周溝の最深部は、絶対高57.85mであり、G-H点での最深部は、絶対高58.10mを測り、レベル差が25cmある。これらのデータから2号墳の周溝は南側から北側にいくにつれ幅が狭くなり、最深部のレベルは高くなっていることが観察される。最深部のレベルの違いは、礫を含む地山であるVII-b層の旧地形を示していると考えられる。

周溝内の2つの断面と2つのベルトの断面土層は色調の違いがあり、統一するには難しい。特に南側の断面は全体的に黒色が強く西側からの流れ込みが観察される。その様な状態で全体的に3つに分層すると、まず両側から流れ込み三角堆積を形成している褐色粒やVII層の崩土を含む層、次に黒色が強い土が流れ込む層、そして、その上に堆積する最上部の層になりそうである。

遺物は、I、II層、周溝内埋土から弥生時代後期の土器片を中心として、一部縄文時代早期の押型文土器や塞ノ神系土器片、後晩期の浅鉢口縁部の土器片、石鏃等が出土した。その中でも周溝内埋土（22の層）から2号墳築造時期の決め手となる提瓶（須恵器）がほぼ1個体出土している。6世紀の後半と考えられる。

これらのことから2号墳の周溝は自然堆積層及び弥生時代の遺構や包含層を掘り込んで造られたと推定される。

5) 2つの古墳の接合部

北側のF-G点での断面および2つの周溝にまたがるベルトのb-b'点での断面で観察すると御靈塚古墳の周溝は、2号墳の周溝を完全に切ることな

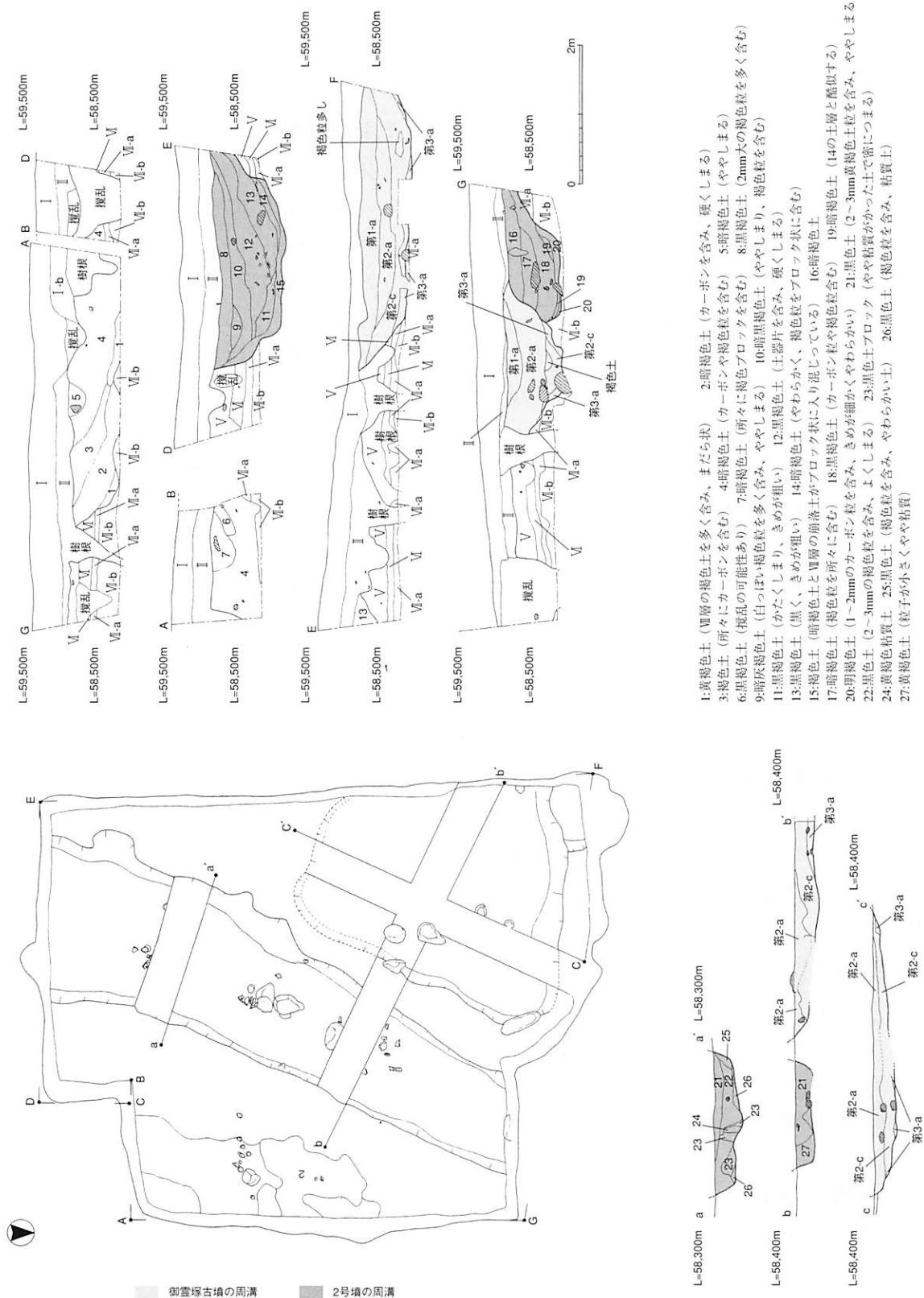


Fig. 9 No. 4 · 5 トレンチ平面及び断面実測図 (1/90)

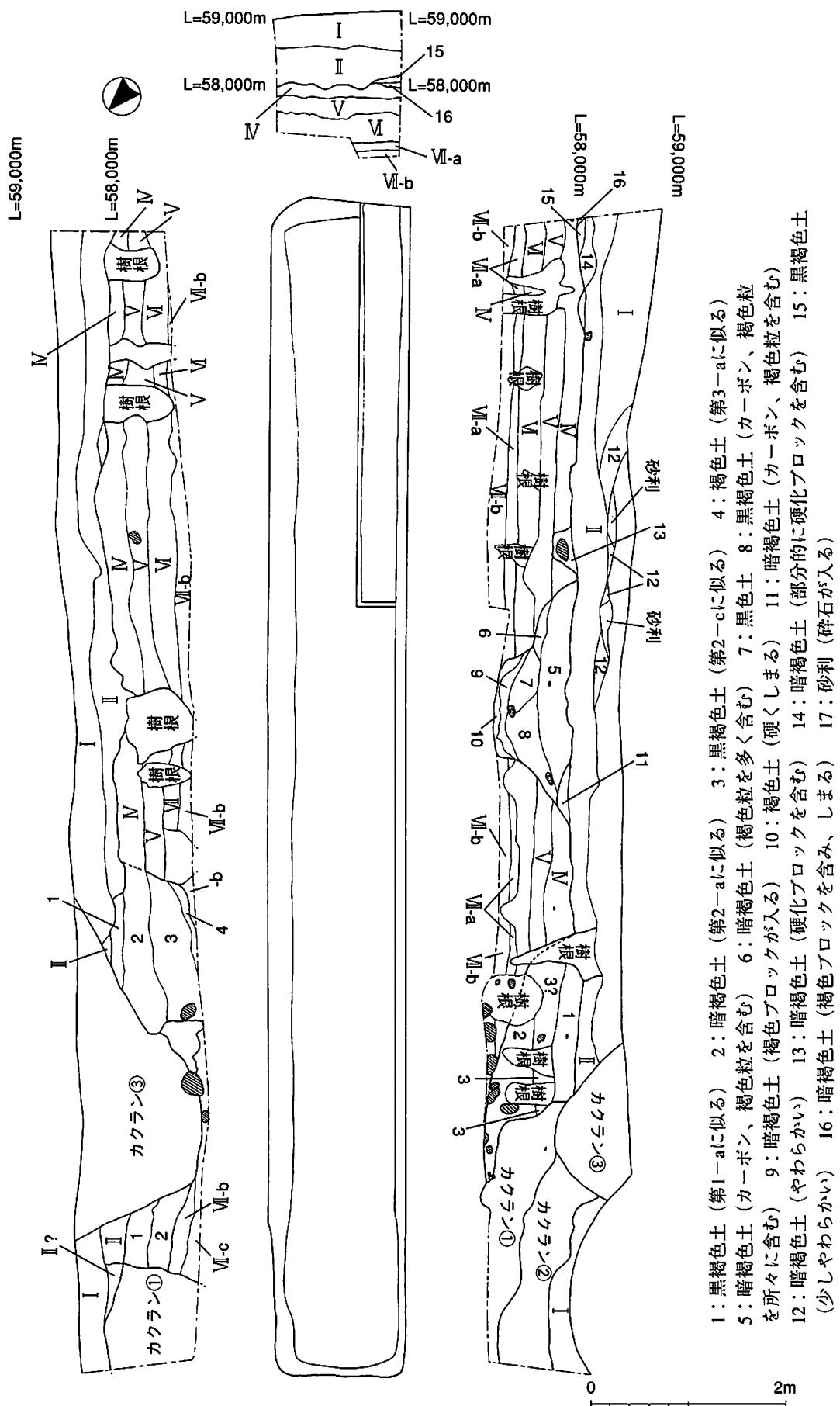


Fig.10 No 6 トレンチ平面及び断面実測図 (1/60)

く途中で止まっている。

このことは、2号墳が出来上がった後、それに継ぎ足した形で御靈塚古墳が造られたことを意味していると考えられる。

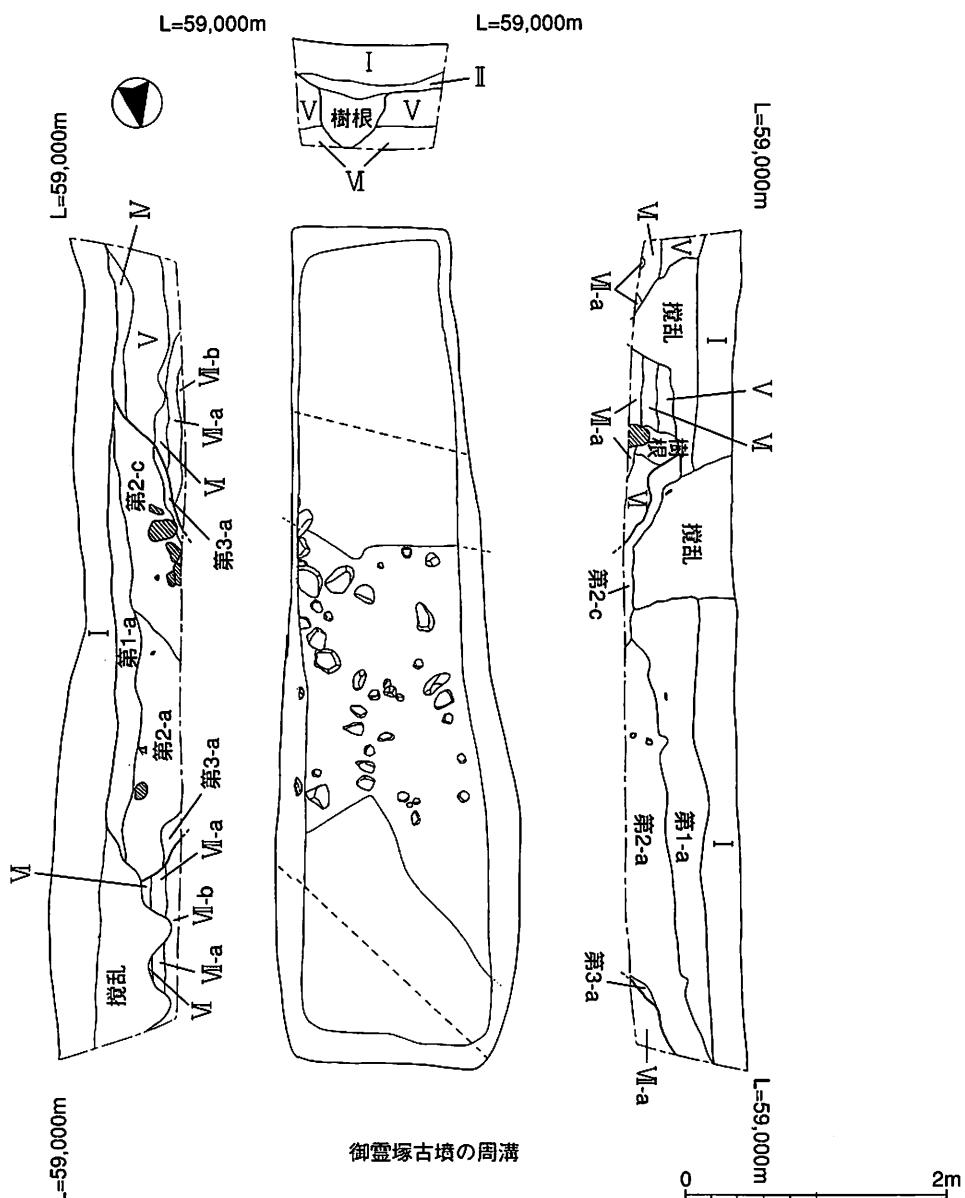
第6トレンチ（距離はP点からの水平距離）

北西方向に約8.4mから20mに設置。長さ約11.6m×幅約1.5m。深さはⅦ-b層及び搅乱層の下部まで掘り下げたため、約150cmを測る。

このトレンチには樹根や搅乱が多数入っているためにどこに周溝が通っているのかが明確ではない。ただ、トレンチの南西側、12.2m～14.6mには明らかに溝か土坑状の遺構があるが、これが3トレンチ

から続く周溝と考えるにはいくつか疑問点がある。それはこの遺構の埋土は全体的に黒く、1トレンチや3トレンチの周溝内の埋土とは色調が違うこと。また、この遺構の大きさは正確には測定できないが、断面で確認すると幅は約2m～2.4m、深さが0.6m～0.8m、絶対高が最深部で57.2mとなり、斜めにつながるとすればその規模は更に小さくなる。そして北東側の断面にはこの遺構の続きは確認できない。これらのことからこの遺構を周溝とは断言できない。

P点からトレンチの北西側に15.5m～16.5mから20mにかけて大きな搅乱が3つ確認される。1トレンチとの間には農業用のビニールが多量に埋められていたので最近の搅乱も含まれていることは明らか



である。幅は2~3m以上にもおよび深さもⅦ-C層の地山の礫層まで達しており、かなりの大規模な搅乱が3回に分けてあったことが観察される。

ここで気になるのがこの4つの搅乱および樹根の間に見られる元々搅乱を受けていない層が1トレンチの周溝の埋土と大まかに3層（1の層、2の層、3の層）に分層できるという点で良く似ていることがある。しかし、掘り込みラインや削り出しが確認できないので断定はできないが、周溝の可能性も否定できない。いずれにせよこれらの層は自然堆積層ではないと考えられるので、なんらかの遺構である可能性は高い。

また、これらの遺構よりP点側はⅣ層以下が自然堆積層になっており、その上に盛り土の可能性のある硬化面を有する褐色ブロック混じりのややしまる層（16の層）が確認される。

遺物は、I、II層、搅乱や遺構内埋土から弥生時代後期の土器片がビニール1袋分出土している。

第7トレンチ（距離はP点からの水平距離）

北方向に約6.8~13.2mに設置。長さは約6.4m×幅約1.2~1.8m。深さは周溝のラインがはっきりわかるⅦ-b層まで掘り下げたため、約70~90cmを測る。それより以下の周溝内の掘り下げは行わなかった。

遺物は、I、II層、遺構内埋土から弥生時代後期の土器片がビニール2袋分出土している。

1) 御靈塚古墳の周溝

周溝の幅は、約330~450cmを測る。検出面である第3-a層での周溝の形状が一部幅狭くなっており、不整形を呈しているが、上部の第1-a層では斜めにうまくつながりそうだ。当初周溝のくびれ部の可能性も考えたが、底に近い可能性もあるので、くびれ部ではないと判断した。しかし、周溝の幅が狭まっている地点が石室のちょうど裏側に位置しているということは、全く偶然かもしれないが興味深い事実である。

約80cm掘り下げて周溝の完掘までは行わなかったが、1トレンチと4・5トレンチの周溝と同様に埋土は大まかに3層に分層できた。また、1トレンチと4・5トレンチの周溝へつながることも確認できた。

2) 御靈塚古墳の墳丘側

IV層以下の自然堆積層が確認されたが、盛土と考えられる層は確認できなかった。樹根や搅乱が随所に見られた。

第8トレンチ

このトレンチは、約1.5~1.8mの段差があった所を垂直にカット、清掃し、断面を確認したトレンチである。おそらく明治期〔明治7年（1874年）～明治42年（1909年）〕の小学校及び尋常小学校建築の際に大きく掘削を受けたと考えられる。

長さは約6m×高さが2.0~2.3mで地山の砂礫層（Ⅶ層）が確認できるまで断面を削って観察した。

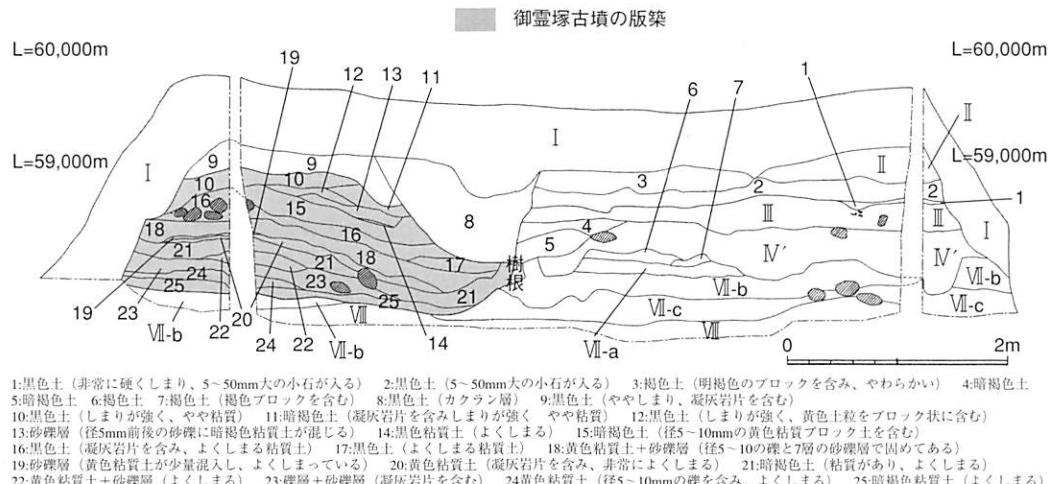


Fig.12 No 8 トレンチ断面実測図 (1/70)

その結果、トレンチの西側から約2mの所まで(御靈塚古墳の石室の中心から約6mの所)御靈塚古墳の石室造築の際に掘り込まれたラインと幾層にも重なる版築の斜めの層位が確認された。版築の土は砂礫や粘土を交互に用い、石室が崩れないように強く突き固めてあった。一部上から大きな掘り込みが見られたが、以前あったとされる近世墓の可能性も考えられる。

残りの約4mは、樹根や搅乱を除けば、ほぼ自然堆積層であるが、Ⅲ層は主に弥生時代後期の土器片を含む包含層であり、Ⅳ'層は弥生以前の遺構埋土であると考えられる。Ⅲ層上面の1の層は、非常に固くしまる黒色土である。2の層はⅢ層と同様、東側の約1/3が固くしまっているが、西側はやわらかい。これらのことから1の層を含めたⅢ層と2の層の東側上部からかなりの圧力がかかったものと考えられる。1の層と2の層は自然堆積層と考えられるので、その上を整地の際に突き固めた可能性が考えられる。

2号墳の周溝はこの断面では確認できなかった。おそらく御靈塚古墳の石室造築の際に大きく掘削を受けた時に完全に消滅したものと考えられる。この推定は、レーダー探査により8トレンチと4・5トレンチの間に周溝らしいものが確認されたことからも伺え、まだその一部が8トレンチと4・5トレンチの間に残存していることを示唆している。

遺物は、I、II、III、IV'層より弥生土器片が、また段下の搅乱層から近世以降の陶磁器片を中心に明治期の小学校で使用していた石版片などが合わせてビニール5袋分出土した。

iii—3 小結

1トレンチ～8トレンチまでの調査でわかったことを以下にまとめ、墳丘規模等を復原してみたい。

1) 2つの古墳の新旧

Fig10の2つの周溝切り合い関係及び2号墳の周溝に接する形で御靈塚古墳の周溝が始まっていることから、円墳である2号墳が先に造られた後に継ぎ足された形で御靈塚古墳が造られたということが推定される。時期差は2号墳の周溝がほぼ埋まる位だが、それほど時間的には離れてはいないのではない

かと考えられる。

その判断は今後の2号墳の発掘調査に期待したい。

2) 2号墳の墳丘規模など

2号墳の石室の調査はできなかったので、墳丘上に露出している石材から考えられる奥壁の中心点を推定した。そして、4・5トレンチで確認された周溝では削り出しこそ確認できなかったが、内側の落ちまでの距離を測ると半径が約8.5mである。

すなわち直径が約17mの円墳と推定される。

立地も、日の岡山から続くなだらかな微高地の最先端部で内田川に面する絶好の場所に位置しており、低位段丘面上にあたる。各トレンチで地山の礫層(Ⅶ～c層)のレベルを考えても2トレンチでは58.2mなのに対し3トレンチでは57.1mであり、その差は1.1mもある。2号墳が存在する東側が当時一番高かったと推定される。

また、古墳を築造した際の整地面（この場合、石室を造るためではなく、盛土をする以前の段階である）を考えてみると良好な弥生時代の遺物を中心とする包含層(Ⅲ層)や遺構埋土(IV'層)が残っていることから旧地形を利用して、整地し、盛土をしたと考えられる。おそらく2トレンチのⅢ層上面(約59.2m)と8トレンチの2の層上面(約59.2m)あたりが整地面になるのではないかと考えられる。2号墳に伴う盛土の可能性は、2トレンチの8の層が考えられるだけで、その他では確認できなかった。おそらく本来の盛り土部分は、長い年月の間に流され、樹根や人為的な搅乱によりほとんどなくなってしまったと考えられる。

3) 御靈塚古墳の墳丘規模など

1トレンチで確認された周溝の削り出しと奥壁の中心点の距離が約10mあり、直径約20mの古墳と推定される。

2号墳に接してすぐ西側に造られており当時、残された最良の場所だったと考えられる。

古墳を造る際の整地は2号墳と同様、自然堆積層を整地したと考えられるが、東から西へやや傾いている。その高低差は約1.1mである。盛土の可能性が考えられるのは、3トレンチの4の層下部(58.3m)と6トレンチの16の層下部(58.1m)だけであり、

1トレンチでは弥生時代後期の遺物を含む包含層であるⅢ層（58.7m）があることを考慮すれば、なだらかに東から西へやや傾斜している自然地形をうまく利用して整地したと考えられる。このことは4.5トレンチで御靈塚古墳の周溝の最下部レベルが58.1mであり1トレンチでは57.0mということからもからも推測できる。

石室を造る際の掘り込みは、石室の中心線から東側へ約6mにも及び、2号墳の周溝や元々あった自然堆積層をカットして整地してある。8トレンチの掘り込み面の最深部は57.3mで現在の石室羨道の最低部が57.47mを測る。整地の後、掘り込みを行い、石室の石材を置き、砂礫層や粘土層などを交互に混ぜながら版築を行い、石材が倒れないようにしたと考えられる。

最後に周溝から考えられる墳形について述べたい。4.5トレンチ、7トレンチと1トレンチについては御靈塚古墳の周溝がつながっているが、6トレンチにはうまく続かない。その理由は6トレンチには多くの搅乱が入っており、周溝がどこにあるかが断定できないことが挙げられる。また、3トレンチには周溝と考えられる遺構があるのは確かであるが、東壁に風倒木と考えられる大きな搅乱が入っており、その遺構の形態が不明確なことや周溝がつながっていない方向の6トレンチに明確な周溝がないこと、また、4.5トレンチ、7トレンチと1トレンチの周溝内の埋土とやや異なることが3トレンチの周溝とうまくつながらない理由である。これらのことから御靈塚古墳の周溝は、確実に4.5トレンチ、7トレンチと1トレンチまではつながるが、6トレンチと3トレンチにはつながらない結果となった。この古墳の周溝がどの様につながるかは1トレンチ、6トレンチと3トレンチの間を面的に下げて周溝のつながりを確認しなければ正確には分からないので、今後の調査に期待したい。

（岡本）

参考文献

- ・慈恩寺経塚古墳Ⅱ 植木町教育委員会 1995
- ・慈恩寺経塚古墳Ⅲ 植木町教育委員会 1996
- ・五郎山古墳 筑紫野市教育委員会 1998
- ・西館古墳 田主丸教育委員会 1996

IV 横穴式石室の調査

iv-1 調査の方法

調査は、まず石室軸線の設定から始めた。軸線の設定は、玄室奥壁腰石幅の中心点と玄門幅の中心点をとおる線を主軸線に、これに直交し、玄室天井の中心をとおる線を玄室横断線とした。主軸線は磁北に対し11°西に振る。石室壁面は泥とカビに覆われていたため、実測の前に壁面の清掃と装飾の再確認を行なった。壁面の清掃は、装飾を傷めないよう、霧吹きで最低限の泥とカビを落とすまでとした。その結果、新たな装飾が確認され、装飾のいくつかは埋土中に続いている。そこで、装飾の保護を第一に考え、床面の未堀部分は現状のままとすること、割付はチョークを用いず水糸のみで行なうこととして実測を開始した。実測は、石室全体を実寸の1/10で、装飾の見られる部分を1/5で行なった。また、調査中に、御靈塚古墳北側の社殿参道入口の立石に、赤色顔料の付着するものあることを確認した。この他にも、御靈塚古墳周辺には、石室石材であった可能性のあるものがいくつか存在し、これらの実測もあわせて行なった。実測ののち写真撮影を行ない、調査を終了した。

さて、御靈塚古墳の石室は、「单室の横穴式石室で羨道は現状ではない。羨道を入ると直ちに石室である」(原口1984 p.56)とされてきた。羨道は破壊が著しく、具体的な構造は読み取れない。今回、羨道側壁や玄門袖石で、壁内側を意識した装飾を再確認し、羨道とされた部分は、横に長い長方形プランの前室である可能性もでてきた。今回の報告中では羨道として記述したが、前室の可能性も否定できない。その最終的な判断は、床面の発掘調査ののち行なうべきであろう。

また、玄室入口を玄門、玄門から奥壁に向かって左・右側壁、奥壁から玄門側を見た壁を前壁と呼称する。石材については、その形状から塊石、板石、円礫に分け、岩石種を冠して記述する。

iv-2 玄室・羨道、古墳周辺の石材の調査

玄室 今回の調査では、床面の埋土を除去していない。現況で、玄室の規模は、左側壁幅2.56m、右側

壁幅2.70m、奥壁幅2.46m、前壁幅2.44m、現床面上の玄室中心点から天井まで2.40mを測る。玄門幅は0.6mを測り、玄門は右側壁側に偏って開口する。框石は凝灰岩製で、工具で丁寧に面取りされる。

奥壁腰石は、現況で高さ1.1~1.2mを測り、左側壁側の肩が下がっている。両側壁の最下段石材は、奥壁腰石より一回り高さの低いものが用いられ、奥壁を挟んで据えられる。最下段石材の上には、右側壁で1段、左側壁で2~3段石材を積み上げ、奥壁腰石の上端で横目地を揃えている。左側壁の最下段石材は、他壁に比べ小形であるため、最下段の上端を切り込んで上石をかませ(PL.13-①)、また、「打ち矧ぎ」のように石材を積むなど、工夫が見られる。玄門袖石は左右1石ずつからなり、側壁を閉じる形で据えられる。玄門左袖石は、右袖石より0.4mほど横に長い。玄門袖石上部には削り込みが見られるが、この削り込みに対応する石材は確認できない。各壁石材は、奥壁腰石の上端レベルまでほぼ垂直に積み上げられ、装飾も、その範囲に限って施される。石材は凝灰岩塊石が主に用いられ、石材に残された工具痕に関しては、詳細を明らかにしていない。

奥壁腰石の上端レベルより上の石材は持ち送って積み上げられる。石材は基本的に凝灰岩塊石であり、塊石上面に生じた凹凸を平らにするために、安山岩板石や円礫が用いられる。石材は、この「凝灰岩塊石+安山岩板石、円礫」を一単位とし、横目地を通しながら積み上げられ、最終的に天井石が架構される。石材の間には、粘土状のものを詰めた箇所も散見される。

特記事項として、右側壁最下段の石材には溝状の削り込みが縦走する点、左側壁・前壁コーナー付近の石材には、2cm×1cmの孔が貫通する点を挙げることができる。

天井を見上げると、奥壁から前壁まで1.8m、両側壁間で1.5mの、丸い天井石が見える。天井石は凝灰岩1石からなり、表面には無数のひびが走り、それに伴う層状の剥落が著しい。天井石の中心には、長径32cm、短径26cm、深さ20cmの、楕円形の窪みが見られる。天井石は本来的位置を保っておらず、左側壁・前壁側に向かって下がっている。

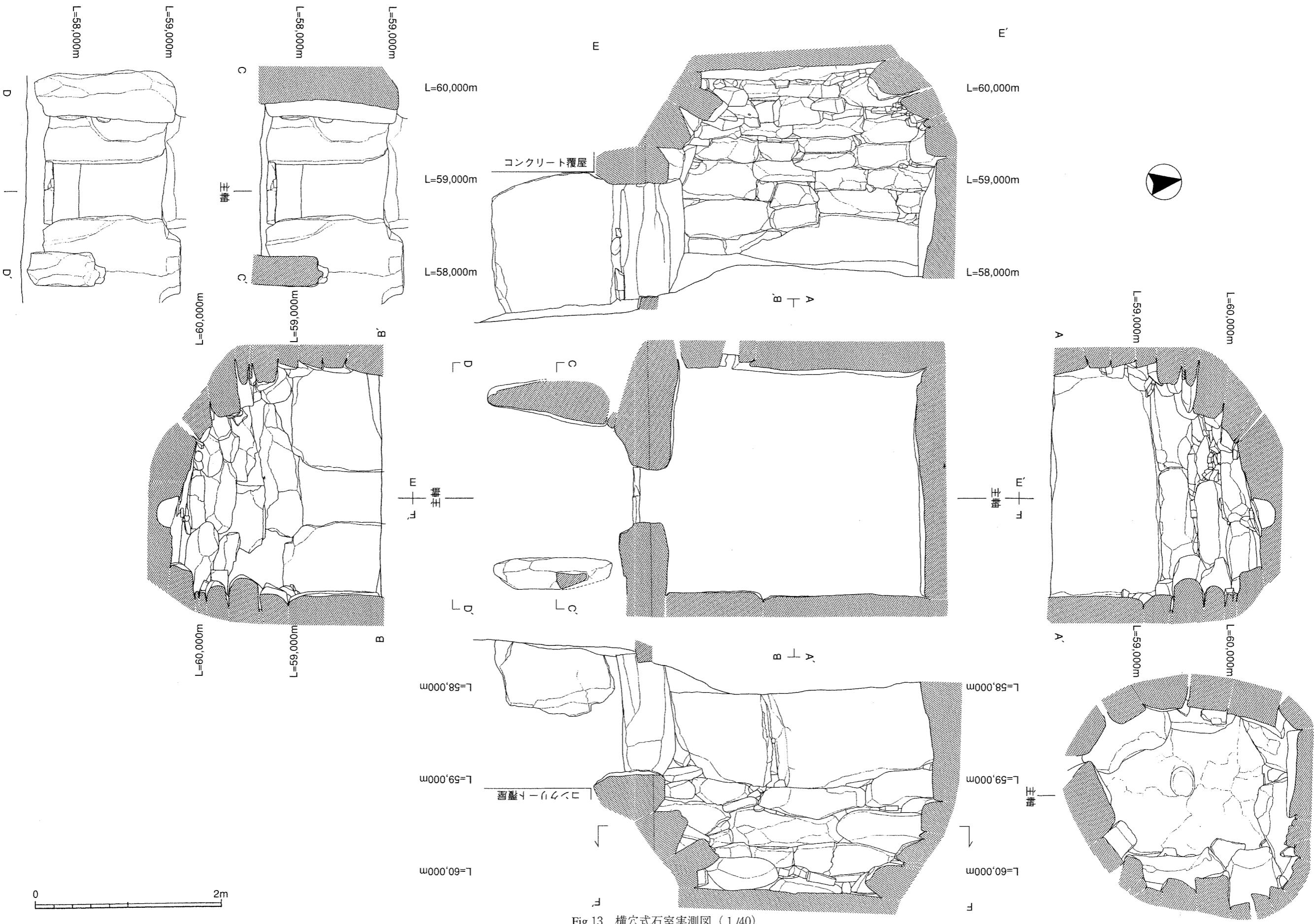


Fig.13 横穴式石室実測図 (1/40)

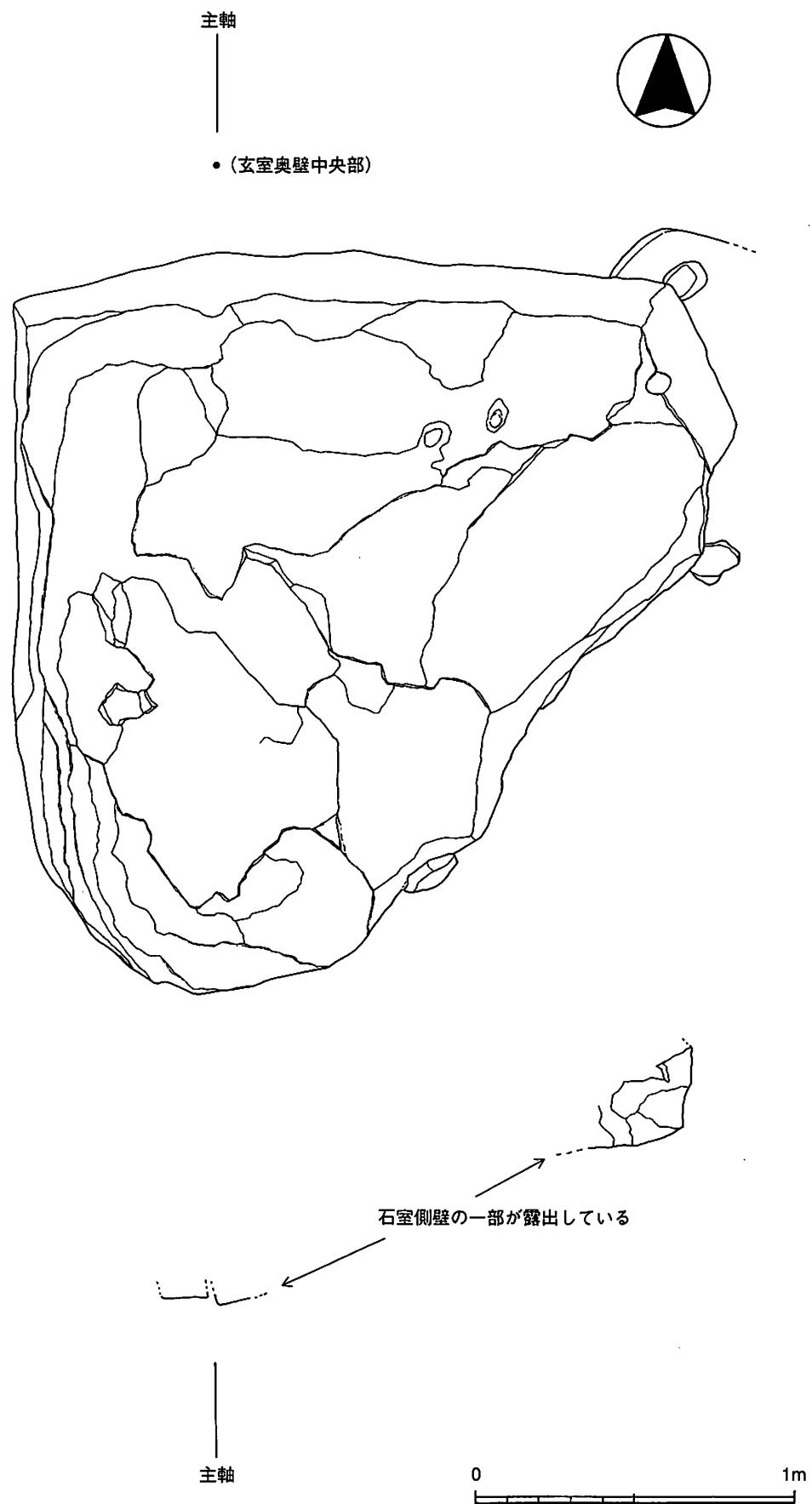


Fig.14 横穴式石室露出天井石実測図 (S = 1/20)

玄室床面には、天井石付近の隙間などから流入した土砂が、0.4~0.5mの厚さで堆積する。土砂の上には、安山岩板石、凝灰岩塊石・板石、石材不明の円礫が散在する。安山岩板石、凝灰岩板石には赤色顔料の付着するものもある。その他、弥生土器の小片や現代のガラス片、獸骨を採集した。

羨道 羨道は破壊が著しい。天井石はなく、わずかに側壁が左右に1石ずつ残るだけである。両側壁ともに凝灰岩塊石が用いられ、装飾が確認される。床面は標高57.6m付近で、玄室の現床面より約0.5m低い。框石のレベルから判断して、本来の床面に近いと思われる。

玄門袖石には、羨道側の面に削り込みがあり、特に右袖石で顕著である(図版2)。閉塞に関わる施設の存在を想起させる。削り込み内にも装飾が施されている。

左側壁の一石は、高さ1.5m、幅1.3mで、外に向かってハの字状に開いて立っている。玄門左袖石の装飾の一部が左側壁に隠れることから、左側壁は本来、主軸線に平行に立っていたものと考えられる。また、左側壁の上端レベルは、玄門袖石の上端レベルと揃い、安山岩板石を積んで、玄門袖石上の石材を載せている。

右側壁の高さは0.85mであり、左側壁の約1/2の高さである。石材は、石材上面の観察から折れたものと判断され、本来は左側壁と同程度の高さを有していたと推定できよう。

左右側壁間の距離は、左側壁が原位置でない可能性を考えても、1.6mを超えることはないと思われ、玄室の横幅に比べ狭い。

古墳周辺の石材 御靈塚古墳の北側には大明神を奉った社殿があり、その参道入口には注連縄のかかった立石が2つある。立石は古くからあり、毎年10月19日に御靈組の人々で注連縄を締めかえるという。

Fig.16. 1は参道北側の立石で、高さ1.2m、最大幅0.9m、厚さ0.4mを測る。凝灰岩製で、前後面ともに面取りがなされる。後面の面取りされた部分に

は、約6cm×12cmの範囲で、赤色顔料の付着がわずかに見られ、装飾と思われる。右側面は、丁寧な面取りで平坦面となる。上側面は段がつけられ、その他の側面は粗い打ちかきがなされる。これらの加工が、石室石材としてのものかは即断できない。右側面、前・後面が平坦に面取りされること、装飾が後面に確認されることから、羨道の右袖石であった可能性を考えておきたい。

Fig.16. 2は参道南側の立石で、高さ1.6m、幅1.1m、厚さ約0.5mを測る。花崗岩製。顔料の付着は確認できない。前面は丁寧な面取りによってゆるい凹面となり、前面下部には、段が作出される。面取りの明確なのは前面のみであり、側面から見ると、後面側が下膨れた形状となる。この立石を石室石材とするならば、他の石材が灰黒色ないし暗褐色であることに對し、石材の色は白と異質である。石室の天井石や閉塞石など、対にならず単独で用をなす部分の石材であろう。

また、立石のある参道北側の故 富田昭一氏宅にも、石室石材と考えられる庭石がある。Fig.16. 3である。表面はコケにおおわれ、顔料の付着の有無や細かな加工の状態までは観察できない。凝灰岩製で、最大長1.3~1.4m、厚さ0.4~0.6m、電話の受話器のような形状である。前面と右側面は面取りされたようであり、前面は平坦に、右側面は凹面に仕上げられ、下部は突出する。石室のいずれの部分に用いられたかは想定できなかった。

iv-3 小結

石室築造工程について

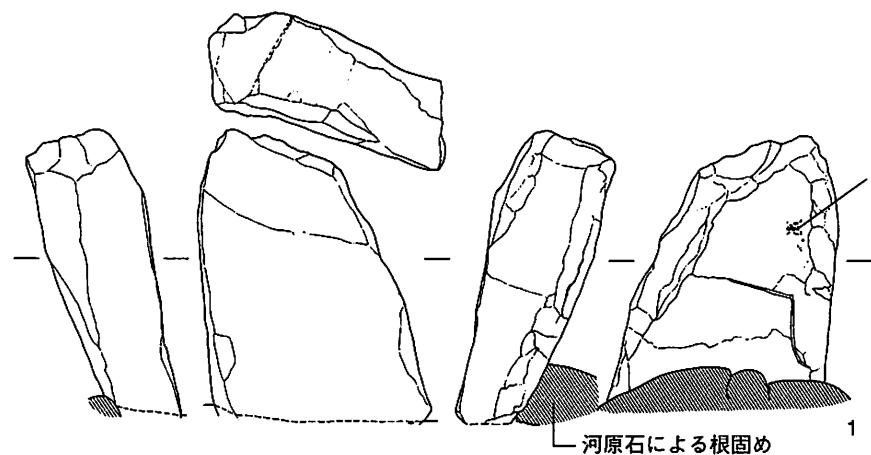
御靈塚古墳の石室築造工程について、残りの良い玄室を中心に考えてみたい。

御靈塚古墳の玄室は、凝灰岩塊石と安山岩板石、円礫の組み合わせを一単位として石材を積むため、安山岩板石、円礫上端で明瞭な横目地が通る。この横目地を基準にすると、構築過程は以下のように表せる (Fig.17)。

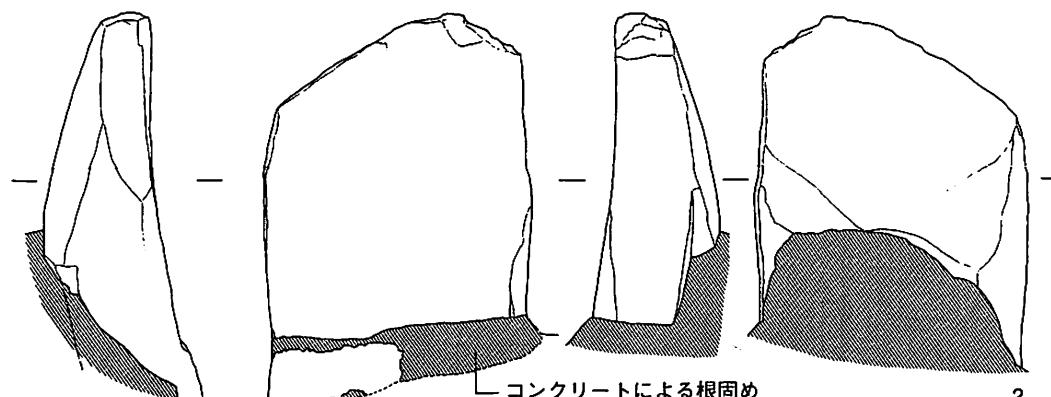
I 工程 凝灰岩十安山岩。

玄室腰石上に石材をほぼ垂直に積み上げる。

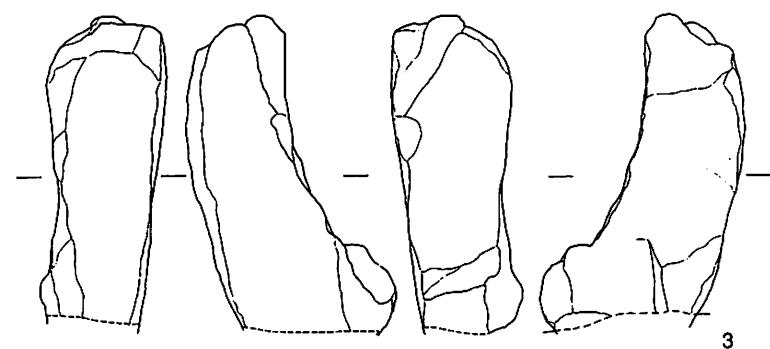
奥壁で標高59.2m前後まで。



神社参道入口左立石



神社参道入口右立石



富田昭一氏宅庭石

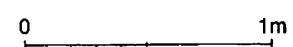


Fig.15 石室石材実測図 (S = 1/30)

羨道左側壁の上端は標高59.1mであり、羨道の構築もⅠ工程でなされたと考えられる。

玄室、羨道ともに、装飾はⅠ工程の石材にのみ施される。

Ⅱ工程 凝灰岩十安山岩、円礫。

Ⅱ工程以降、石材は持ち送られる。

装飾はない。

奥壁で、標高59.7m前後まで。

Ⅲ工程 凝灰岩十安山岩、円礫。

奥壁で、標高60.0m前後まで。

Ⅳ工程 凝灰岩十安山岩、円礫。

奥壁で標高60.4m前後までが、周壁の高さとなる。

最終的に、天井石を架構する。

Ⅰ工程の石材は垂直に積み上げられ、装飾の施される範囲もⅠ工程の石材に限られる。第8トレンチでは、玄室の墓壙断面が観察できる。第10層は標高59.0mであり、水平に堆積し硬く締まっている。標高59.0mは、Ⅰ工程の上端レベルである標高59.2mに近い。上の諸点を考え合わせると、第10層上面は石室構築の一作業面であり、装飾は、Ⅰ工程の石材を積んだ時点で施された可能性が高いと言えよう。

Ⅱ～Ⅳ工程の石材は、玄室の中心に向かって、石室の隅を消しつつ、ドーム状に持ち送って積み上げられる。石材を持ち送るには、壁と壁の接する四隅の積み方が重要となってくる。最も理解しやすい、奥壁と右側壁の接する隅を見る(PL.14)。Ⅰ工程の後、奥壁腰石上に①、両側壁を跨いで②を積み、①の上に安山岩板石を置き高さを揃え(Ⅱ工程)、続いて奥壁に④、右側壁に⑤を積み、④⑤上の安山岩板石で高さを揃え(Ⅲ工程)、再び両側壁を跨いで力石⑥を積み、安山岩板石で上端を揃えて、天井石を架構する(Ⅳ工程)。特に、⑤は丁寧に面取りされ、玄室側に見える側を凹面に仕上げている。石材の積み方とあわせ、玄室の隅を消す意識が良く表れている。これと同じ積み方は、明確でないものの他の隅にも見られる(PL.13)。

石室内空間について 玄室右側壁1段目の石材には、縦走する溝状の削り込みがある(Fig.17▶)。装飾は削り込み部分にも連続し、削り込みは装飾以前に作り出されたとわかる。石材の積み出しや石積みの重量対策に関わる削り込みであろうか。また、左側壁・前壁コーナー付近には、2×1cmの孔の貫通する石材がある(Fig.17▷)。これと対になるものは、右側壁では確認されない。孔の内側にはサビ状のものが付着する。玄室内に、この孔を利用した、何らかの施設が存在した可能性を示している。

天井石の窪みは、江戸時代にはすでに存在したようで、『肥後国誌』に「上ノ大石ニ胄ノ鉢ノ形ニ穿チタル穴アリ」との記載がある。窪みが後世のものとするならば、コウモリが集中的にぶら下がった痕跡、焚き火の熱による剥落などが考えられるが、石室構築に伴うものである可能性も否定できない。しかし、天井石付近は煤の付着が著しく、玄室内で火を焚いたことは間違いない。これを根拠として、窪みの成因は、焚き火の熱による剥落を有力候補としておきたい。

玄室床面上には、赤色顔料の付着するものを含む、いくつかの石材が散在する。石材は現床面上に横に寝た状態であり、また、床面埋土中にもいくつか石材が埋積する。これらが石室に伴うものかどうかの判断は、床面の埋土を除去する際に行ないたい。

床面から採集された弥生土器の小片は、玄室内への土砂の流入に伴うものであろう。獸骨はタヌキのもので、タヌキは玄室天井付近の開口部から侵入したものと思われる。壁面清掃前、このタヌキが残したものか、奥壁に小動物の爪痕と思われるキズを確認していた。しかし、キズは泥やカビの上に残されたものであつたらしく、壁面の清掃に伴って消滅してしまった。壁面に付着した泥やカビの厚さを示すとともに、懸命の脱出を試みた小動物の姿を物語つていよう。

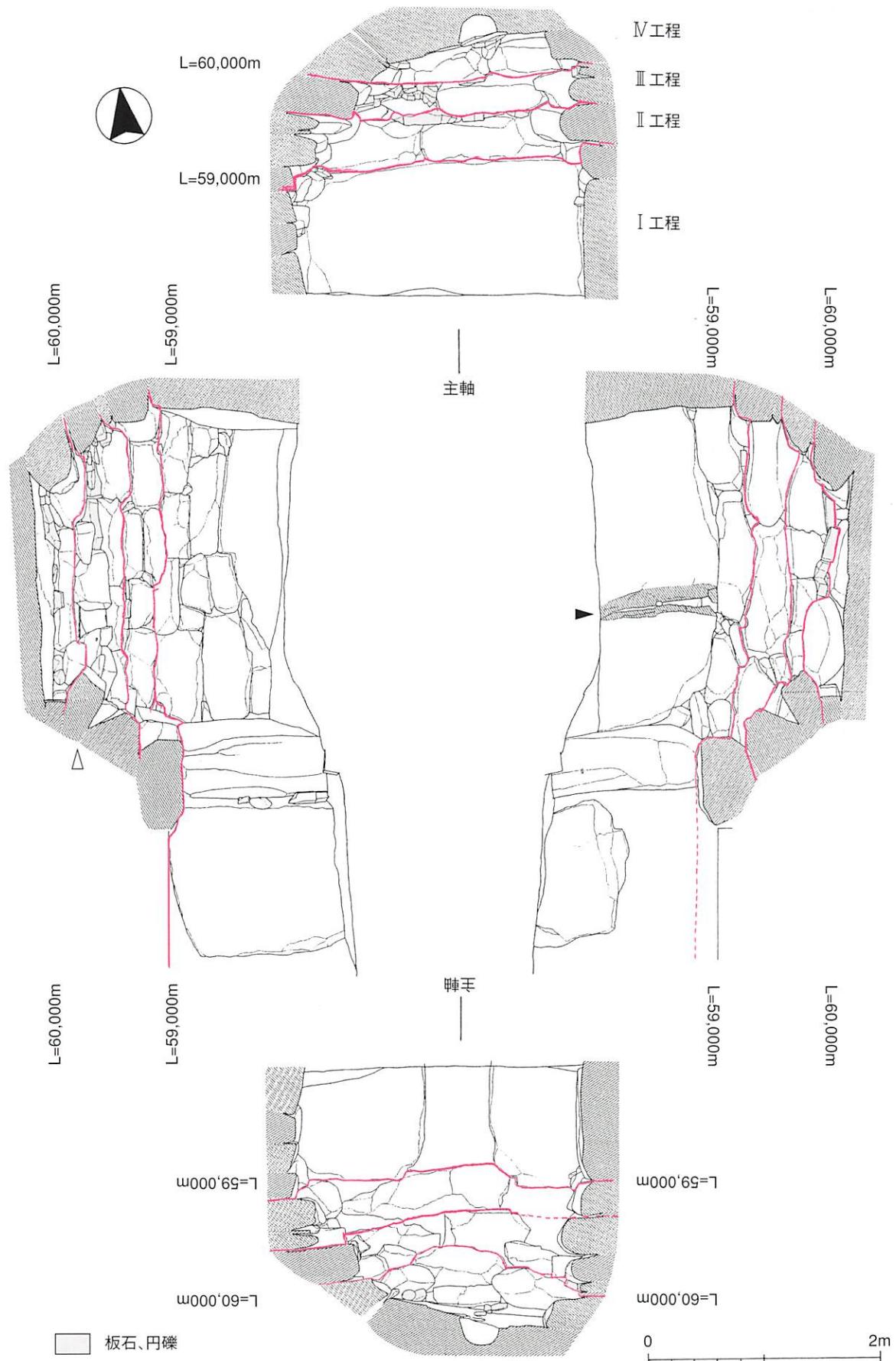


Fig.16 石室築造工程模式図 (S = 1/50)

石室壁面の現状 玄室横断面図を見ると、左側壁Ⅰ工程は外に、Ⅱ工程以降は内に向かって傾斜するとわかる。さらに、左側壁の構築過程に伴う横目地は、他壁に比べ10cm程度低く、玄門左袖石の肩も右袖石のそれより低い。なぜこのようなことが起ったのか、次の理由を考えておきたい。玄門袖石の左右が不揃いであるため、左側壁側では石材をきつく持ち送る必要があった。さらに、古墳の立地する丘陵の傾斜が左側壁側に向かって下がることから、そもそもきつい持ち送りであった左側壁側が歪んでしまった。

玄室は今、崩壊の危機に瀕している。前壁2段目の石材の大半は抜け落ち、3段目の石材にいたっては真二つに割れた状態である。同じ現象は、玄室前壁から左側壁にかけて著しい。Fig.14中の網掛け部分は、石材の抜け落ちた箇所を後世に修復した部分であり、石室石材であったと考えられる凝灰岩塊石などを詰め、粘土で隙間を充填している。非常に危険な状態であり、早急な対策が望まれる。

(藤木 聰)

V 装飾文様の調査

v-1 調査の方法

石室実測時に清掃し確認された装飾文様は、石室実測終了後、装飾が確認された壁面のみ1/5で実測を行なった。実測に際して、最初に線刻での下地がないかを確認し、彩色のみで描かれている装飾文様であることを踏まえ作業を進めた。

また、装飾が描かれている壁面に付着している埃や泥を落とす際には、文様の保護を第一とし、ブラシや刷毛等は用いず、霧吹きを使用し土・カビの除去に努めた。更に全ての壁面を再観察し、岩肌の窪みに残る顔料の確認を行なった。

装飾文様の実測作業は描かれている顔料への影響を考慮し、水糸を用い基準線を設定し壁面ごとに見通し作業ができる割付枠(10cmメッシュ)を作成し実測を行なった。なお、基準線や割付枠は、温湿度による水糸の伸び短みや見学者の出入りによる歪みで誤差がでるため、毎回確認作業を繰り返し実測を行った。

装飾文様の調査で行われている透明フィルムを表面に当てて行なう実測法は、当古墳の壁画が脆弱な凝灰岩に描かれており、装飾を傷める可能性があること、岩肌の凹凸による歪みを補正することが出来ないことから採用しなかった。

装飾文様は昭和50年代まで長い間保護施設等がないまま自然環境に大きく影響を受けてきたにも関わらず、表面を土に覆われていたため良好な保存状態を保っていたようである。

なお、実測に先立って赤外線による判読を試みたが新たな装飾文様は確認できなかった。

実測終了後、装飾文様の写真撮影を行いすべての作業を終了した。

v-2 装飾文様の調査

羨道 昭和52年に県指定史跡¹に指定され、石室を保護する施設が建設されるまでの長い間、羨道部は直接日光にさらされていた。

そのため、玄室内に比べ羨道部の装飾文様の保存状態は極めて悪く、顔料は岩の窪みにわずかに確認できるに過ぎない。

羨道部右側壁には現在、腰石のみ残されている。ここには、岩の窪みにわずかに赤色顔料が見られるが文様としては確認できない。左側壁は1枚の巨石を利用し構築される。表面はなだらかな自然面を利用し装飾文様が描かれる。この石材で最上段に描かれる文様はここでは一番残りが良い部分にあたる。赤色と白色の顔料が用いられ赤色線の内面にわずかに白色の線が描かれる。その様子から方形を描いていると思われ、盾状(001)の文様が想定される。菊池川中流域の山鹿市地域の長岩横穴墓群第109号墓外壁²に浮彫り線刻されている、上辺が丸く左右の側線が内湾する盾に類似している。

また、この文様の左に位置し、一段下がる場所に赤色で弧状に描かれる文様があるが、周辺に残されている赤色顔料の広がりから、方形を呈していく同じく盾が描かれていたと思われる。さらに、この文様から左斜め下約50cmの位置に、赤色と白色の顔料で底辺をなしわずかに立ち上がる線が見て取れる。更に、この文様と同一レベルの左側に赤色で描かれる線が残される。線の長さ・幅から盾か輶の底辺と思われるが断定はできない。

このほか、この壁面には数多くの赤色・白色顔料を見ることが出来るが、先に上げたような保存状態であったため、文様として捉えることが出来るのは以上である。

玄門右袖石は、羨道部面に赤色を中心とする壁画が残される。装飾文様は羨道部右側壁が立っていた線より内側にのみに残され、側壁線の推定ができる。文様は推定すらできないほど不明瞭である。この壁面でもカビによる被害が大きく顔料の浮き上がりによる剥落が危惧される。

このような中でも、羨道から玄室に至る玄門部にも装飾が施される。文様間に一部空間が見られるものの、大型の二等辺三角形が連続し3箇所(002:上段、003:中位、004:下段)に描かれているのが見て取れる。

また、玄門左袖石羨道面には白色顔料と赤色顔料で装飾が施されるが、わずかに赤色顔料で描かれた円文(005)と思われる文様と最下段に赤色顔料が残る部分以外は文様としてはっきり確認できるまで至

らない。円文と思われる部分は白色顔料の広がりから同心円文の可能性もあるが今では確認できない。

現在、羨道部左側壁が立つ線より外側まで白色顔料の広がりを見る事ができるため、開口していた当時に石材そのものが動かされたとも考えられる。

玄室 県史跡に指定された根拠となった装飾文様は、奥壁右隅の靱と右側壁にある方形の区画内部にX字文を施す盾とその下段に描かれている靱である。

調査にあたって、これらの文様を再確認するとともにすべての壁面において装飾文様が残っていないか確認した。その結果、石室構築に係る1段目の目地より下部の全ての壁面に装飾文様を確認することができた。

奥壁の装飾文様は、奥壁中央部が広い範囲に石材表面（凝灰岩）が剥離し、築造当時の面は残り少ないが、その周囲に具象的な装飾が残される。右下隅に靱（006）・靱（007）、左上隅に装飾の一部を構成したと思われる白色顔料が確認された。（Fig.21）周囲には、赤色顔料が広く塗布され、あたかも白色の線が浮き立つように描かれている。

奥壁は、多数の石材表面の剥離が激しく、不明な点も多いが、この古墳の主題となる壁画が描かれていたことが想像される。

右側壁（Fig.19）は築造当時、一石からなる腰石の全面に壁画が施されていたと思われる。現在は石室中央から向かって、中央よりやや右側に施される割り込み部から折れるように石材が切断される。石室の緩みから来る石材のズレで重量配分が変わり折れたものであろう。

壁画は、この割り込み部を境に左右に描かれる。割り込み部の左側石材（奥壁寄り）は、岩表面の剥落が激しく全体に残りが悪い。そのほぼ中央部にやや不整形の同心円文（008）が1基描かれる。中心部から赤・白・赤と塗り分けられ三重の同心円が確認できる。

中心部の赤色の円文部は、それに沿うように石材が剥落し、縁にわずかに赤色顔料が観察できるに過ぎない。二重目の白色帶は向って上辺から右側で幅が広く底辺で狭くなり不整形な円をなす。三重目にあたる赤色帶は横に狭く縦にやや広がり楕円を呈す

る。また、この文様の右側には赤色顔料が厚く塗られ、縦線に見ることが出来る部分がある。ここでは白色顔料も確認されているため具象的な装飾として文様が描かれていた跡であると考えられる。しかし、現在段階では何が描かれていたかは不明である。

割り込み部右側には、まとまった装飾文様が見られる。方形の区画線のなかに施されるX字文、その下段に靱、これら2段からなる装飾文様と並列するように左側に大型の同心円文が配置される。あたかも、この割り込み部右側の壁面は1枚のキャンバスとして、まとまりある図文で埋め尽くされているようである。

方形の区画線と内部のX状文（009）からなる壁画は幅約10mmの線で外側に赤色、内面を沿うように白色の線を描く。下段に描かれる文様が靱であるため、上段の文様は、盾をモチーフとしていると思われる。下段には、上段の文様と同一幅で靱（010）が描かれる。4本の矢を白色で表現し、本体は上部1/3の位置で下方に向かってくびれている。ここでも赤で引かれた全体形の中を沿うように白色の線が描かれている。線の幅は外線（赤）が内線より幅が広く約13mm、内線（白）が約10mmである。また、これらの文様と石材割り込み部の広い空間には、内部から赤・白・赤と塗り分けてある三重の同心円文（011）が描かれる。中心の円文は縦212mm、横200mmのやや楕円ぎみの円文で、それを取り巻くように幅約110mmの白色帶が巡る。外側の赤色部は盾や靱の側には施さず、割り込み側・低辺にのみ描かれる。

のことから右側に描かれる盾・靱を意識していることがこのことから伺る。

左側壁は、大型の石材を腰石とし、1枚の石材を用いる右側壁と違い、比較的小さな石材を多用して築造されている。この壁面でも今回新たな装飾文様が確認された。奥壁に近い部分で左側壁中、最も大きな石材に、赤・白色による顔料を見る事ができる。顔料の残存状態が良くないことと石材表面の剥離で装飾文様の確認はできなかった。さらに、この腰石より上部3段目の石材にも赤色を見る事ができるが、石材表面の色調とも取れ顔料であるかどうか確認出来なかった。

左側壁の玄門側装飾文様は、埋没している腰石から数えて2石目にあたる。この文様も今回の調査で赤色と白色顔料からなる二重の同心円文が確認されている。横に広い石材の自然面を利用し同心円文が2基並列する(012:左、013:右)。大きさは、ほぼ同じく中心に赤色による円文、外線に白色帶による同心円を描く。

向かって左側の図文では中心の円文の表面に厚く顔料が塗布されており、色彩を施す際に付いたと思われる刷毛目痕を観察することができる。また、外を巡る白色帶の状態と赤色顔料の残存状態が良好なことや、白色と赤色顔料の接する箇所の観察の結果から、顔料の重ね塗りの可能性もある。^(註1) 将来、顔料分析を待って結論を出したい。なお、顔料の重ね塗りは五郎山古墳(福岡県筑紫野市)装飾に類例を求めることができる。³

右側の同心円文は、左側の文様に比べ残存状態は良くなく岩肌や顔料の剥落が激しいが、同心円文として認識できる。

さらに、これら同心円文が描かれる石材の上段にも赤色顔料がわずかに確認される。顔料の剥落が激しく、本来の文様は推測できない状態である。白色顔料と思われる部分もあるが風化が激しく確認は出来ない。

玄室内から羨道部側に向きを変えると、玄門部の玄室面にも装飾文様が施されている(Fig.22)。奥壁から向かって左(右玄門部)には、赤色顔料のみ見ることができるが、図文が何であったかは今回は確認できなかった。この面には全面に顔料が塗布されていた可能性が高いように思われる。また、向かって右(左玄門部)には、三重からなる大型の同心円文(014)が1基確認できた。中心部から赤・白・赤と彩色され、外周の赤色部では底部に三角文を施すような突起が2箇所に見える。全体に保存状態は良くないが、かろうじて観察することができる。この同心円文の左側にも円弧状の赤色帶を見ることができるが、その壁画の本来の姿を確認することはできなかった。石材の周縁部に白色顔料かカビの広がりが判別がつかない部分があるが、同心円文内部で見られる白色顔料と比較すると周縁部の白はカビの可

能性が高いように思われる。

v - 3 小結

当古墳の装飾文様のなかで、最も比重が大きく、重要視され描かれているのは同心円文である。

玄室内部を外から見えないところから被葬者を見守るように数多く描かれている。玄門に描かれた三角文を含めて、辟邪鎮魂の願いが込められていたものであろう。

また、具象画である輶は、奥壁と左側壁に描かれ。る。現在、奥壁中央には何が描かれていたかは不明だが周囲に輶・鞆を配しているところから幾何学文よりは、主題となる装飾は具象的なモチーフを用いていたと思われる。

以上、幾何学文のみを描く装飾文様から具象画である武器・武具などが描かれるようになる段階での古墳で、弁慶ヶ穴古墳に見られる人物・馬等が描かれる自由画風を主題とする古墳より前出の古墳であろう。

(長谷部)

^(註1) 福岡大学文学部 小田富士雄教授の現地での指導時のご教示による。

参考文献

- 1 『熊本県文化財一覧』熊本県教育委員会 1996
- 2 『熊本県装飾古墳総合調査報告書』熊本県文化財調査報告第68集 熊本県教育委員会 1984
- 3 『国史跡 五郎山古墳』筑紫野市文化財調査報告書 第57集 筑紫野市教育委員会 1998
- 4 高木正文『肥後における装飾古墳の展開』国立歴史民俗博物館『国立歴史民俗博物館研究報告・装飾古墳の諸問題』第80集 1999

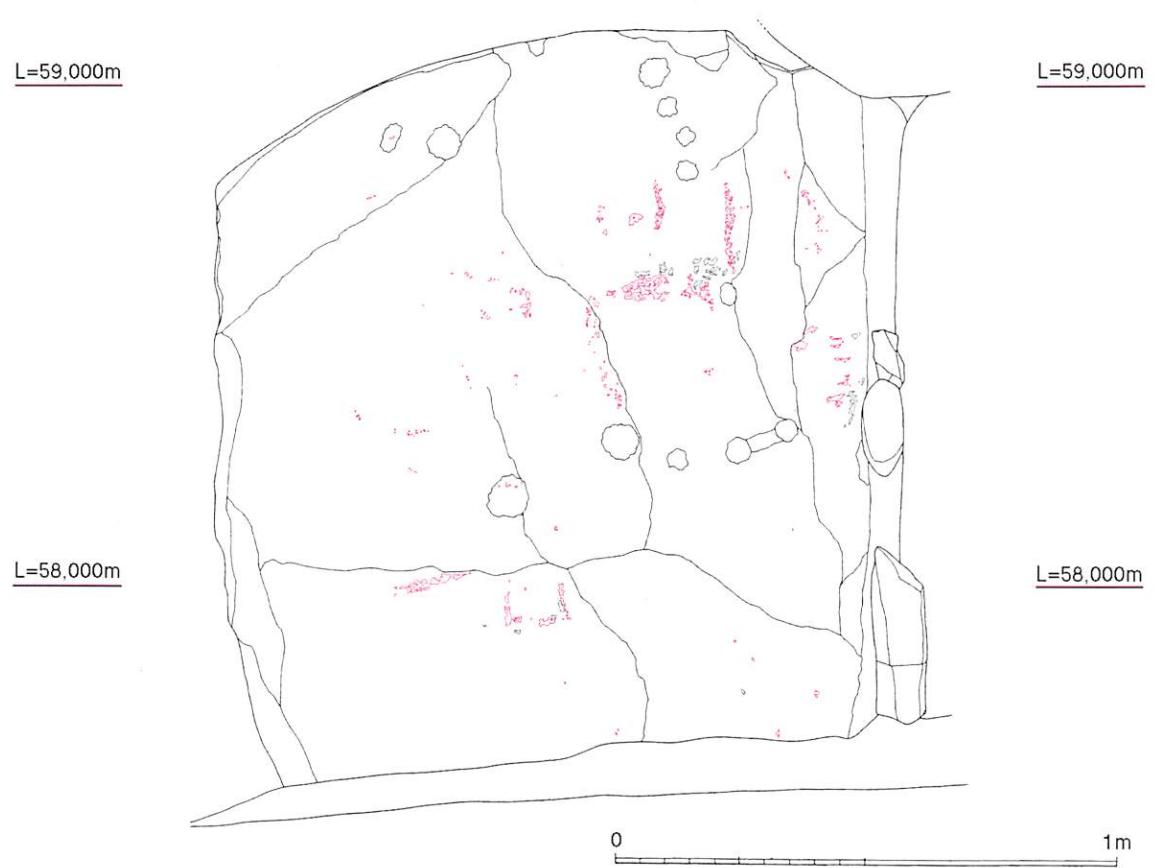


Fig.17 羨道部左側壁装飾実測図 (S = 1/15)



Fig.18 玄門部装飾実測図 (S = 1/15)



Fig.19 玄室右側壁装飾実測図 (S = 1/15)



Fig.20 玄室左側壁装飾実測図 (S = 1/15)

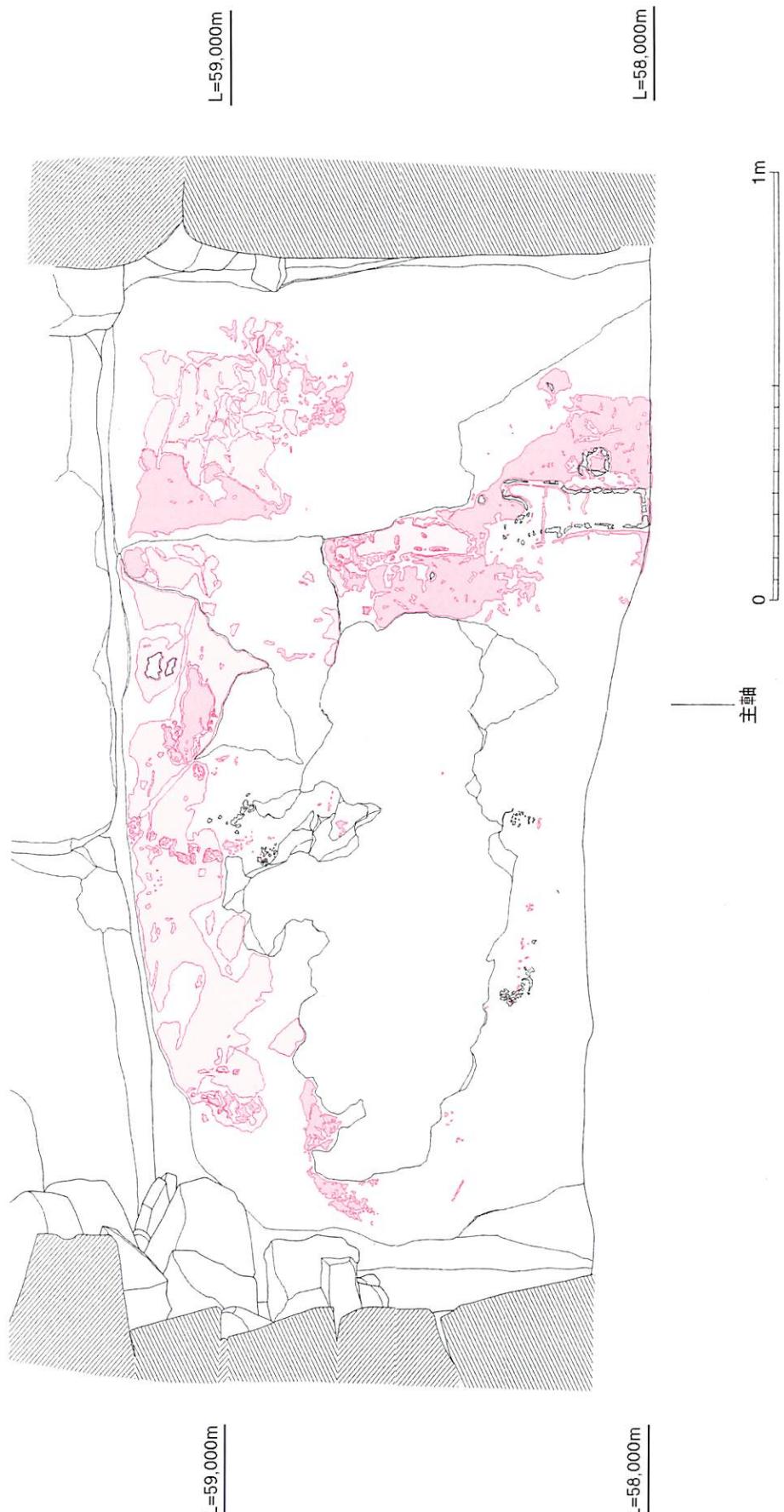


Fig.21 玄室奥壁装飾実測図 (S = 1/15)

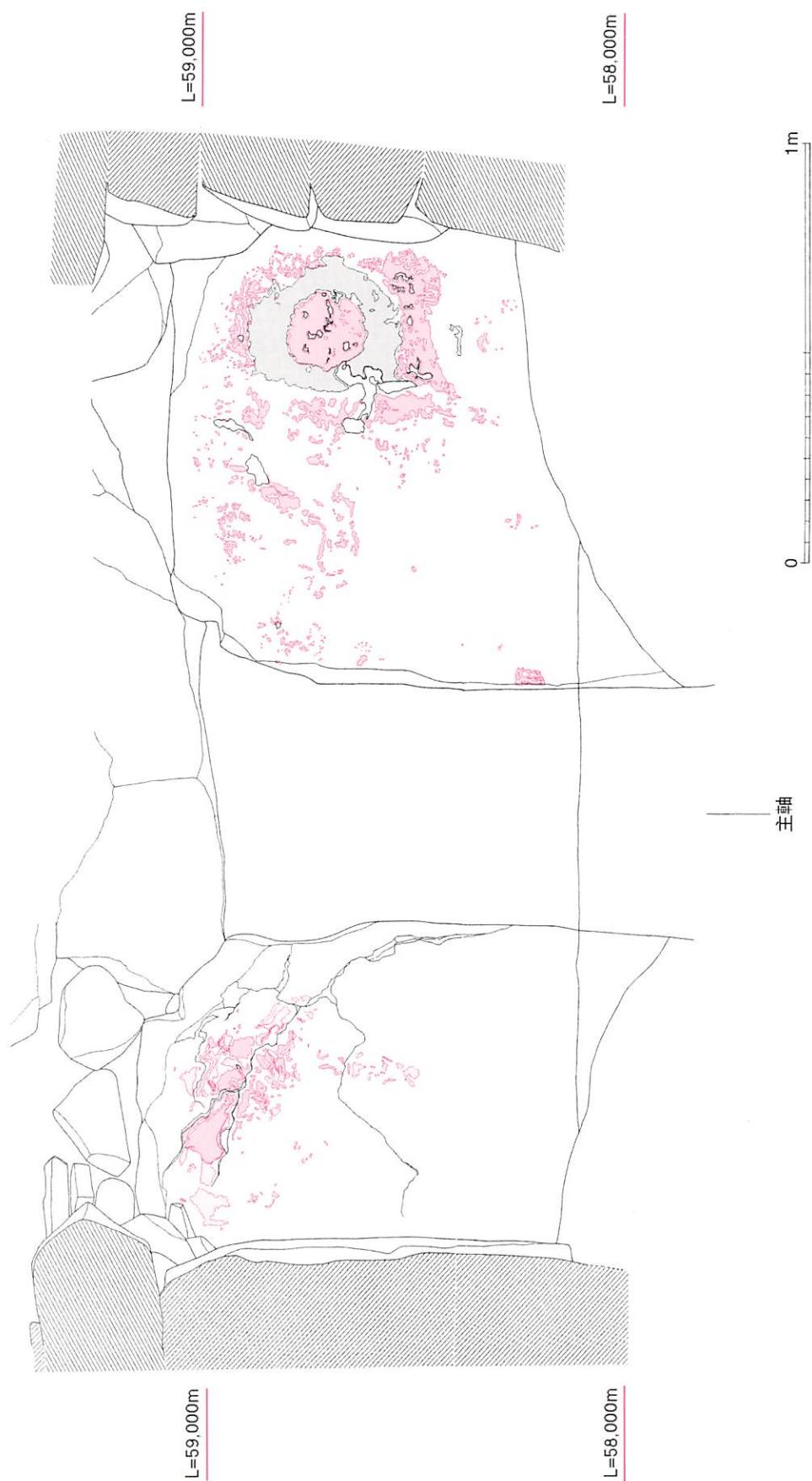


Fig.22 玄門部、玄室面装飾実測図 (S = 1/15)

VI 出土遺物

御靈塚古墳・御靈塚2号墳のでは、表土層（樹根による搅乱層）及び周溝埋土から多数の古墳時代以前の土器が出土している。また、No.1・2トレンチでは、弥生時代の遺物包含層及び遺構が確認され多数の弥生時代中期から後期土器が出土している。

vi-1 古墳築造以前の遺物

1) 石器 (Fig. 1 1~4)

1は、安山岩製の石鎌である。薄い不定形剥片を素材にして背面、腹面の両側から調整を施しているが、二次加工が面的に及ぼず、剥片獲得の際の剥離痕が背腹両面に大きく残っている。先端が欠損している。

石器の計測値は、長さ2.4cm、幅2.3cm、厚さ0.3cm、重さ2.17gである。

2号墳の周溝内（No.4・5トレンチ）から出土しており、周溝が埋没していく段階で流れ込んだものと考えられる。

2は、安山岩製の石匙である。やや厚手の横長剥片を素材にして背面、腹面の両側から調整を施している。形態は横型の石匙で上部のつまみを作り出しているが、両側が一部欠損している。つまみの上面には礫面が残っている。

石器の計測値は、長さ7.0cm、幅4.8cm、厚さ1.1cm、重さ30.29gである。

No.1トレンチのⅢ層から出土している。縄文時代の遺物である。

3は、厚手の安山岩剥片を素材にした二次加工をもつ石器である。素材の先端部に面的な加工を施し、刃部を作出しており、打製石斧の未製品かエンドスクリューパーの未製品と考えられる。基部が一部欠損している。

石器の計測値は、長さ9.5cm、幅6.7cm、厚さ2.1cm、重さ105.84gである。No.2トレンチの搅乱土（I層）から出土している。縄文時代の遺物であろう。

2) 土器 (Fig. 2 1~15)

縄文時代早期の土器 (1~14)

1~6は押型文土器で、7~14は塞ノ神式土器様式である。

1は、No.1トレンチから出土した一括資料で、胴部の破片である。外面の施文は、粗大な縦方向の楕円押型文で、内面はナデ整形が施されている。器面の色調は、内外面ともにぶい褐色で焼成は良好である。胎土は石英、長石の砂粒を含んでいる。器厚は、9~11mmを測る。

2は、No.1トレンチのI層（搅乱土）から出土した資料で胴部の破片である。外面の施文は、やや粗大な縦方向の楕円押型文で、内面はナデ整形が施されている。器面の色調は、外面がにぶい橙色、内面がにぶい黄橙色で焼成は良好である。胎土は長石が多く、微細な角閃石をわずかに含む。器厚は、10~11mmを測る。

3は、No.1トレンチのⅢ層（主に弥生時代の包含層）から出土した資料で胴部の破片である。外面の施文は粗大な縦方向の楕円押型文で、内面はケズリのちナデ整形を施している。器面の色調は、内外面ともにぶい黄橙色で焼成は良好である。胎土は長石が多く、石英や角閃石を所々に含む。器厚は、13~14mmを測る。

4は、No.4・5トレンチから出土した一括資料で胴部の破片である。外面の施文は粗大な縦方向の楕円押型文で、内面はナデ整形を施している。器面の色調は、外面が灰褐色、内面がにぶい黄橙色で焼成は良好である。胎土は長石が多く、角閃石、石英を所々に、カンラン石をわずかに含む。器厚は、12~13mmを測る。

5は、1トレンチから出土した一括資料で口縁部の破片である。外面の施文は粗大な横方向の楕円押型文で、内面はナデの後、口縁上部に横方向の原体条痕を施している。器面の色調は、内外面ともにぶい黄橙色で焼成は良好である。胎土は角閃石や長石を所々に含む。器厚は、7~9mmを測る。

6は、No.4・5トレンチのI層（搅乱土）から出土した資料で胴部の破片である。外面の施文は、粗大な縦方向の楕円押型文で、内面はナデ整形を施している。器面の色調は、外側がにぶい黄橙色、内面が灰黄褐色で、焼成は良好である。胎土は角閃石や長石を多く含む。器厚は、13~15mmを測る。

7は、No.2トレンチから出土した一括資料で口縁

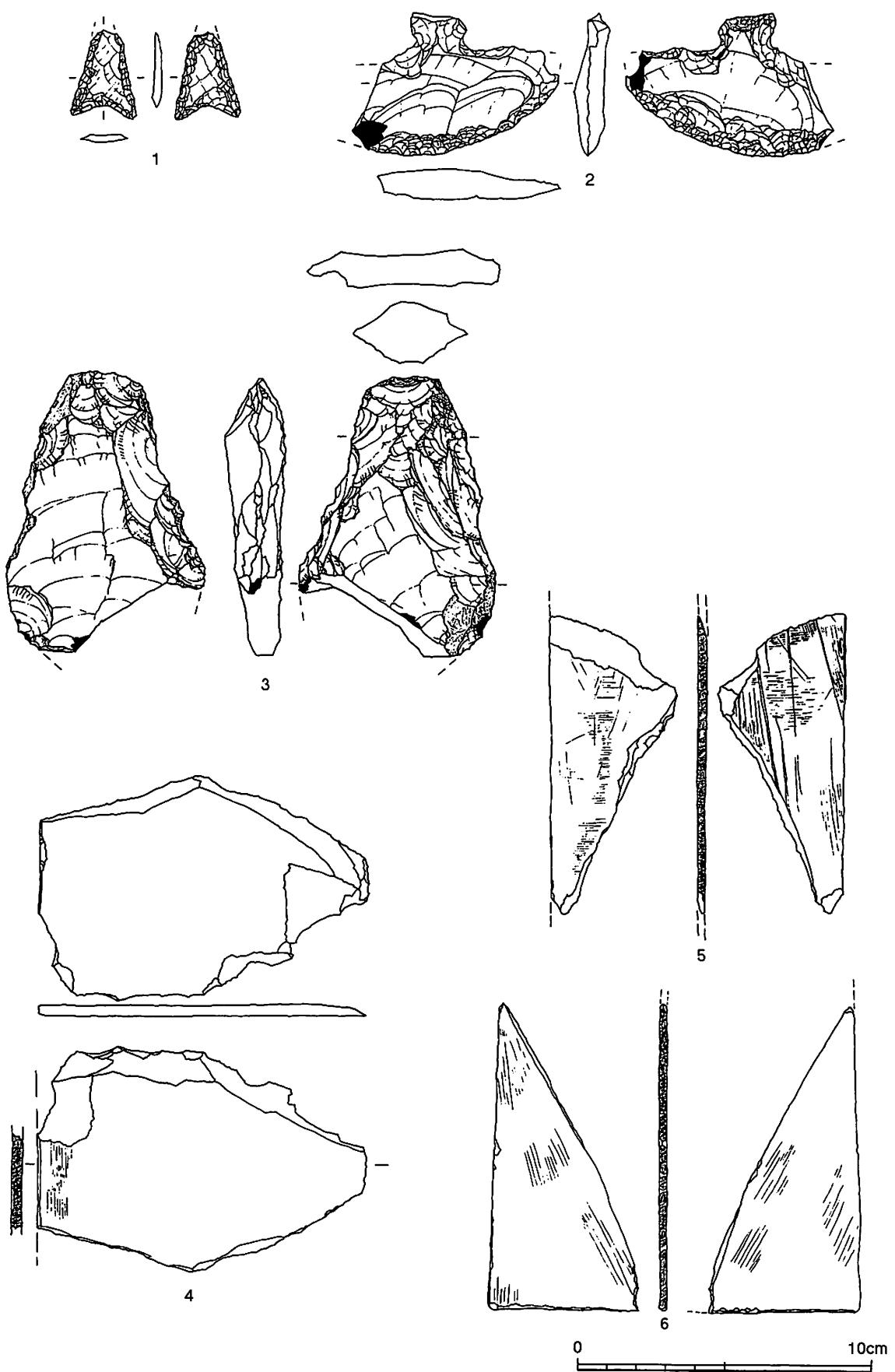


Fig.23 出土石器実測図 (1～4: 縄文時代、4～6: 明治時代の石板) (S = 1/2)

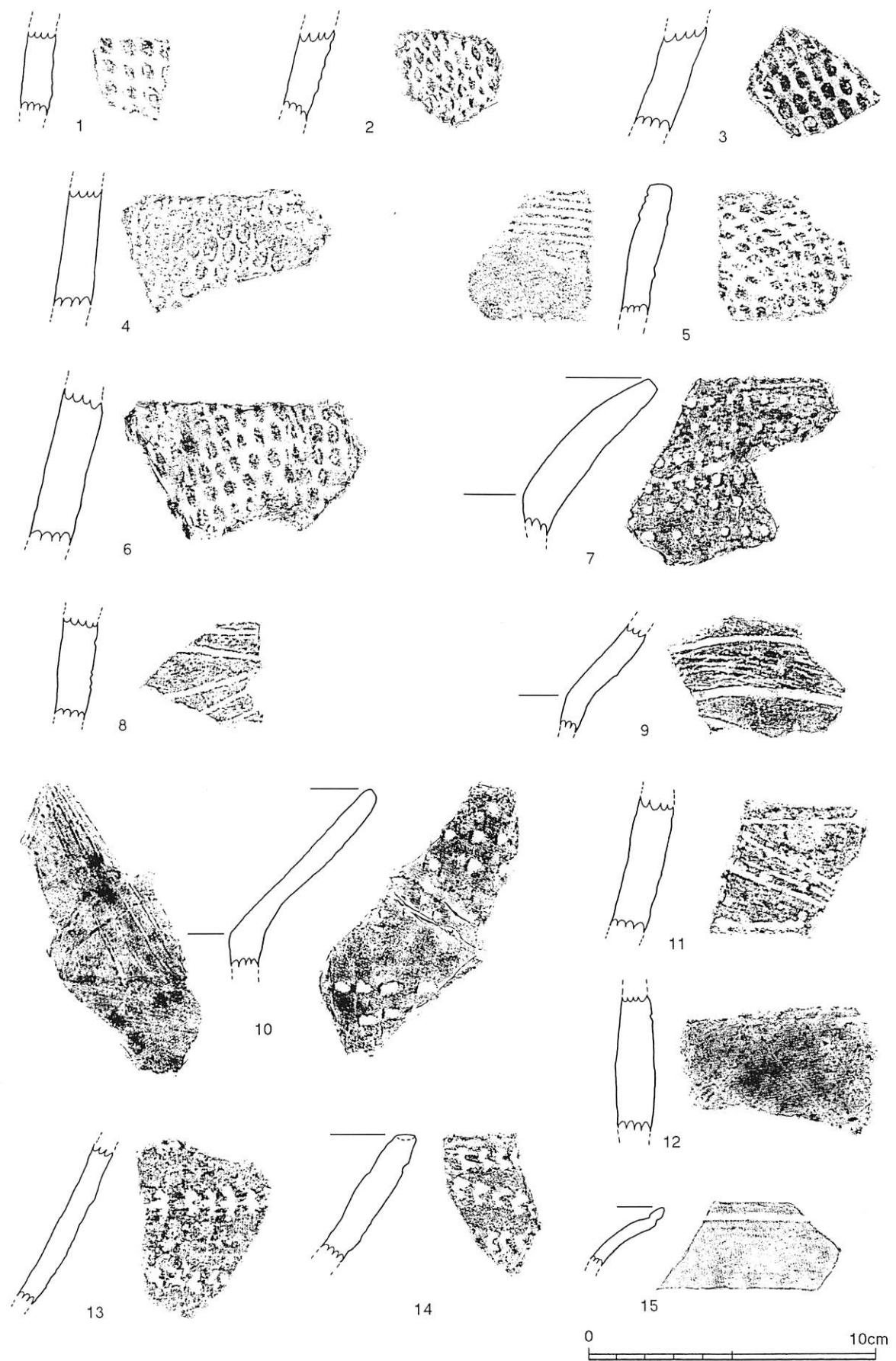


Fig.24 出土土器実測図 (1~14: 繩文早期、15: 繩文晩期) (S = 1/2)

部から頸部にかけての破片である。外面の施文は、ケズリの後、棒状の施文具による横方向の刺突文を6条行っており、内面はケズリ整形を施している。器面の色調は、外側がにぶい黄橙色、内面が灰黄褐色で、焼成は良好である。胎土は石英や長石を多く、^{かくせんせき}角閃石をわずかに含む。器厚は、7~12mmを測る。

8は、No.4トレンチから出土した一括資料で胴部の破片である。外面の施文は、ナデの後、棒状の施文具により2~3条の沈線幾何学文様を、内面はケズリ整形を施している。器面の色調は、外側がにぶい橙色、内面が灰褐色で、焼成は良好である。胎土は角閃石が多く、わずかに微細な石英や長石を含む。器厚は、11~12mmを測る。

9は、No.4・5トレンチから出土した一括資料で頸部の破片である。外面の施文は、ナデの後、撲糸での施文を沈線で区画し、内面はケズリ後ナデ整形を施している。器面の色調は、外側がにぶい褐色、内面がにぶい黄褐色で、焼成は良好である。胎土は石英を多く、^{かくせんせき}角閃石や長石をわずかに含む。器厚は、6~7mmを測る。

10は、No.4・5トレンチから出土した一括資料で口縁部から頸部にかけての破片である。外面の施文は、ナデの後、棒状の施文具による横方向の刺突文を6条行っており、内面は頸部より下はケズリのみ、頸部より口縁部にかけてはケズリ後ナデを行った後、4条の沈線で幾何学文様を施している。器面の色調は、内外側とも黒褐色で、焼成はやや不良である。胎土は石英、長石や金色の雲母を多く、^{かくせんせき}角閃石をわずかに含む。器厚は、7~9mmを測る。

11は、No.3トレンチから出土した一括資料で胴部の破片である。外面の施文は、棒状の施文具により2~3条の沈線幾何学文様を、内面はケズリ整形を施している。器面の色調は、外側が橙色、内面が灰黄褐色で、焼成は良好である。胎土は石英、長石や^{かくせんせき}角閃石を多く含む。器厚は、11~12mmを測る。

12は、No.4・5トレンチから出土した一括資料で胴部の破片である。外面の施文は、棒状の施文具により2~3条の沈線幾何学文様を、内面はケズリ整形を施している。器面の色調は、外側が橙色、内面が灰褐色で、焼成は良好である。胎土は石英や角閃石

を多く、わずかに長石を含む。器厚は、12~13mmを測る。

13は、No.4・5トレンチから出土した一括資料で口縁部付近の破片である。外面の施文は、ケズリの後ハイガイによる押し引きを、内面はナデ整形を施している。器面の色調は、内外面ともにぶい橙色で、焼成はやや不良である。胎土は石英や長石を多く、^{かくせんせき}角閃石を含む。器厚は、7~11mmを測る。

14は、No.1トレンチから出土した一括資料で口縁部の破片である。外面の施文は、ケズリの後ハイガイの貝殻による刺突を、内面はケズリ整形を施している。また、口唇部はハイガイの貝殻原体による刻み目が施されている。器面の色調は、内外面とも黒褐色で、焼成はやや不良である。胎土は長石を多く、^{かくせんせき}角閃石や石英をわずかに含む。器厚は、6~9mmを測る。

縄文時代晚期の土器 (15)

15は、No.4・5トレンチから出土した一括資料で黒色磨研土器様式の浅鉢口縁部の破片である。内外面の施文は、ケズリの後丁寧なナデを行い、口唇部の側に内外に一条の沈線施文を施している。器面の色調は、外面が褐灰色、内面は黄橙色で焼成は非常に良好である。胎土は長石や石英を所々に含む。器厚は、4~5mmを測る。

(岡本)

弥生時代 (Fig. 3)

遺物の出土状況は、大半が御靈塚古墳・2号墳周溝埋土からの一括出土である。No.1・No.2・No.8トレンチの一部で遺物包含層が認められ完形品を含む遺物が多数出土している。

1・2・3は高杯形土器の口縁部である。1は浅い皿状の杯部を呈する。2は上面が平面を呈し、円形粘土盤を貼り付け装飾が施される。端部は方形をなし水平に伸びる。3は緩やかに外反しながら立ち上がる。端部は方形を呈し丁寧な刷毛目による整形がなされる。4は壺形土器の口縁にあたる。胴部より立ち上がったラインはやや外反し短く立ち上がる。口縁端部の整形は刷毛目による丁寧な整形が施される。5は小型壺形土器の口縁から胴部にかけての資料である。口縁部の一部を指で押えて片口を意識さ

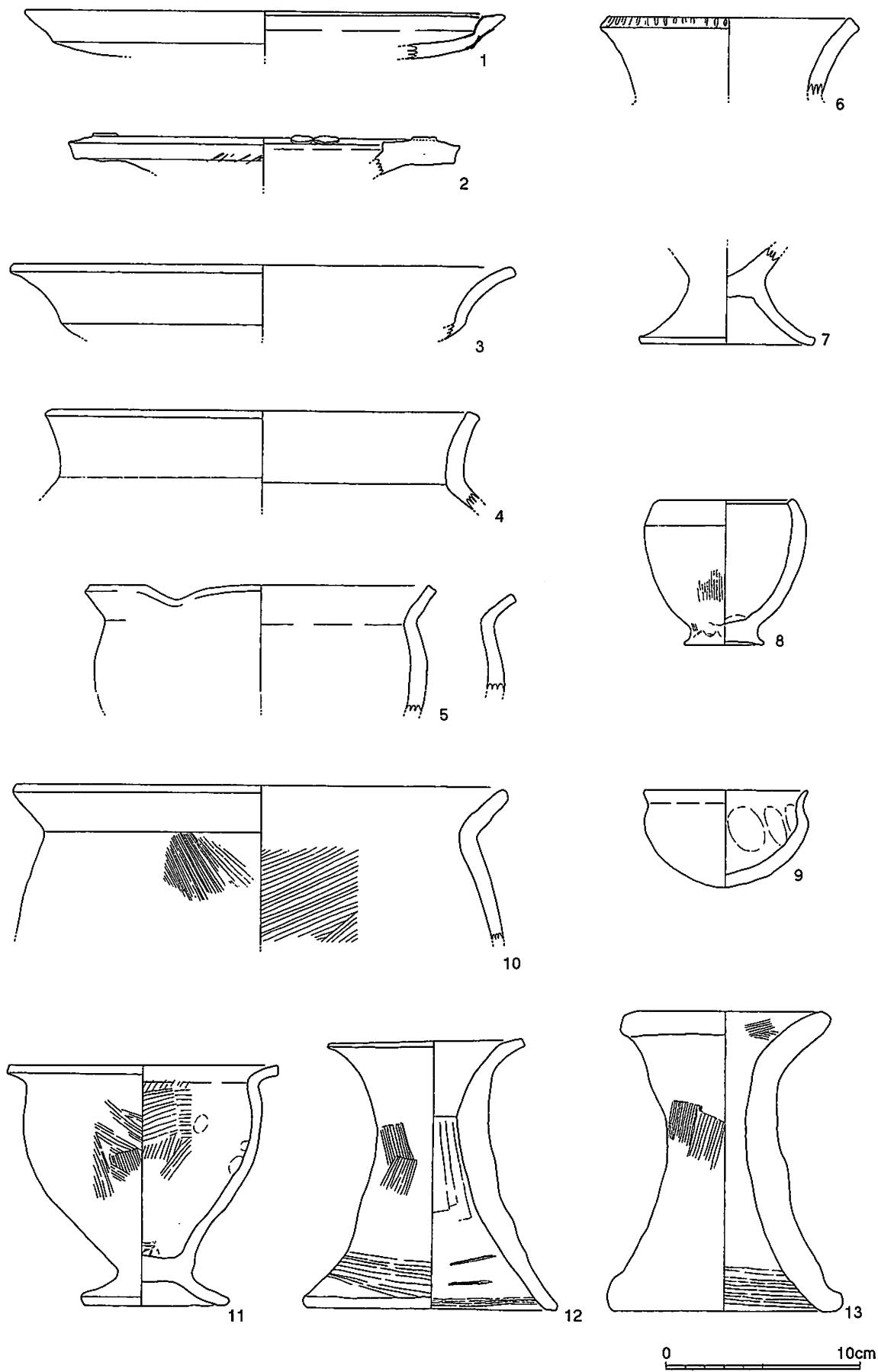


Fig.25 出土土器実測図（弥生時代後期）（S = 1/3）

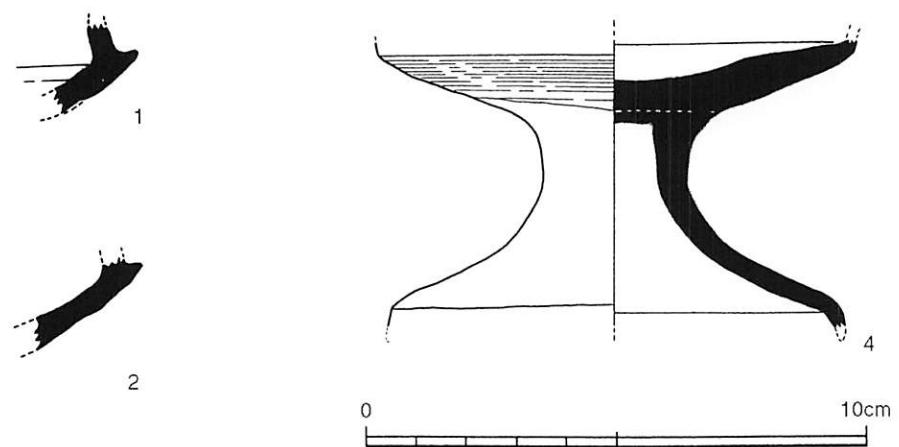


Fig.26 No.4・5 トレンチ出土土器実測図（御靈塚2号墳周溝内）（S = 1/3）

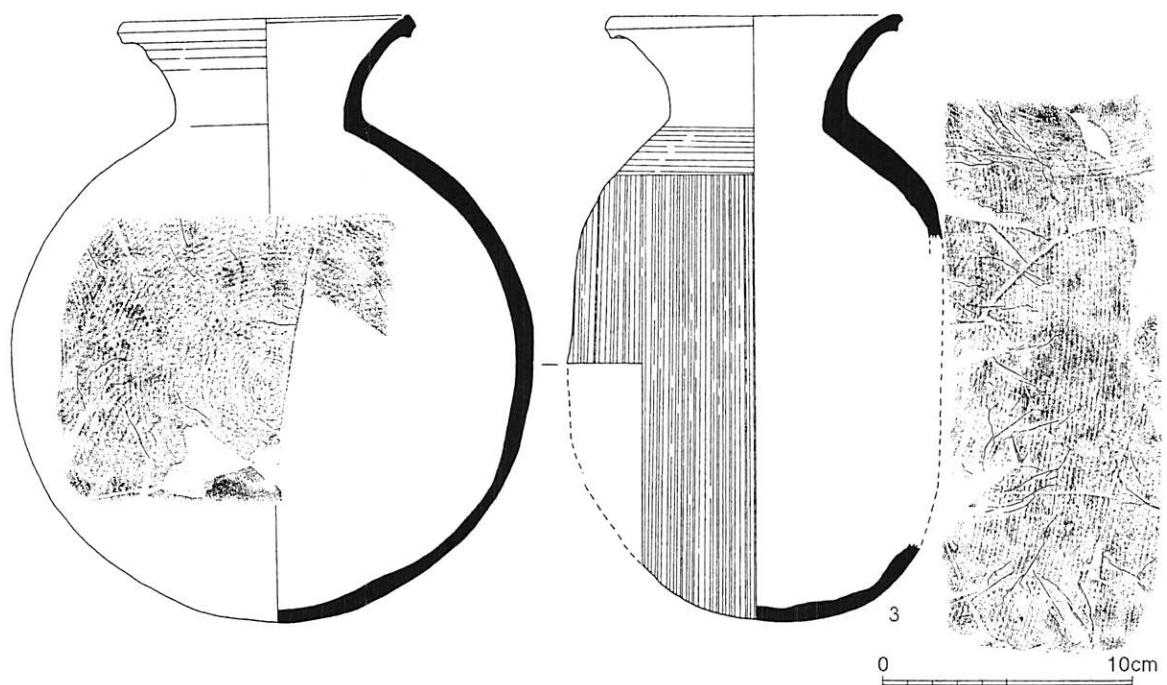


Fig.27 出土須恵器実測図（御靈塚2号墳、周溝内出土）（S = 1/3）

せる加工が施される。胴部は体部上段に最大径を持ち脚部に向う。11の資料とほぼ同形と思われる。6は壺形土器の口縁である。胴部より立ち上がった口縁は、やや外反しながら立ち上がる。口縁端部は斜めに整形され刻目が連続して施される。7は長胴をなす壺形土器の脚部である。外面底部には砂型をあてた痕跡を見る事が出来る。8・9は鉢形土器である。8コップ状をなし丁寧な刷毛目が施される。底部は跡から付けられ接合部は粗い。9は丸底で口縁部は薄く整形されやや外反しながら立ち上がる。外面は丁寧な刷毛目が施され、内面は指による撫で痕跡が残る。10は大型の壺形土器口縁部である。内外面とも、丁寧な刷毛目が施される。11は小型壺形土器である。不整形ながらも短く立ち上がる脚部が付き、器壁は細かな刷毛目痕跡を残す。12・13は器台形土器である。内外面とも粗い刷毛目が見られる。他の土器類と比べると胎土・焼成とも荒い。

vi-2 古墳時代の遺物 (Fig.26・27)

古墳築造年代を示す資料は、両古墳とも表採資料を含めて須恵器3点、土師器1点の計4点である。

Fig.26 1・2の杯身片は御靈塚古墳横の古澤 勝氏の私有地で表採されたものである。いずれも、小破片であるため詳細は不明である。

色調は表面が青灰色、内面は暗青灰色を呈している。焼成は良好で胎土はやや粗。1は外面が剥離している。

Fig.27 3は提瓶で、御靈塚2号墳 (No 4 トレンチ内) 周溝内から出土したもので今回の調査で唯一、築造年代を推定できる資料である。口径は17.8cm、器高24.5cmで体部は中位に最大径を持ち横に扁平な球形を呈している。口縁部は二箇所に棱を巡らすが明瞭とは言えない。頸部は体部との接合面を丁寧に撫で消しカキ目を施す。外面の一部に叩きの跡が伺えるがカキ消されている。内面は、同心円状の叩きが残るが丁寧に撫で消す。焼成は甘くやや軟質、胎土は砂粒を少量含む。焼成は良好。

Fig.26 4は土師器の高杯で、御靈塚古墳 (No 3 トレンチ) 内周溝埋土の資料である。器高の低い杯部に下方に短く広がる脚部が付く。杯部は立ち上がり

はじめる接合面から上部は欠損して無い。表面は明茶褐色で内面は茶褐色を呈する。脚部内面はヘラ削りによる痕跡がわずかに残る。杯部外面には回転ヘラ削りによる痕跡が明瞭に残る。胎土は砂粒が少量含まれ、焼成は良好である。

vi-3 近代の遺物

明治時代 (尋常小学校) の遺物 (Fig.23)

明治時代に設置された津袋尋常小学校は、御靈塚古墳・御靈塚2号墳の南側に墳丘を削平、整地され建設されている。南側に1段下がる場所が運動場であるという地元の人々の話からすると、それほど大きくなない規模が想定される。この跡地からは、調査時の表土除去等で当時の遺物が少量確認された。

Fig.4・5・6は粘板岩から作られた石版¹である。石版は当時生徒たちのノート替わりの用具で、温石と呼ばれる筆記用具とセットで使われていた。表裏とも書くことができ使用頻度が多かったせいか、両面とも多くの削痕が残る。

その他には、近世の染付け碗等が表土中より出土されている。

(長谷部)

vi-4 小結

当古墳が立地する河岸段丘上は、古くは縄文時代早期から人々の生活の痕跡を見る事ができる。前面に菊池川に注ぎ込む内田川を望み、背後には日岡山が迫る変化に満ちた地形が広がり、古くから人々が連綿と生活を続けてきた複合遺跡であることが今回の調査で確認できた。

ここで確認された縄文時代の遺物は、土器・石器がある。土器は、早期後半に位置付けられる橢円押型文を施文する「ヤトコロ式」、南九州の貝殻文系円筒土器様式を源流とする塞ノ神式土器様式に含まれる「三代寺式土器」²が出土している。明確な包含層としては確認ではなかったが、近接する場所に遺跡の広がりが窺えよう。

また、弥生時代後期の遺物・遺構としては、当古墳直下に明確な遺物包含層・遺構が残されている。No 2・No 8 トレンチでは、包含層と遺構があり、堅

穴状遺構を確認できた。遺物の年代は、弥生時代後期に属する資料であるが、一括資料ではないため参考資料に留め掲載している。

古墳時代の遺物は、2号墳周溝内から出土している提瓶とNo.4トレンチ一括出土の高杯（土師器）がある。提瓶は古墳時代後期に限られた時期に出現する須恵器である。³ 6世紀後半に比定する事ができるこの時期、九州内においても多くの生産窯が操業を開始しており、それまでの陶邑からの流入は減少する時期にあたる。九州では福岡県大野城市牛頸窯跡群や八女市八女窯跡群があり、横穴式石室に多くの須恵器が副葬されている。当古墳で出土した提瓶については、今後、窯資料との比較検討、胎土分析等の調査が必要であろう。

（長谷部）

註記

- 1) 本稿を書くに当たり、県文化課 山下義満氏により木製枠のついた石版を実見させて頂くとともに、使用例についてご教示頂いた。

参考文献

- 1) 『日本民具辞典』日本民具学会編 1997
- 2) 小林達雄・小川忠博『縄文土器大観1』草創期・早期・前期 株式会社 小学館 1989
- 3) 中村 浩 研究入門『須恵器』柏書房 1990

VII 結語

今回の調査は、墳丘上の盛土の流失という緊急措置から行なった調査である。しかし、今回の調査では、地山整形面と石室の関係、石室内の床面調査・装飾壁画など今後の調査に課題を残すこととなった。

また、墳丘に関して御靈塚古墳の墳形及び周溝にも不明な点が残った。そのため、今回の調査で得られた知見を若干の考察とともにまとめた。

墳丘

確認された2基の墳丘の規模・形態は、現況で御靈塚古墳が南北10m、東西10m、御靈塚2号墳は大きく削平を受けているがほぼ、御靈塚古墳と同規模の墳丘と思われる。

両古墳とも墳丘形態は今回の調査でトレンチ間の繋がりが不鮮明なことと、多くの搅乱が入っていることから最終判断までは至らなかったが、円墳の可能性が高い。

周溝は両古墳とも、明確な地山削り出しで墳丘端部を整形し、緩やかな傾斜を持ち。さきに挙げたが墳丘形態は円墳の可能性があるものの、ほかの墳形である可能性も現段階では完全に否定できない。

古墳の築造順序は、今回の調査結果からNo.4・5トレンチでの周溝の切り合い、No.8トレンチでの確認状況から「御靈塚2号墳→御靈塚古墳」の築造が想定される。築造年代は、御靈塚2号墳が周溝より出土した須恵器の年代から6世紀第2四半期～第3四半期とし、御靈塚古墳は石室形態からその時期をおかず築造されたと考えることができよう。

石室

今回の調査からは御靈塚古墳の横穴式石室を複室

ではないかという疑問の解決には至らなかった。6世紀後半に入ろうとするこの地域の石室形態は、大部分が複室構造の横穴式石室に移行していく傾向がある。

今回は、石室内の調査は行っていないが、将来、羨道部の調査を実施し確認することが必要であろう。

玄室内は、框石が見えていることから、床面より約40cm 土の堆積がある。ここでも将来の調査を待たねばならないが、副葬されている遺物が確認される可能性も高い。

装飾文様

当古墳に施される装飾文様は、幾何学文と具象文(画)に分けられる。当古墳での特徴として大型の同心円文を数多く描いている。彩色のみの装飾で玄室内だけでも5基の同心円文を描く例はほかには見受けられない。同心円文を多用すると言う特徴は、菊池川流域よりも熊本市周辺に広く分布している。

具象文(画)では、轍と鞘が描かれている。また、右側壁に描かれている、方形区画の内部にX字状を表す文様は轍との関係から盾と考えても差し支えないと思われる。

また、ここで装飾に用いられている顔料は赤色と白色の2色である。赤は通常言わわれているようにベンガラによるもので、白色は白粘土による装飾であろう。装飾は主に赤色顔料を多く用い赤色を際立たせてあるようにいざれの文様にも白色を有効に使っている。

御靈塚古墳では福岡県内で見られる叙事詩的な文様ではないが、象徴性の強い熊本県特有の装飾古墳である。

(長谷部)

Tab. 2 御靈塚古墳装飾文様計測値

番号	装飾箇所	文様名	縦(mm)	横(mm)
001	羨道左側壁	盾(?)	250	245
002	玄門右袖石	三角文(上)	300	410
003	玄門右袖石	三角文(中)	210	270
004	玄門右袖石	三角文(下)	220	110
005	玄門左側壁	円文	140	138
006	玄室奥壁	轍	345	136
007	玄室奥壁	鞘	77	70

番号	装飾箇所	文様名	縦(mm)	横(mm)
008	玄室右側壁	同心円文	350	350
009	玄室右側壁	盾(?)	270	195
010	玄室右側壁	轍	365	200
011	玄室右側壁	同心円文	700	542
012	玄室左側壁	同心円文(左)	320	355
013	玄室左側壁	同心円文(右)	298	370
014	左玄門玄室面	同心円文	520	475

御靈塚 2号墳

御靈塚古墳（1号墳）の東に隣接する古墳で、墳丘の東側は民家により、南側は尋常小学校校舎建設により削平されている。墳丘は、全体の約1/4しか残されておらず、元の姿は残していない。墳丘規模は御靈塚古墳とほぼ同規模の径約10mで円墳と思われる。

主体部は、削平された墳丘に一部露出しており、南側に開口する横穴式石室である。

石室内は土が流入して埋没しており内部の状況及

び規模は不明である。露出している石材は、石材の構築状態から玄室右側壁の可能性が高い。

石材には、凝灰岩が用いられており御靈塚古墳に用いられている石材と類似する。

露出石材の一部にベンガラの塗布が見られるため、装飾古墳の可能性も考えられる。

2号墳の周溝は、No 2、No 4・5で確認されておりそのうち、No 4・5トレンチ内で確認された周溝内からは、提瓶が1点出土している。

（長谷部）

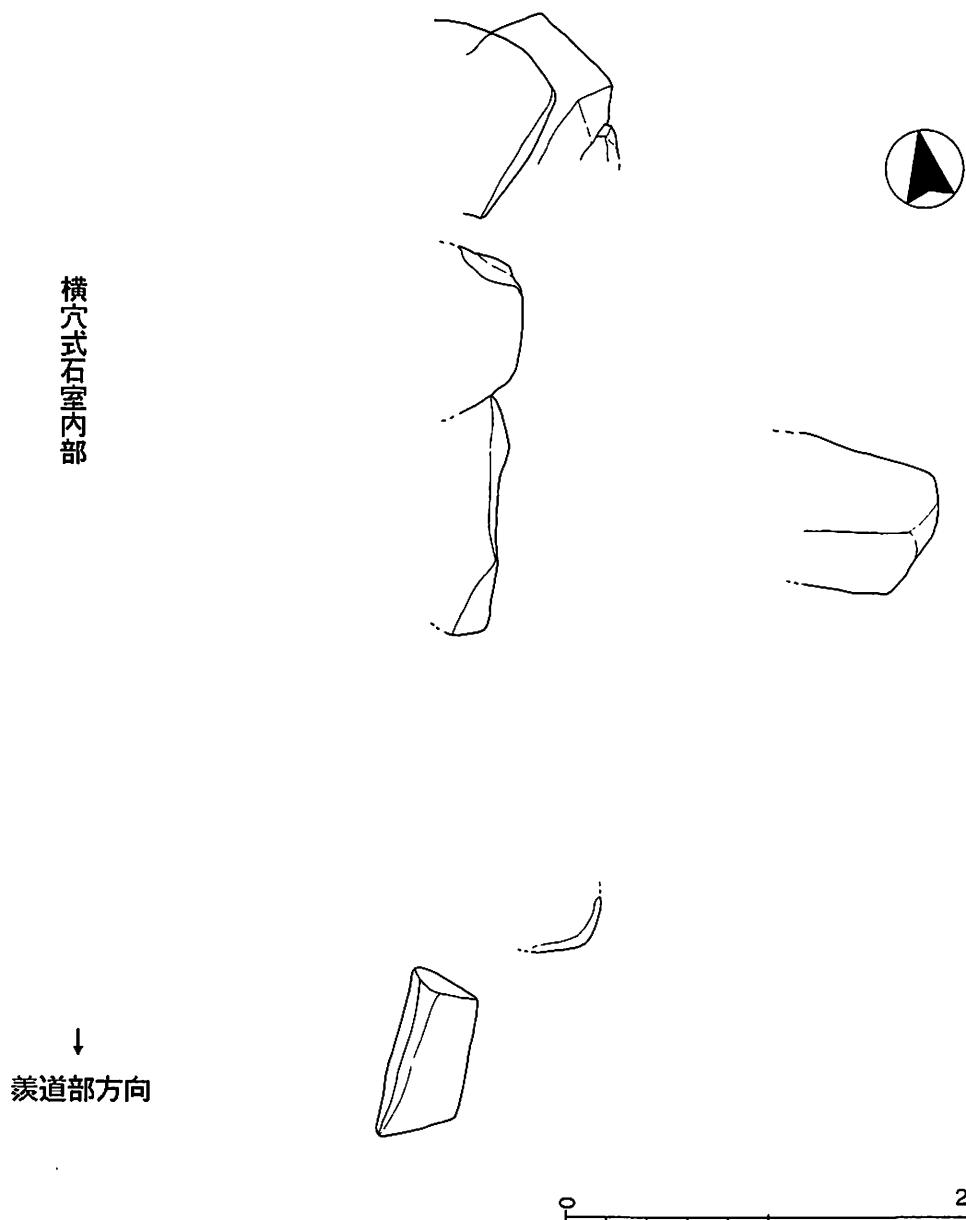


Fig.28 御靈塚 2号墳露出石材実測図 (S = 1/40)

附 論

VIII 御靈塚古墳レーダー探査について

IX 『鹿本町史』鹿本町史編纂室-1976-
「御靈隠穴古墳」-抜粋-

御靈塚古墳の中レーダー探査

九州大学大学院地球資源システム工学専攻

(物理探査学) 教授 牛島 恵輔

1 緒言

本調査は、鹿本町教育委員会の依頼により熊本県指定史跡「御靈塚古墳」において実施した地中レーダー探査の結果を九州大学大学院地球資源システム工学科 牛島恵輔教授を中心に熊本県立装飾古墳館と共同で取りまとめたものである。

御靈塚古墳は熊本県鹿本郡鹿本町に所在する横穴式石室を有する装飾古墳である。

本調査は、古墳の周囲に巡ると推定される周溝の範囲を明らかにする目的で、GPR (Ground Penetrating Radar) 装置を用いて図1の地形図に示す2測線についてフィールド調査を行なった。

※図1 御靈塚古墳の地形測量図

2 地中レーダー探査

中秋レーダー法は、電磁探査法の一つで地中における電磁波の反射、屈折及び透過などの物理現象を利用して地下を探査する方法である。

地中レーダーの装置は図2に示すように送信アンテナ、受信アンテナ及びコントローラー部から構成される。

送信アンテナから地下に放射されたVHF帯域の電磁波パルスは、地下の埋設物や地層境界などの電気的性質(誘電率、非抵抗)の異なる境界面で反射・屈折しながらエネルギーの一部が地表の受信アンテナに到達する。

フィールド調査では、送信アンテナと受信アンテナが分離したGPR装置(カナダ国Sensors & Software社のpulseEKKO100)を用いた。今回は地下深部までの情報を高精度に得るために周波数($f = 100\text{MHz}$)が低い送信アンテナ及び受信アンテナを用いて両者と一緒に動かすプロファイリング法を行なった。

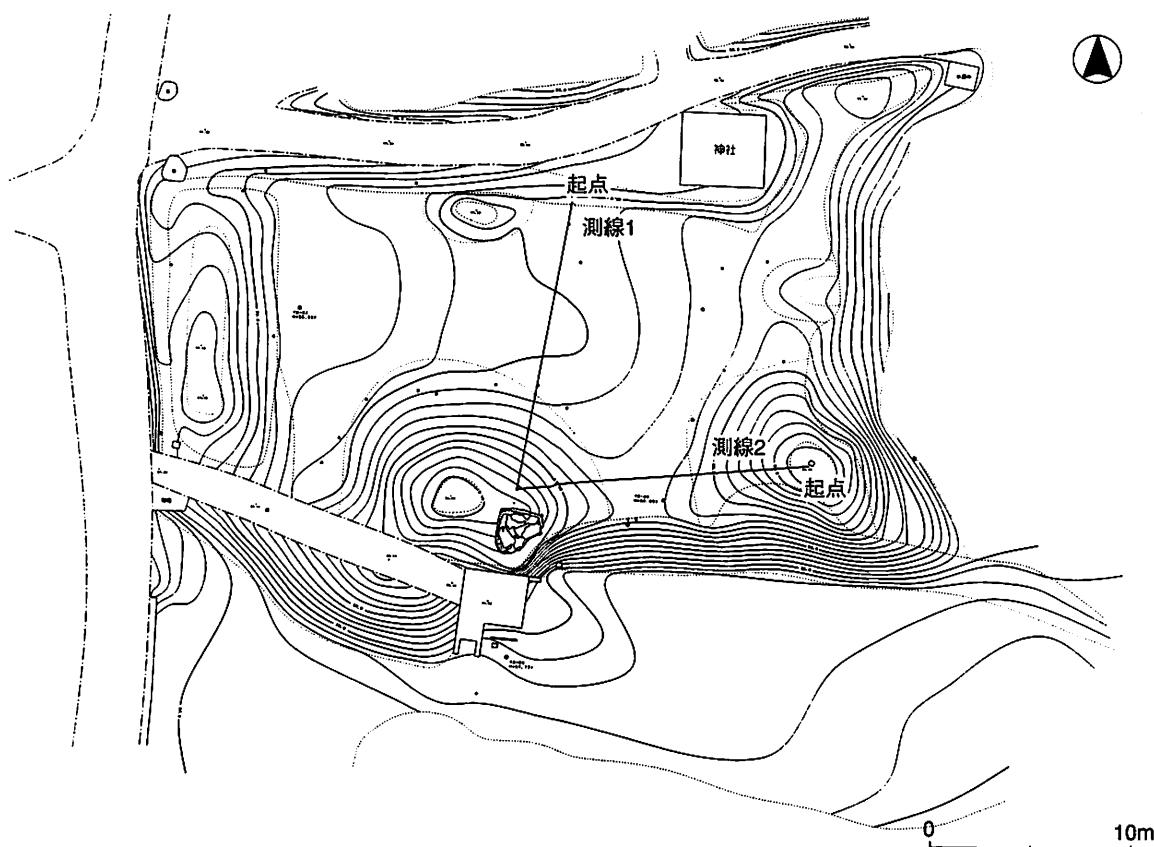


Fig.29 御靈塚古墳群測線設定図 (S = 1/385)

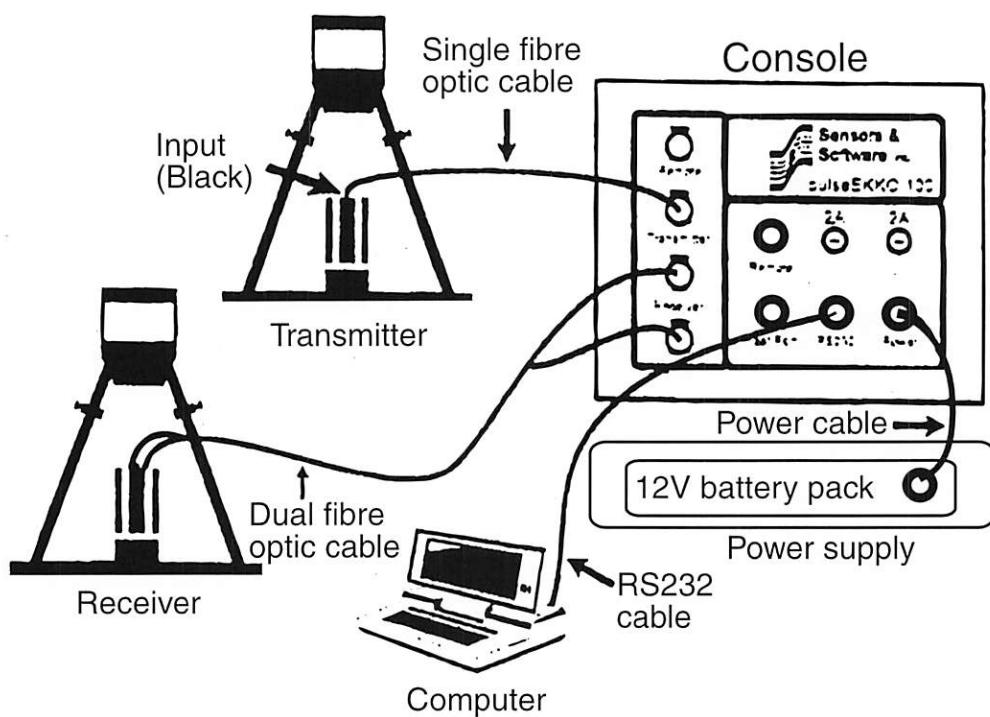


Fig.30 地中レーダー探査のレイアウト



測線 1 の G P R 調査状況（道路から御靈塚古墳へ）

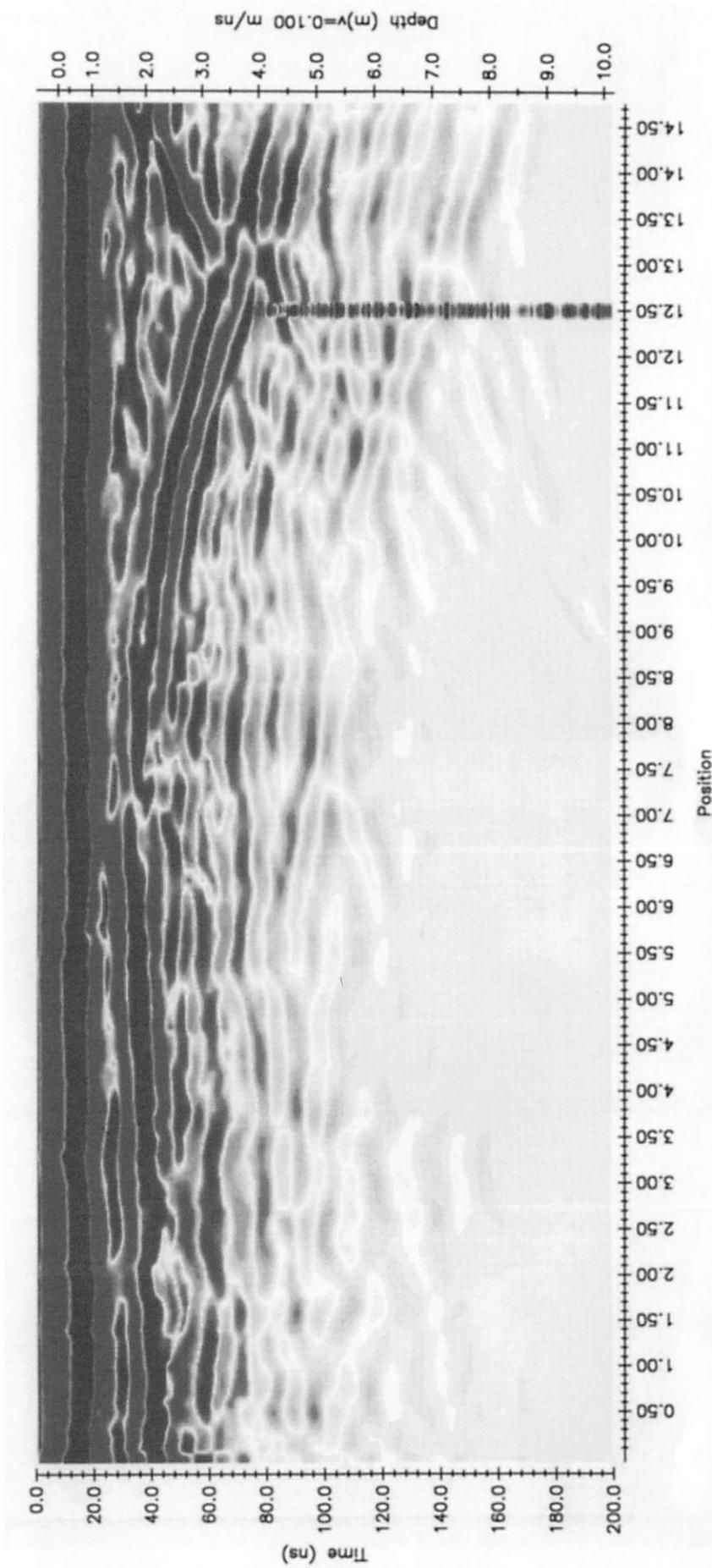


Fig.31 御_三塚古墳GPR調査（測線1）



GPR調査の測定2 (円墳から御靈塚古墳へ)



円墳上のGPR調査

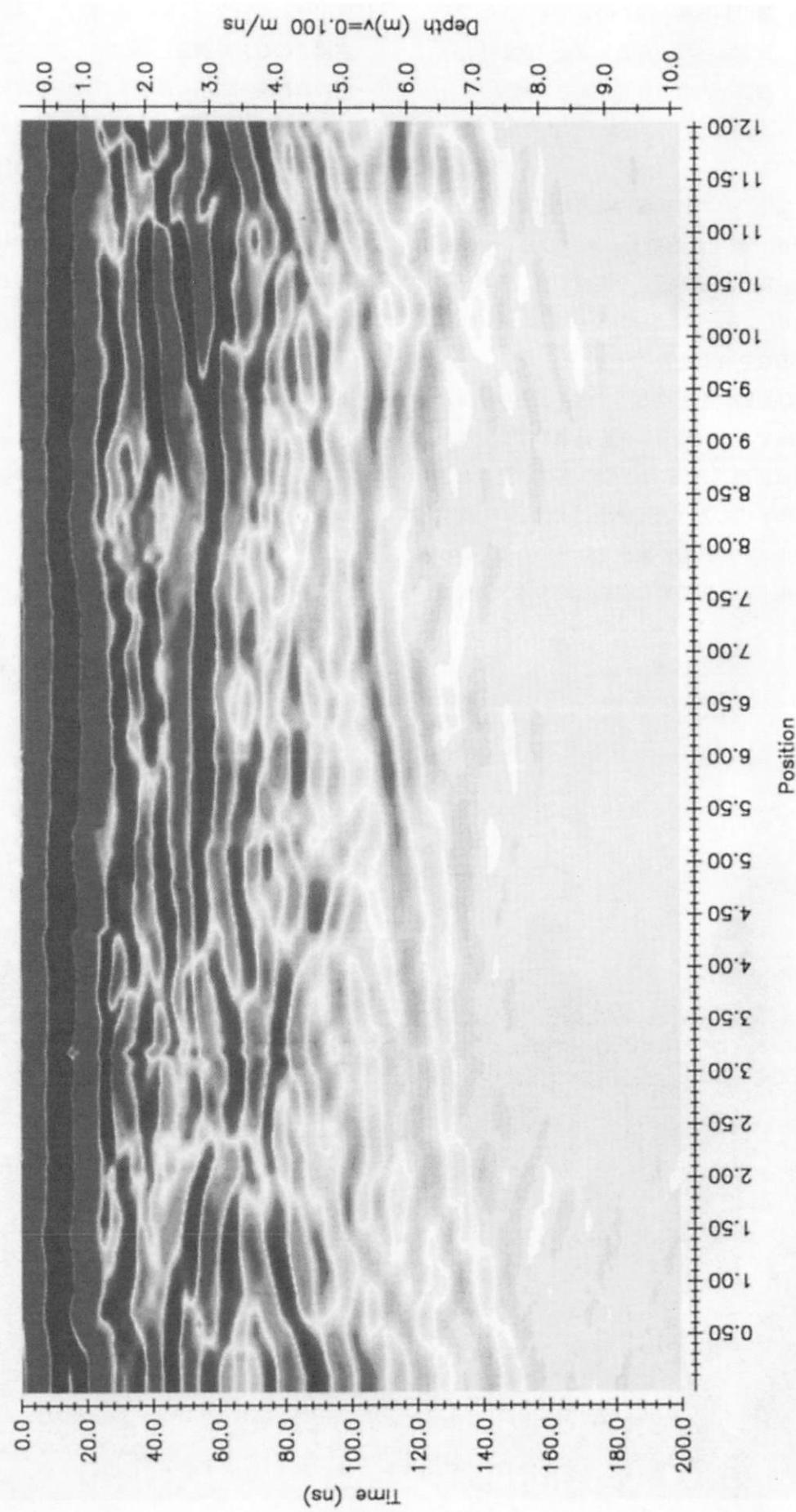


Fig.32 御靈塚古墳GPR調査（測線2）

- ※ 図2 地中レーダー探査のレイアウト
- ※ 図3 御靈塚古墳のGPR調査（測線1）
- ※ 図4 御靈塚古墳のGPR調査（測線2）

3 結言

熊本県指定史跡の御靈塚古墳の範囲確認調査に先立ち2測線を設定し地中レーダーGPR(Ground Penetrating Radar)装置探査を実施した。その結果は以下の通りである。

(測線1のGPR調査)

測線1は道路側を原点として御靈塚古墳へ伸びる15mの測線である。GPR調査結果の図3によれば、地下構造は距離程7.5m付近に不連続が見られるものの地層は層状であり、距離程13m付近から御靈塚古墳のマウンドの影響が検出されている。したがって、本測線上には周溝の存在を示唆するアノマリー

は検出されていない。

(測線2のGPR調査)

測線は御靈塚古墳に隣接する古墳最高部を頂点とし、御靈塚古墳に至る長さ12mの測線である。GPR調査結果の図4によれば、距離程3m付近の地下浅部及び5.5m付近の地下深度に異常部が検出されている。また、距離程10m付近のアノマリーは御靈塚古墳のマウンドの影響であると考えられる。したがって、周溝があるとすればこの測線の可能性が高い。

以上のことから、御靈塚古墳は隣接する墳丘と前方後円墳を呈する可能性は低く、2基の独立した墳丘からなる遺構であると推定される。



測線1のGPR測定状況

IX 参考資料

鹿本町史 通史一原始古代 一抜粹一

富田 紘一

御靈隱穴古墳

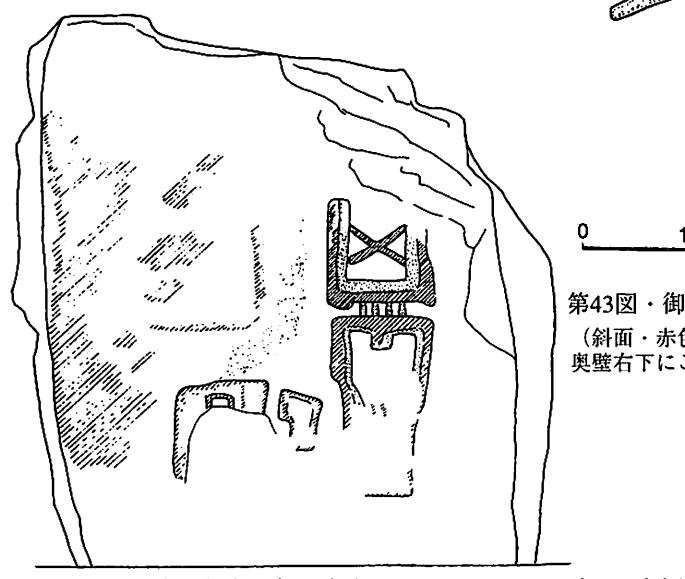
津袋部落の段丘が東に突出した端に位置する。竹林の中に円墳が2基接している。その北側のものが御靈隱穴とよばれている。

直径12m、高さ2.3mで内部主体は横穴式石室である。御靈隱穴古墳については肥後国史に次のように記載されている。「御靈塚 林間ニ石窟アリ御靈塚ト云 口狭クシテ奥ハ九尺四方 大石ヲ畳築キ 上ノ大石ニ胄ノ鉢ノ形ニ穿チタル穴アリ 土俗傳ヘテ昔菊池家合戦ニ敗北シテ此窟ニ逃入りシ時着タル胄ニテ突穿チタル跡ト云 其口狭キ故家臣等這テ入給ヘト云シヨリ俗間這入給ヘト云コト云 不堪一笑 此塚穴ノ所以不分明」。石室は地表を掘り窪め、巨石を用いて構築しており、南々西の方向に開口している。奥行きは2.6m・幅は2.4mである。奥壁に1枚、東西に各2枚の凝灰岩を持って据え、その上は大きい

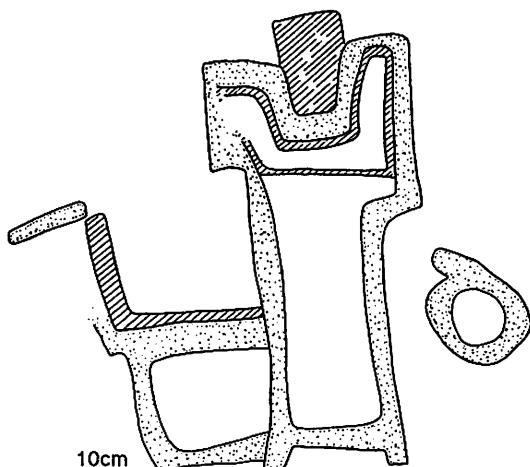
石を持ち送り式に積み、天井に巨石を置いる。奥壁と東側壁に装飾があり、現在では全体的に不明なところが多い。恐らくもとは全面に描かれていたものであろう。前庭部西側壁にも丹の痕跡が認められるが装飾文様であるかどうか不明である。この御靈隱穴古墳は現在発見されている中では、内田川・木野川流域で唯一の例であり、貴重な資料といえよう。

右（上）に述べた古墳の東側に直径15.5m、高さ約2mの円墳が隣接している。内部は知られていないが所々に凝灰岩の巨石が露出しており御靈隱穴古墳と同じ横穴式石室であろうと考えられる。或いはこの古墳にも装飾文が存在するかもしれない。古墳の上に「御靈塚古墳」と記した凝灰岩の石標がある。一般に装飾古墳等の本では前に述べた西側に位置する装飾文のある古墳を御靈塚古墳と呼んでいる。肥後国誌の御靈塚の記載も西側の現在開口しているものをさしている。ここでは両古墳を区別する上で、古墳に付けられた標柱名によった。

(P 101～P 104)

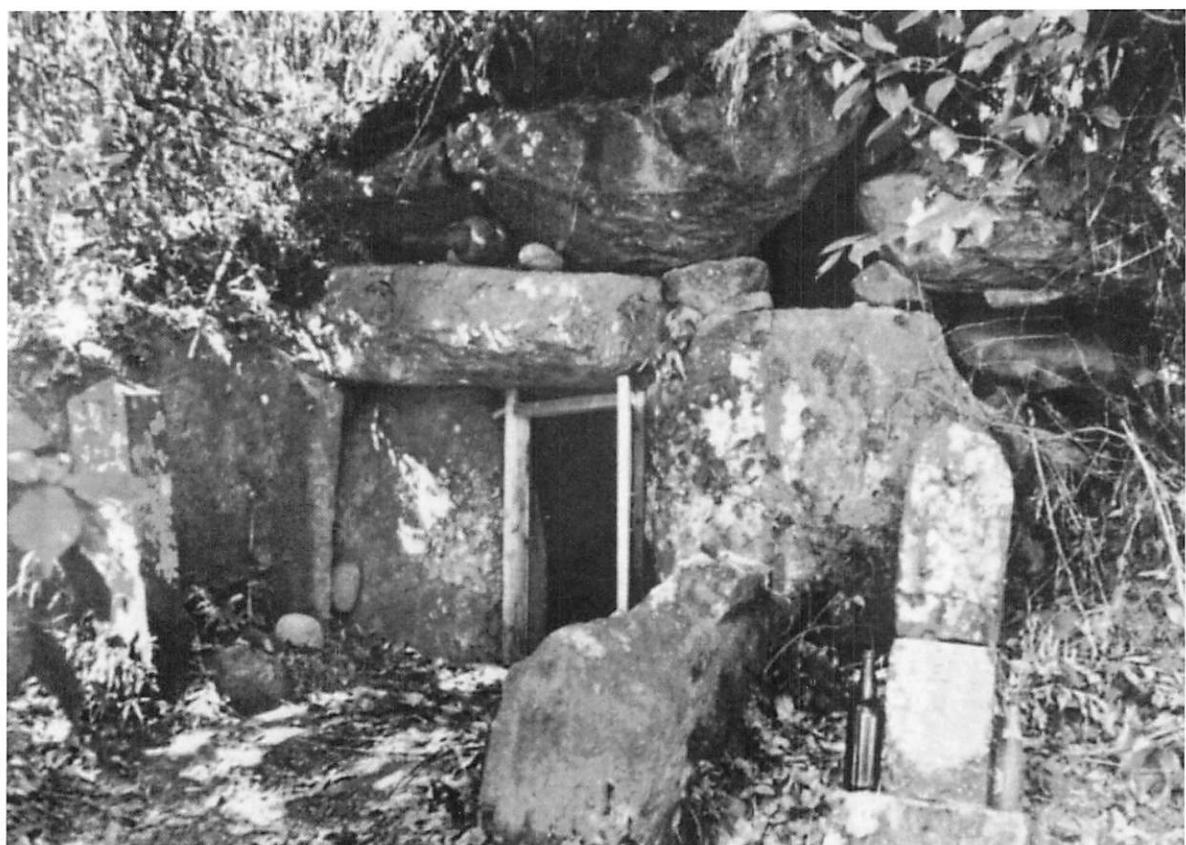


第44図・御靈隱穴古墳 東側壁壁画 (斜線・赤色 点々・白色)



第43図・御靈隱穴古墳奥壁壁画の一部
(斜面・赤色顔料 点々・白色顔料)
奥壁右下にこの壁面があり、他の部分はほとんど消滅している。

Fig.33 御靈隱穴古墳「鹿本町史」より



整備前の御靈塚古墳 昭和50年代初頭（白石巖氏撮影）

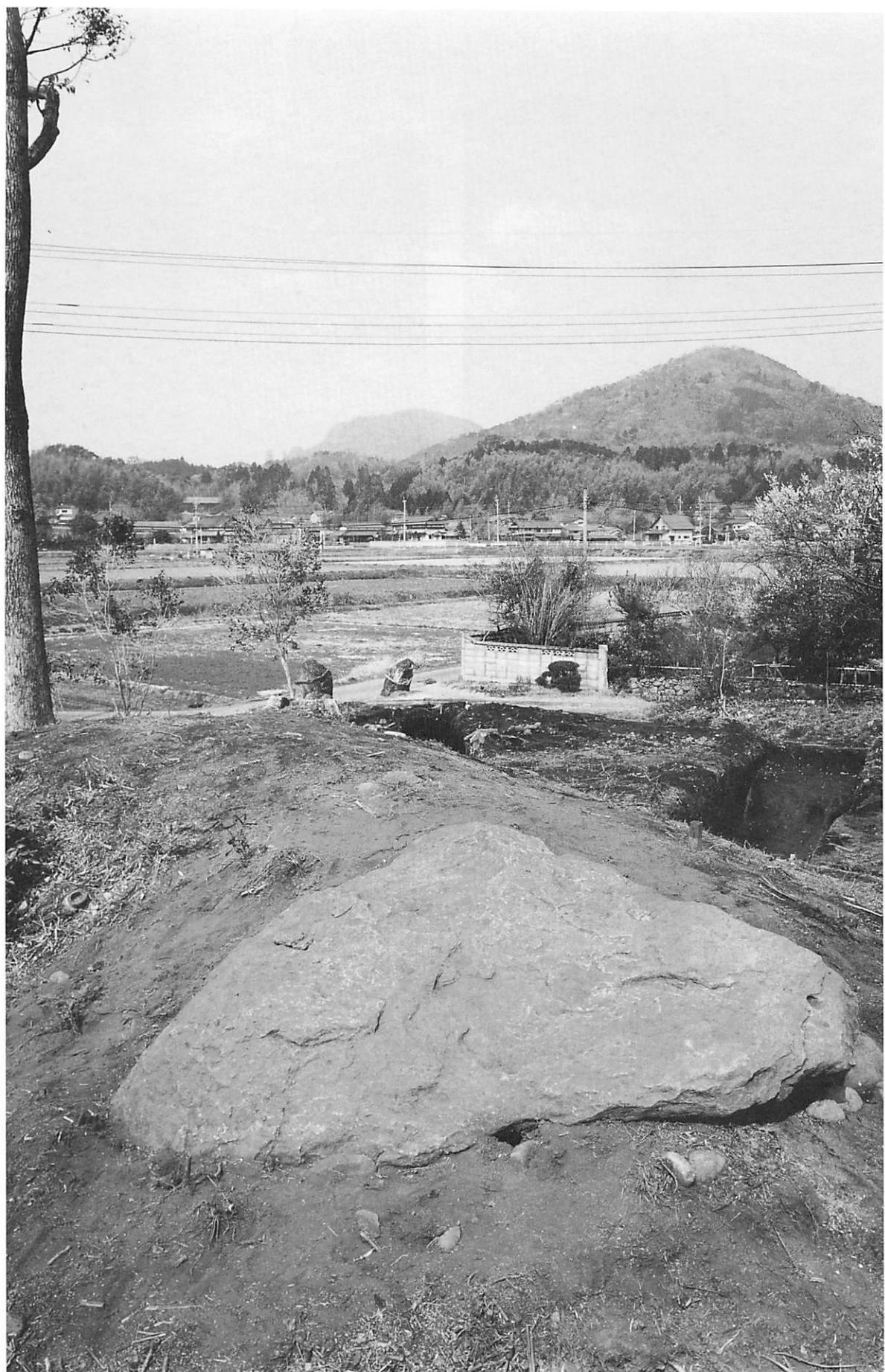
図 版

例 言

本書に使用した石室写真は、熊本県立装飾古墳館が西大寺フォト 杉本和樹氏
(奈良国立文化財研究所所属)に依頼し撮影したものです。

石室・遺物写真に関する著作権・版権は
熊本県立装飾古墳館に帰属します。

なお、航空機による空中写真は
鹿本町教育委員会が依頼し撮影したもので、
著作権・版権は鹿本町教育委員会に帰属します。



PL. 1 御靈塚古墳石室天井石露出状況



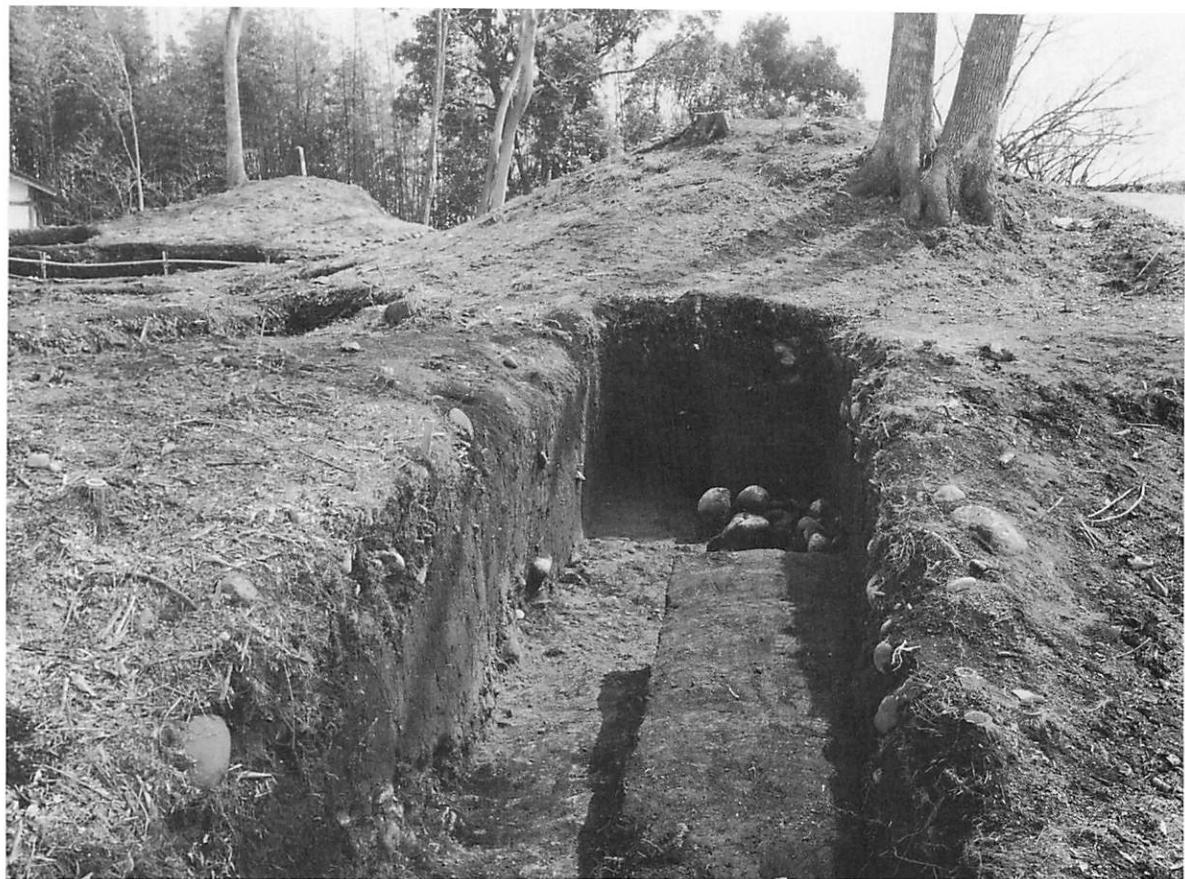
PL. 2 No 1 トレンチ (御靈塚古墳墳丘方向)



PL. 3 No 1 トレンチ墳丘削り出し検出状況



PL. 4 No 2 (手前) No 4・5 トレンチ (奥) (北より)



PL. 5 №3 トレンチ



PL. 6 №3 トレンチ北側土層断面確認状況



PL. 7 №4・5 トレンチ (御靈塚2号墳周溝検出状況)



PL. 8 №8 トレンチ（御靈塚古墳、御靈塚2号墳墳丘間トレンチ土層断面）



PL. 9 御靈塚2号墳（南より）



PL.10 御靈塚 2号墳（横穴式石室露出状況）



PL.11 御靈塚古墳（羨道より玄門部）



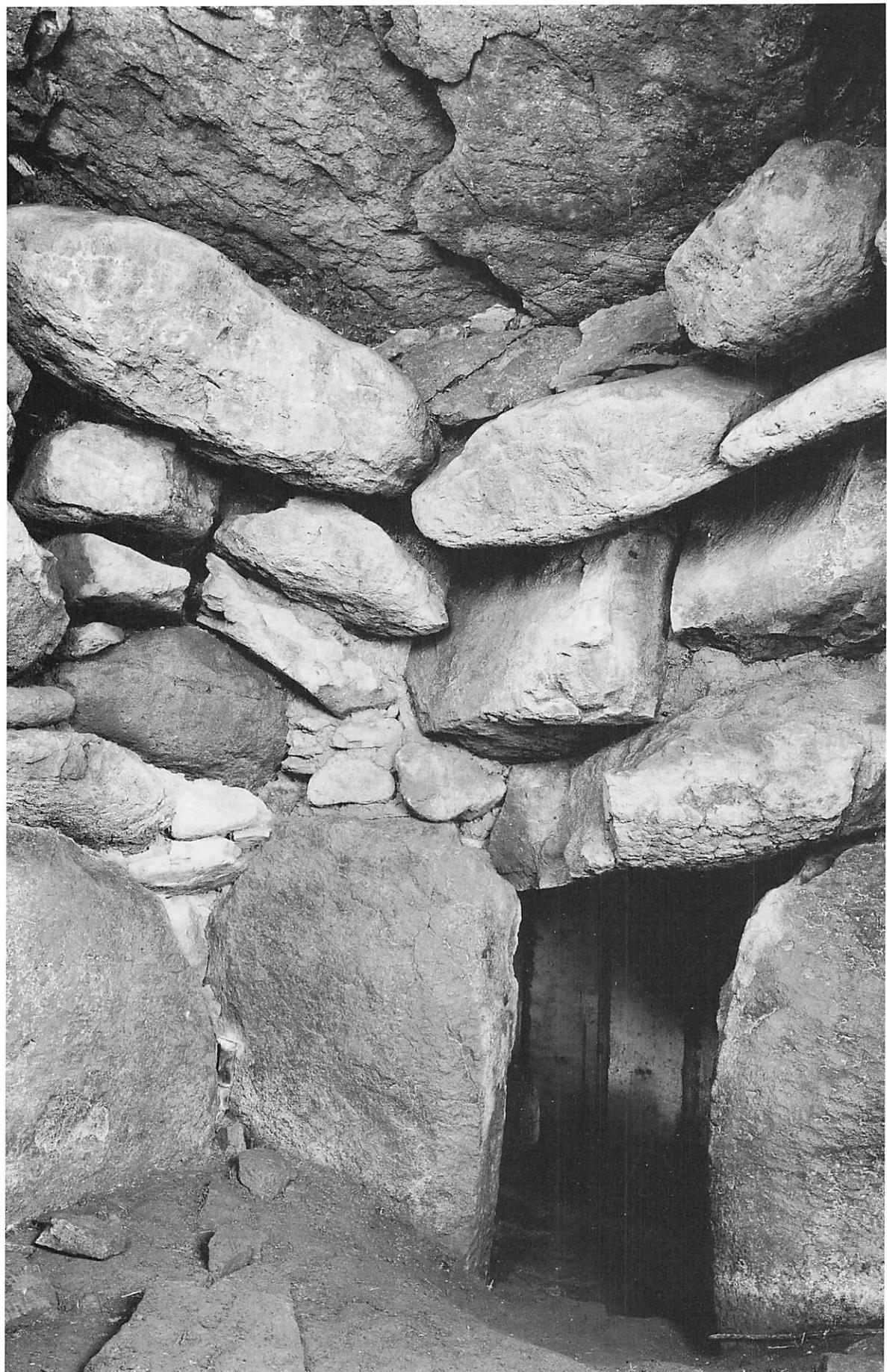
PL.12 御靈塚古墳（玄室より玄門部）



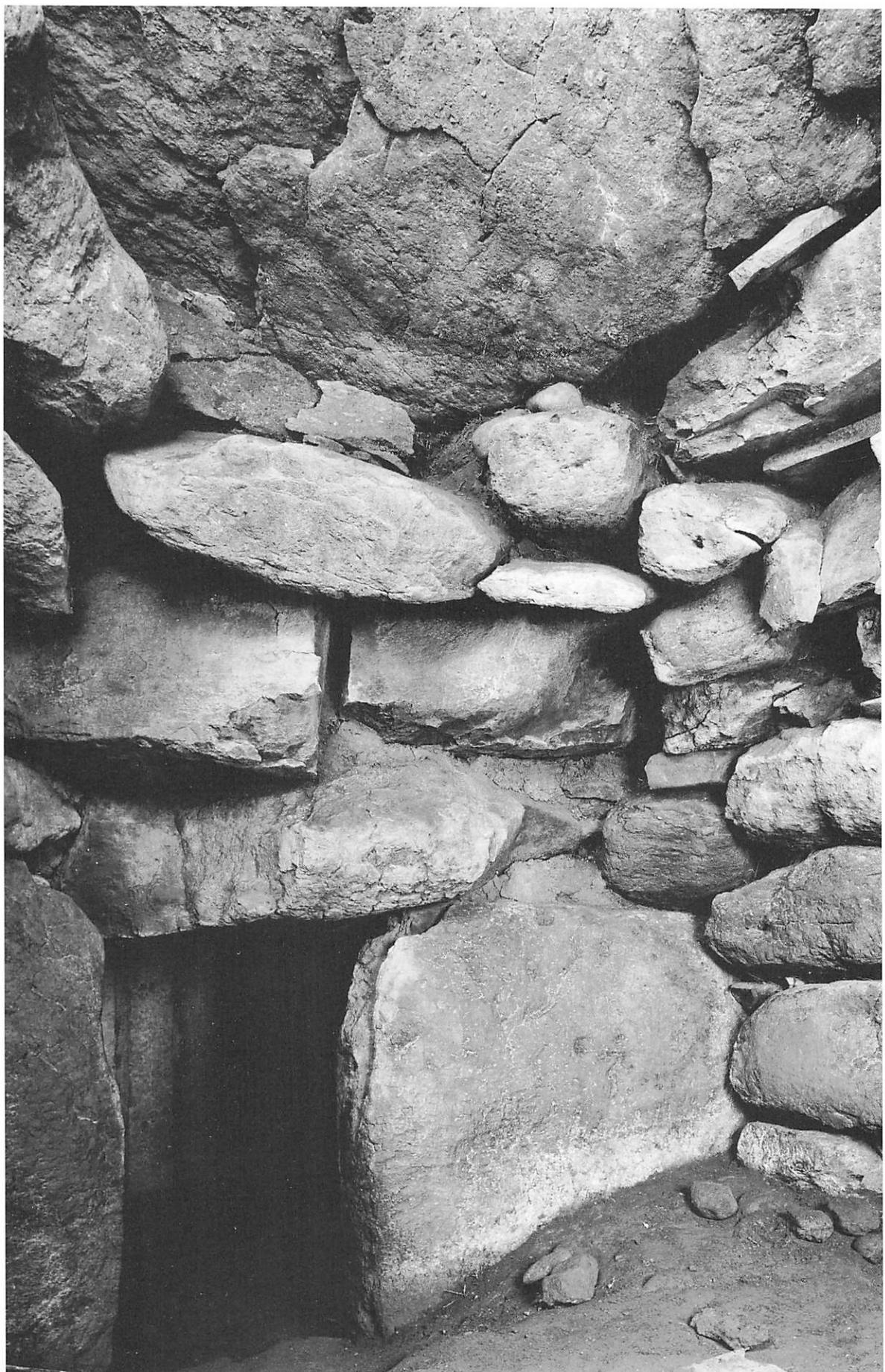
PL.13 玄室奥壁左隅（北西部隅）



PL.14 玄室奥壁右隅（北東部隅）



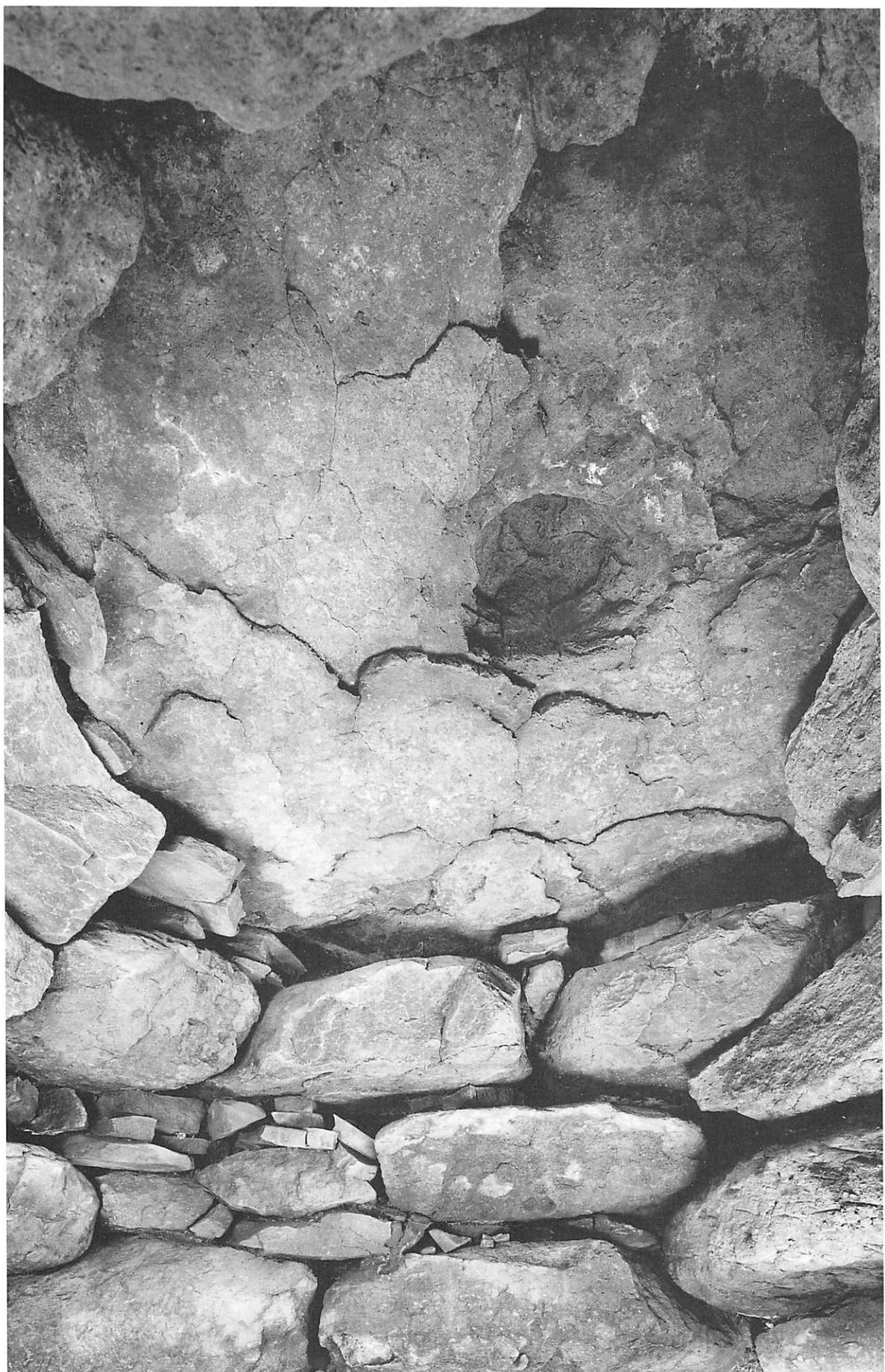
PL.15 玄室右玄門隅（南東部隅）



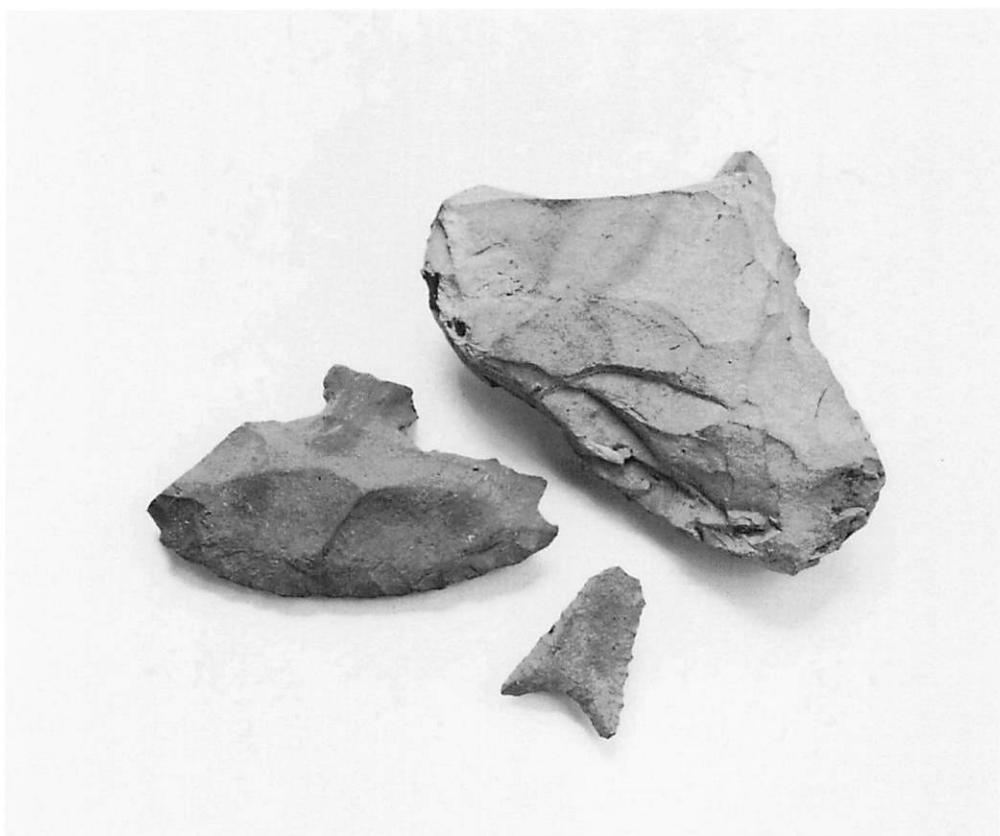
PL.16 玄室左玄門隅（南西部隅）



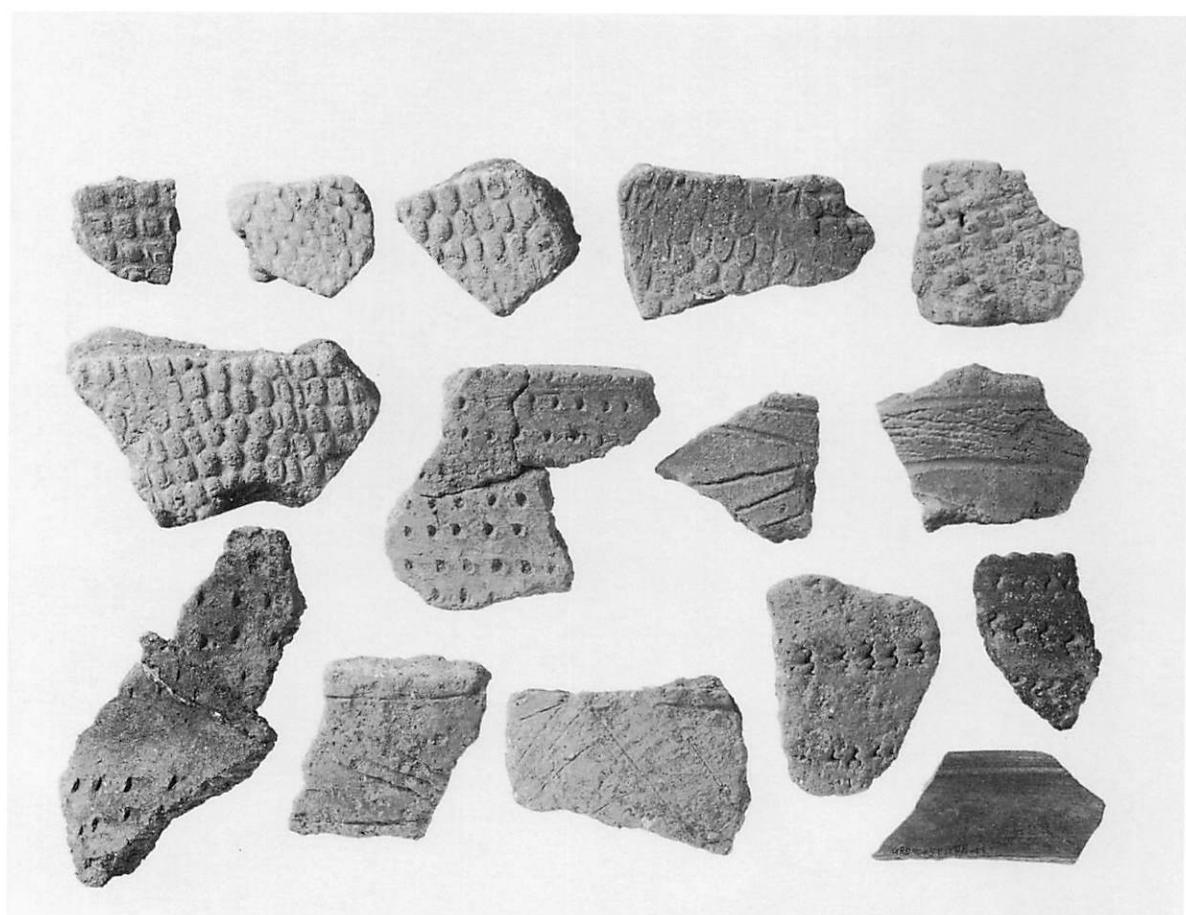
PL.17 玄門より玄室奥壁



PL.18 玄室奥壁から天井部



PL.19 御靈塚古墳出土石器（縄文）



PL.20 御靈塚古墳出土土器（縄文早期・晩期）



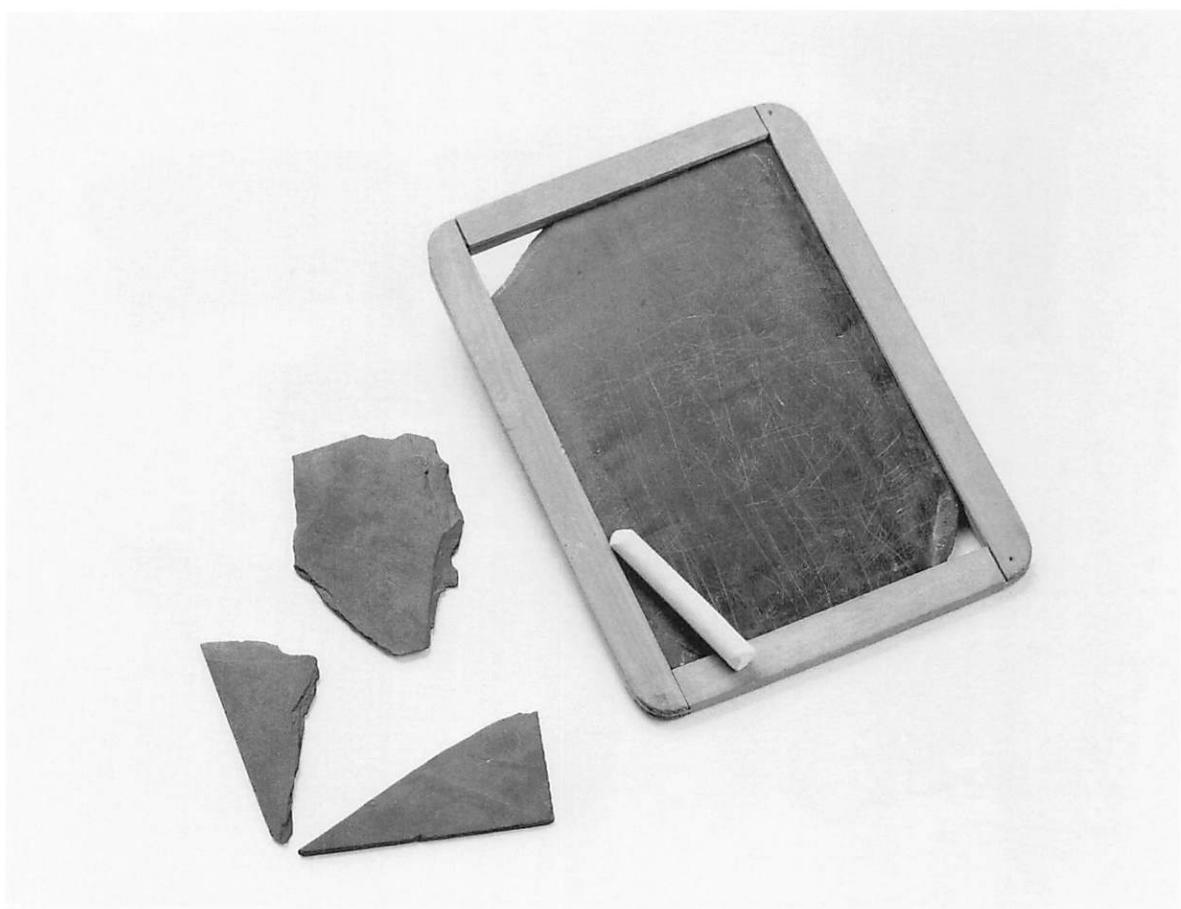
PL.21 御靈塚古墳出土土器（弥生後期）



PL.22 御靈塚古墳出土土器（弥生後期）



PL.23 №4・5 トレンチ出土土器（土師器・高杯、須恵器・堤瓶）



PL.24 №8 トレンチ攪乱内出土石板（右側木枠付は、山下義満氏所蔵）

報告書抄録

ふりがな	けん しせき ごりょうづかこふん						
書名	県史跡御靈塚古墳						
シリーズ名	鹿本町文化財調査報告書						
シリーズ番号	第3集						
編著者名	長谷部善一・岡本真也・藤木聰						
編集機関	鹿本町教育委員会						
所在地	〒861-0392 熊本県鹿本郡鹿本町来民686						
発行年月日	2000年(平成12年)3月31日						
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東緯	調査期間	調査原因
		市町村	遺跡番号				
御靈塚古墳群 御靈塚古墳(1号墳) (御靈塚2号墳)	熊本県鹿本郡鹿本町大字 津袋字広江307	43363		33° 0026	130° 4538	2000.1.17 ~3.31	重要遺跡確認調査
所収遺跡名	種別	主な遺構		主な遺物		特記事項	
御靈塚古墳群 御靈塚古墳(1号墳) (御靈塚2号墳)	古墳	御靈塚古墳 装飾 横穴式石室 御靈塚2号墳 横穴式石室(埋没)		須恵器(提瓶) 土師器(高杯) 縄文早期・晚期土器 弥生中期・後期土器		6世紀後半の彩色系装飾古墳である。装飾壁画は、同心円文・三角文・韁・鞆が描かれる。隣接する御靈塚2号墳でも埋没している横穴式石室を確認。	

印刷仕様

判型 A4判 102頁
組版 写真写植(13級 明朝基本)
製版 スクリーン線200線で製版
用紙 表紙レザック岩はだ170kg
本文コート90kg
製本 無線綴じ

御 父 塚 古 墳

鹿本町文化財調査報告 第3集

2000年（平成12年）3月31日

編集・発行 鹿本町教育委員会

印刷 凸版印刷(株) 九州事業部

文化財調査報告の電子書籍の末尾に挿入する奥付

この電子書籍は、『鹿本町文化財調査報告第3集 県史跡 御靈塚古墳』を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

なお、平成 17 年(2005)に山鹿市、鹿北町、菊鹿町、鹿本町、鹿央町が合併し山鹿市となりました。調査記録及び出土遺物は、山鹿市教育委員会が保管しています。

書名:鹿本町文化財調査報告第3集 県史跡 御靈塚古墳

発行:山鹿市教育委員会

〒861-0592 熊本県山鹿市山鹿 987 番 3

電話: 0968-43-1651

URL:<https://www.city.yamaga.kumamoto.jp/>

電子書籍制作日:2025 年 7 月 10 日